〔末〕 幸會幸會。

〔揖する科〕

〔小生〕 老丈に請問せん、那の霓裳の全譜は、還ほ記得てか。

〔末〕 也還記得、官人は何すれぞ他を問ふや。

〔小生〕 不瞞老丈說、小生は性音律を好み、向に西京に客となり、老丈の朝元閣に在つて、霓裳を演習せられし時、小生は曾て宮牆に傍著ひて、細細に竊み聽き、已に鐵笛を將つて、數段を偷み寫せるも、只是未だ全譜を得ず、各處に訪求ねしが、知る者有る無し。今日幸に老丈に遇ふ、識らず旨て敎を賜はるや否や。

〔末〕 既に知音に遇ふ、何ぞ末技を惜まん。

〔小生〕 如此多感、請ひ問ふ、尊寓は何處ぞ。

〔末〕 窮途流落、尙ほ(三〇)居停に乏し。

〔小生〕 屈げて(三一)舍下に到つて暫く住まり、細細に敎を請ふは如何。

〔末〕 如此甚好。

〔煞尾〕 俺れは一に(三二)驚烏の樹を繞つて、空枝の外に向ふに似たり。誰か承望まん、(三三)舊燕の巢

〔三〇〕居停。居候のこと、まだどちらにも厄介になつて居らぬ意。

〔三一〕舍下。拙宅といふが如し。

〔三二〕驚烏の樹を繞る。魏の武帝の短歌行に、「月明星稀、烏鵲南飛、繞レ樹三匝、何枝可レ依」とあり、旅人の無宿なるに喩ふ。

〔三三〕舊燕の巢を尋ねて。唐の劉禹錫の詩に「舊時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家」の句あり、ここは百姓の家ならず、立派な御殿に歸る意に喩ふ。

を尋ねて畫棟に入り來るを做さんとは。今日箇、(三四)知音は知音の在るに遇ふを喜ぶ。這の相逢は異しい哉。恁のごとき(三五)相投は快い哉。李官人呵、待我れ慢慢的、儞に這の一曲の霓裳を傳へて、千載に播かしむべし。

〔末〕 (三六)桃蹊柳陌、經過するに好し。(張籍)

〔小生〕 聊か復た車を迴して、(三七)薜蘿を訪ふ。(白居易)

〔末〕 今日知音、一たび留聽す。(劉禹錫)

〔小生〕 江南、處として歌を聞かざるなし。(顧況)

〔三四〕知音は知音の在るに。英雄は英雄を知り、好漢は好漢を識る意。

〔三五〕相投。意氣の相投ずること。

〔三六〕桃蹊柳陌。春の野をいふ。

〔三七〕薜蘿。草堂をいふ。

第三十九齣　(一)私祭

〔老旦・貼、道扮して同に上る〕

〔南呂引子〕〔小女冠子〕〔老旦〕　舊時は雲髻(二)宮樣を拋つ。

〔貼〕　(三)古觀に依つて、共に香を焚く。

〔合〕　歎ず、夜來の風雨(四)花を催して葬るを。(五)心を洗つて、好し、細やかに(六)經藏を翻がへさん。

〔老旦〕　寂寂たる(七)雲房、竹扃を掩ふ。

〔貼〕　春泉玉を漱ぎて、響泠泠たり。

〔老旦〕　(八)舞衣施し盡して、餘香在り。

〔貼〕　日に花前に向つて、誦經するを學ぶ。

〔老旦〕　吾は乃ち天寶の舊宮人、永新とは是なり。念奴妹子と與に、難を逃れて宮を出で、直に(九)金陵に至り、女貞觀の中に在つて、女道士と做了りぬ。且つ喜ぶ、十分幽靜にして、儘て(一〇)修持す可し。此間の觀主は、昨西京より、(一一)道藏を購ひ請ひて回り來り、今日は天氣清和なれば、我二人をして經函を(一二)檢曬せしめらる。且つ索に細細に翻閱すべき則箇。

〔場上に先づ經桌を設け、老旦・貼、同に翻すを作す介〕

〔雙調過曲〕〔孝南枝〕〔孝順歌〕　(一三)金函啓き。(一四)玉案張る。風に臨んで細かに繙けば、春晝長し。只見る(一五)塵影の晴光を弄し。靈花空に滿ちて降るを。

〔老旦〕　想ふ當日宮中に在りて、(一六)娘娘の白鸚哥に敎へて、(一七)心經を念誦せしむるを聽きたりしが、若し是れ早く能く道を學ばば、倒つて也た馬鬼の難を免れたりしならん。

〔貼〕　那の熱鬧の時、那箇ぞ肯へて此に想ひ到らんや。

〔老旦〕　便是。昨日觀主の說ふを聽得けば、馬鬼坡の酒家にては、娘娘の錦襪一隻を拾ひ得たるに、還た游人の錢を出して看るを求むる有りと。何ぞ況んや(一八)生前をや。

〔合〕　(一九)雪衣の提唱を枉了うす。是れ(二〇)色にして空に非ず。誰か(二一)法

〔一〕私祭。追善供養の場。
〔二〕宮樣。御殿風の意。むかしは宮中につとめて、宮樣の髻を結びし意。
〔三〕古觀。道觀のこと。
〔四〕花を催す。花を落とす意。
〔五〕心を洗ふ。心を清める意。
〔六〕經藏を翻へす。藏經をはぐること、讀經の意。ここにては蟲乾をいふ。
〔七〕雲房。道房をいふ。
〔八〕舞衣施し盡し。舞衣は盡くなくしたれども、餘香はなほ存する意。
〔九〕金陵。南京の古名。

〔一〇〕修持。修眞、修行の意。
〔一一〕道藏を購ひ請ひ。第三十六齣、看襪に應ず。
〔一二〕檢曬。蟲乾しすること。
〔一三〕金函。經の函をいふ。
〔一四〕玉案。經の桌をいふ。
〔一五〕塵影の云云。塵埃のたちのぼりて、ちらちらと、日に映じ、さながら花を降らす如きをいふ。靈花とは、昔高僧の法を說きしに、天女が感動して、花を降らせし故事をいふ。
〔一六〕娘娘。貴妃をいふ。
〔一七〕心經。般若心經をいふ。
〔一八〕生前をや。死後さへ、人にもてはやさる、何ぞ況や、生前の富貴は人の羨む所にして、その熱鬧の際に、とても馬鬼の不幸などは、思ひもよらぬ意をいふ。
〔一九〕雪衣。雪衣娘。貴妃の愛せる白鸚哥のこと。貴妃夢に

相を觀んや。

〔瑣南枝〕 贏ち得たり、錦襪の香の殘るも。猶行人の想を動かすを。

〔雜、道姑に扮し茶を捧げて上る〕

玉經日下に曬し。香茗(二二)雨前に烹る。二位の仙姑、經を檢べて困乏了しならん。觀主は我をして茶を送らしめて、此に在り。

〔老旦・貼〕 勞動了。

〔茶を飲むを作す介〕

〔雜〕 阿呀、一片の黑雲起り來る、要下雨哩。

〔老旦・貼〕 快く經函をば收拾けん。

〔收拾くるを作す介〕

〔雜〕 爾看、鶯は亂れ飛んで、草は正に芳し。恰も好し、(二三)清明に應りて雨の飄蕩るを。

〔下る〕〔場上にて、經桌を收むる介〕

〔老旦〕 是れ小道姑の說ひ起すに不れば、倒つて今日は是れ清明の佳節なるを忘れたり。此時家家(二四)墓を掃ひ、戶戶錢を燒く。妹子よ、我爾

白鷯哥の羽翅の零落せるを見て大に驚く、是れ貴妃を提醒する意なりしが、貴妃は猶覺らざりき。

【二〇】 色にして空に非ず。色慾に拘はれて、空理を覺らざる意。

【二一】 法相。佛理をいふ。

【二二】 雨前。茗茶の名、ここは日下に對して用ふ。

【二三】 清明。彼岸の頃に當る、花盛りなり。

【二四】 墓を掃ひ、錢を燒く。清明には墓參をなし、紙錢を燒く風俗あり。

【二五】 哭奠。追善供養をすること。

【二六】 當得的。當然なすべきことの意。

【二七】 位。位牌のこと。

【二八】 供。供養すること。

【二九】 下場沒し。終りがなきこと、風流韻事が急に中斷した

と向きに娘娘の恩を受け、報答するに從無し。就ち一陌の紙錢、一杯の清茗を把つて、遙に長安を望み、(二五)哭奠一番せば、多少是れ好からん。

〔貼〕 姐姐、這是(二六)當得的、待、我れ(一)箇の牌位兒を寫して、供養せん。

(二七)〔位を寫して(二八)供ふるを作す介〕〔同に拜して哭する介〕

娘娘呵。

〔前腔〕 想著へば、爾の恩は罄くし難く。恨は怎んぞ忘れん。風流陡然(二九)下場沒し。那裏ぞ是れ(三〇)西子は吳を送つて亡さんや。錯寃つて、(三一)宗周は褒の爲めに喪ぶと做す。

〔貼〕 呀、庭下の牡丹、雨中に一朶を開了けり。此花は最も是れ娘娘の愛せし所なれば、不免や、折り來つて位前に供在せん。

〔合〕 (三二)名花は恙無きに。傾國の佳人は。先づ(三三)黃壤に歸す。總ひ麥飯香醪有りとも。澆ぎ到らず、(三四)孤墳の上。

〔哭して叫ぶ科〕

我が那の娘娘呵。

ることをいふ。

【三〇】 西子は吳を亡さんや。西施が吳を亡ぼしたのではない、吳王が色を好んで、政を怠つたのであつて、西施が居なくても吳は滅ぶのが當然であるといふ意。唐人の詩に、「家國興亡自有レ時、吳人枉了怨二西施一、西施若解レ亡二吳國一、越國亡時又是誰」とあるに基づく。

【三一】 宗周は褒の爲に喪ぶ。周の幽王は褒姒を嬖し、終に周を滅せり。ここはこの意を逆用して、周の亡びしも、褒姒の罪に非ずとなし、以て貴妃の寃を解くなり。宗周は周の本家をいふ。

【三二】 名花傾國。李白の清平調に、「名花傾國兩相歡、常得二君王帶レ笑看一」の句あり、名花は牡丹。傾國は貴妃をいふ。

【三三】 黃壤。黃土に同じ。

(三五)只落得、(三六)望んでは眸を斷ち。叫んでは腸を斷ち。涙は泉の如く。哭聲放つ。

〔唔と下る〕〔末、行き上る〕

〔鎖南枝〕 江南の路。偶ま(三七)芳を踏む。花間雨過ぎて、客の裳を沾す。老漢は李龜年なり。幸に李謦官人に遇ひ、相留めて家に在り。今日は清明の佳節なれば、門を出でて、閒步一回せるに、(三八)却好、風雨に撞著ふ。

懊恨す、(三九)故國雲迷ひ。白首低れて望み難し。

且つ喜ぶ、一所の道院の此に在るを。不免や、進去んで雨を避くること片時せん。

〔進むを作す介〕

松影閒に。鶴唳長し。且自暫く徘徊す、石壇の上。

儞看、座に(四〇)群眞を列ね、經は萬卷を藏す。好だ莊嚴ならずや。

〔牌を看て念ずるを作す介〕

皇唐の貴妃楊娘娘の靈位。

〔哭する介〕

【三四】孤墳。馬嵬の孤墳を、人の弔ふなきを傷む意。
【三五】只落得。結果となる意。
【三六】望んでは眸を斷ち。望斷の意。望みつくし、泣きはらすをいふ。
【三七】芳を踏む。芳草を踏むこと、散步の意なり。
【三八】却好。生憎の意。
【三九】故國雲迷ふ。戰亂の意。
【四〇】群眞。群仙人をいふ。

哎喲、楊娘娘、想はざりき這裏にて、(四一)顚倒つて人の供養するあらんとは。

〔拜する介〕

〔前腔〕〔換頭〕 一朝身をば喪ひて。千秋恨を抱いて長し。

〔老旦・貼、一面に上る〕

那箇か啼哭ける。

〔看て驚くを作す介〕

這の人は好だ(四二)李師父の模樣に似たり。怎生ぞ此に到れるや。

〔末〕 恨殺む、六軍の跋扈。生ながら君后に逼得つて、分離せしむ。奇變天壤を驚かす。

憐む可し、小人(四三)李龜年は、

〔老旦・貼〕 原來果是して李師父なり。

〔末〕 (四四)令節に逢つて一觴を奠むること能夠はず。沒揣的、仙宮を過ぎて、(四五)靈爽を拜す。

〔老旦・貼、出でて見る介〕

李師父、弟子每稽首す。

【四一】顚倒。倒に同じ。
【四二】李師父。師匠をいふ。
【四三】李龜年は。語は後句に續くなり。
【四四】令節。清明の佳節をいふ。
【四五】靈爽。靈魂のこと、爽は陽氣なり、魂は天に昇りて陽に屬し、魄は地に降りて陰に屬す。

〔末〕姑姑は是れ誰ぞ。

〔驚いて認むるを作す介〕

呀、永・念二娘子にあらざるか。

〔老旦・貼〕正是。

〔各涙する介〕

〔末〕儞兩箇は、幾時此に到れるや。

〔老旦・貼〕師父、請坐。我毎は去年難を逃れて南に來り、出家して此に在り。師父は何に因つて、也た這裏に到れるや。

〔末〕我も也た難を逃るるに因つて、江南に流落し、前に(四六)鷲峰寺中に在つて、李謦官人に遇著ひ、他の欵留して家に到るを承け、想はざりき、又儞二人に遇はんとは。

〔老旦・貼〕(四七)那箇の李謦官人ぞ。

〔末〕說ひ起せばまた奇なり。當日我儞毎と(四八)朝元閣上に在つて、霓裳を演習せるに、想はざりき、這の李官人は、就ち宮牆の外面に在りて竊み聽き、鐵笛を把り來りて、新聲數段を偸み記し、如今我を要して、全譜を傳授せしむ。故に此に相留まるなり。

〔老旦・貼〕悲しむ介〕

【四六】鷲峰寺。前齣に出づ。
【四七】那箇李謦官人。李謦官人とはどなたといふ意。
【四八】朝元閣上。偸曲の齣に詳なり。

唉、霓裳の一曲は、倒つて流傳するを得たるに、想はざりき、譜を製くりし人は、已に地下に歸し、我毎曲を演ずる的さへも、也た都て他鄉に流落せり。好だ人を傷感ましむるかな。

〔各、悲しむ介〕

〔供玉枝〕〔五供養〕〔老旦・貼〕之を言へば痛傷す。記す、華清に侍坐して。同に霓裳を演じ。(四九)玉纖秘譜を抄し。(五〇)檀口新腔を敎へしを。

〔玉交枝〕他は今日青青として、墓頭新草長く。我は飄飄として、陌路に(五一)楊花蕩く。

〔五供養〕〔合〕驀地相逢ふ處、各(五二)裳を沾ほす。

〔月上海棠〕(五三)白首(五四)紅顏、對して興亡を話す。

〔末〕且つ喜ぶ、天色の晴霽るを。我告辭せん。

〔老旦・貼〕且自消停。師父に請問せんに、梨園の舊人は、都て怎麼樣了ぞ。

〔末〕賀老は我と同行せしが、途中にて病んで(五五)故し。黃旛綽は駕に隨つて去り、馬仙期は陷つて城中に在り、(五六)下落を知らず。只だ雷海青の賊を罵つて死せる有り。

〔前腔〕追思すれば、上皇の澤は梨園に遍く。(五七)若箇で能く(五八)償はんや。

【四九】玉纖。玉指に同じ、ほそく美しき手の指をいふ。
【五〇】檀口。美しき口をいふ。
【五一】楊花蕩く。零落をいふ。蕩は韻字なり、飛ぶ意なり。
【五二】裳を沾ほす。流涕をいふ。
【五三】白首。李龜年をいふ。
【五四】紅顏。永新・念奴をいふ。
【五五】故。物故の意、死ぬこと。
【五六】下落を知らず。落ち行く先きが分らぬこと。
【五七】若箇。這箇那箇の如し。
【五八】償。恩に報ゆる意。

〔泣く介〕
那の雷老呵。
他が忠魂は、(五九)白日昭なり。我遺老を羞殺しめて斜陽に泣かしむ。
〔老旦・貼〕師父曉得可し、秦・虢二夫人は、都て亂兵に殺死されたり。
〔末〕便是。
(六〇)朱門の麗人は都て傷む可し。(六一)長安の曲水、誰か遊賞せん。
〔合〕驀地相逢ふ處、各裳を沾ほす。白首紅顏、對して興亡を話す。
〔老旦・貼〕知らず、萬歲爺は、何日か回鑾りたまはん。
〔末〕李官人は向きに西京に在りしが、近ごろ郭元帥の長安を復して、兵戈の寧息せしに因り、方始めて歸るを得たれば、想ふに上皇も、不日也た就ち回鑾りまさん。
〔老旦・貼〕(六二)如此謝天地。
〔末〕日晩れて途遙かなれば、就此去かん。
〔老旦・貼〕待、娘娘の與に紙錢を焚き、(六三)素齋少敍せん。
〔末〕南に來りて今祇、一身存す。(韓愈)

【五九】白日昭なり。日月と光を爭ふ意。
【六〇】朱門。富貴の家をいふ。
【六一】長安の曲水。第五齣、禊游に詳なり。
【六二】如此謝天地。永新念奴等の至情を見る、忠厚の至りなり。
【六三】素齋少敍。御飯を食べて御話し下さいの意。

〔老・貼〕新に換ふ霓裳(六四)月色の裙。(王建)
〔末〕人生幾回か、往事を傷む。(劉禹錫)
〔老・貼〕(六五)落花の時節、又君に逢ふ。(杜甫)

【六四】月色の裙。美しき形容なり。
【六五】落花の時節。杜甫の李龜年に贈る詩句(前出)を用ひたるは、極めて宜し。

第四十齣　(一)仙憶

〔旦、(二)仙扮し、老旦、仙女に扮し隨つて上る〕

〔南呂引子〕(三)〔掛眞兒〕(四)鶴に駕し鸞に驂し、去つて返らず。空しく首を回らせば、天上人間。(五)端正樓頭。長生殿裏。往事情に關して限り無し。

〔浣溪紗〕縹緲として雲は深く、(六)玉房を鎖す。初めて仙籍に歸りて、意茫茫たり。頭を回らせば、未だ思量を費すを免れず。忽ち見る(七)瑤階琪樹の裏。(八)彩鸞の棲む處、影雙雙。幾番か(九)拋却して、又(一〇)腸を牽く。我れは楊玉環なり。幸に(一一)玉旨を蒙りて、復び仙班に位し、仍ほ蓬萊山の太眞院中に居る。只だ是の(一二)定情の物は、身暫くも離さず。(一三)七夕の盟は、心相負き難し。提起來せば、好だ話長ならずや。

〔高平過曲〕〔九廻腸〕〔解三酲〕奈何ともするなく、(一四)一時分散す。那其間、(一五)多少相關せんや。死と生と、割けども斷えず。情腸の絆。空しく堆積して、恨は山の如し。(一六)他那裏、舊緣を思牽して、愁了らず。(一七)俺這裏、淚殘魂に滴つて、血未だ乾かず。空しく嗟嘆するのみ。

〔三學士〕(一八)比目を成さずして、先づ難に遭ひ。鴛鴦を折きて、(一九)甚の仙班と說はん。

〔釵盒を出して看る介〕

這の金釵鈿盒を看れば、情猶ほ在り。早くも難道、(二〇)地久天長の盟、竟に寒めんや。

〔急三鎗〕何の時か(二一)青鸞を得て。便ち緣をば重ねて續ぎ。人は重ねて會ひ、兩下愁煩を訴へんや。

〔貼、上る〕

【一】仙憶。貴妃懷舊の場。
【二】仙扮。貴妃登仙の姿をいふ。
【三】【掛眞兒】大意に云ふ、鶴に駕し鸞に驂して登仙し、さて振りかへつて天上人間を見渡せば、ありし昔、端正樓や長生殿にて、明皇の恩愛を受けしことが、思ひ起されて情は盡くる所なしと。
【四】鶴に駕し、鸞に驂し。登仙すること、第三十二齣、哭像に出づ。
【五】端正樓。唐宮の名。
【六】玉房。玉殿に同じ、仙宮をいふ。
【七】瑤階琪樹。天宮をいふ。
【八】彩鸞の影雙雙。夫婦に喩ふ。
【九】拋却。情を拋つこと。
【一〇】腸を牽く。忘れんと欲して、忘るる能はず、心にからまる意。
【一一】玉旨。玉帝の旨をいふ。
【一二】定情の物。金釵鈿盒をいふ、第二齣、定情に出づ。
【一三】七夕の盟。世世生生夫婦となる盟、第二十二齣、密誓に出づ。
【一四】一時分散。馬嵬の悲劇をいふ。
【一五】多少相關せんや。殆ど關係のなきこと、分散の事情は如何ともする能はざるをいふ。唯この心のみは生死變らず、常に纏綿する意なり。
【一六】他那裏。人界、明皇をいふ。
【一七】俺這裏。仙界、貴妃をいふ。
【一八】比目。比目の魚、夫婦に喩ふ、明皇と貴妃と、比目の契を全うせず、夫婦離別をなしたる意。
【一九】甚の仙班。仙班といふも何ぞ、夫婦離別しては、何も仙班の價値なき意。
【二〇】地久天長。天長地久、比翼連理の盟をいふ、密誓の齣に出づ。
【二一】青鸞。青鳥に同じ、西王母の使をなすといふ、卽ち鸞駕を以て明皇を迎ふる意。

試に蓬萊山の頂に上りて望めば。海波清淺にして鶴飛び來る。自家は(二二)寒簧にて、月主娘娘の命を奉じ、太眞玉妃に與て、霓裳の新譜を索め取らんとす。來此已是なれば、不免や徑に入らん。

〔進んで見ゆる介〕

玉妃稽首。

〔旦〕仙子は何來。

〔貼、笑ふ介〕

玉妃は、還ほ我寒簧を認得めらるるか。

〔旦、想ふ介〕

哦、月中の仙子には莫非るか。

〔貼〕然也。

〔旦〕請坐了。

〔貼、坐する介〕

〔旦〕夢中に一別してより、覺えず數年なり。今日遠く臨まる、乞ふ來意を道よ。

〔貼〕玉妃聽啓へ。

〔清商七犯〕〔簇御林〕只だ霓裳の樂、廣寒に在り。靈心の譜をば、細かに翻せしを羨むが爲に。

【二二】寒簧。月宮の仙女、第十一齣　開樂に出づ。

特に月主娘娘の命を拜して。

〔鶯啼序〕(二三)知音を訪ねて、遠く蓬山を叩き。當年の圖譜を借りて、親しく看んとす。

〔旦〕原來爲此。當日幸に夢裏より、仙音を聽くを獲て、摹して管絃に入ると雖然も、尙ほ(二四)依稀として錯誤らんことを愧づ。

〔高陽臺〕何ぞ(二五)蟾宮より、謬つて(二六)遺調をば揀ぶを煩はさんや。我尋思起せば、轉た自ら潸潸たり。

〔淚する介〕

〔貼〕呀、玉妃何すれぞ、淚を掉下ひ來れる。

〔旦〕〔降黃龍〕痛む、我が(二七)刦を歷、磨に遭ひて。(二八)宮冷え商殘なはれしを。

〔二郎神〕(二九)朱絃已に斷ゆ。此調をば重ねて彈ずるを羞づ。仙子を煩はして、月主に轉奏說しめん、我が(三〇)塵凡の舊譜は、命に應ずるに堪へざれば、伏して矜宥を乞ふと。

〔貼〕玉妃、固く拒むを休得よ。我が月主娘娘呵、爾の聰明、世に絕して罕に。

【二三】音樂に精通せる人、貴妃をいふ。

【二四】依稀。彷彿の意、似て非、あはぬこと。

【二五】蟾宮。月宮をいふ。

【二六】遺調。人間に遺されし調子といふ意。

【二七】刦を歷、磨に遭ふ。艱難に出會ふこと、刦は阨災をいふ。

【二八】宮冷え商殘ふ。音律の調子が亂るる意。

【二九】朱絃已に斷ゆ。夫婦の緣の斷れしことに喩ふ。

【三〇】塵凡。下界をいふ。

〔集賢賓〕 (三一)新聲を度して、(三二)人間を占斷せるを慕ひ。觀るを求めて晩きを恨む。雲中の(三三)青盼に辜負くこと休れ。

〔旦〕既に月主の下訪を蒙らば、前に仙山に到れる時、偶然追憶し、一本を寫出して此に在り。

〔貼〕如此甚好。

〔旦〕侍兒、可去取來。

〔老旦、應じて下り、取つて上る〕

譜在此。

〔旦、接くる介〕

仙子、譜は取り到ると雖も、只是還ほ須らく謄寫して纔に好かるべし。

〔貼〕爲何。

〔旦〕儞看呵。

〔黃鶯兒〕字は(三四)闌珊。(三五)糢糊として(三六)斷續。都て染み就す、淚痕の斑。

〔貼〕這却不妨。

〔旦、譜を付す介〕

如此、卽ち月主に呈上するを煩はす。說へ、夢中竊に聽きて、音節訛多ければ、還ほ改正を求むと。

【三一】新聲を度す。度は譜を製すること。
【三二】人間を占斷す。人間界第一なるをいふ。
【三三】青盼。青眼盼望の意、希望をいふ。
【三四】闌珊。そろはぬこと。
【三五】糢糊。ぼんやり、明白ならぬこと。
【三六】斷續。斷えて續かぬこと。

〔貼〕領命。就此告別。

〔貼〕初より直に到る、曲成るの時。(王建)

〔旦〕爭でか姮娥の、子細に知るを得ん。(唐彥謙)

〔貼〕怪しむ莫れ殷勤、此曲を悲しむを。(劉禹錫)

〔旦〕月中(三七)豔を流して、誰と與にか期せん。(李商隱)

〔貼、譜を持つて下る〕

〔旦〕(三八)侍兒、洞門を閉上ち、我に隨つて進み來れ。

〔老旦、應じ、隨つて下る〕

【三七】豔を流す。豔詞のこと。
【三八】侍兒云云。下場詩の後に說白のあるは例外なり。

第四十一齣　見月

〔雜、四將に扮し、二內侍、生の馬に騎るを引き、丑、隨つて行き上る〕

〔仙呂入雙調過曲〕〔雙玉供〕〔玉胞肚〕〔合〕(一)重華迎へ待つて、歸程を促し。(二)回鑾の仗をば排す。(四)南京を離れて、(五)鵑の啼くを聽かず。怕らくは西京に、尙ほ(六)鴻の哀むあるを。

〔五供養〕喜ぶ、(七)山河未だ改まらず。復た這の(八)皇圖の風采を覩るを。

〔衆百姓、上り跪いて接する介〕

扶風の百姓、(九)老萬歲爺を迎接す。

〔生〕(一〇)生受儞們。回去。

〔百姓、叩頭して萬歲と呼んで下る〕〔生・衆、行く介〕

〔玉胞肚〕紛紛たる父老、競つて街を攔り。叩首して、齊しく萬歲と呼び來る。

〔一〕見月。明皇月に對して、貴妃を思ふ場。
〔二〕重華。舜の諱、明天子に喩ふ、肅宗が上皇を迎へ待つことをいふ。
〔三〕回鑾の仗。還幸の儀仗をいふ。
〔四〕南京。蜀の成都をいふ。
〔五〕鵑の啼く。蜀中に杜鵑多し、故に云ふ。
〔六〕鴻の哀む。哀雁の聲を聞いて、更に貴妃を思ふ意。
〔七〕山河未だ改らず。山河の滅びざること。
〔八〕皇圖。大唐をいふ。
〔九〕老萬歲爺。上皇をいふ。
〔一〇〕生受。御苦勞、大儀の意。

〔丑〕萬歲爺に啓あぐ、天色已に晚ければ、請ふ、鑾輿は就ち(一一)鳳儀宮に在りて、駐蹕せられんことを。

〔生、馬より下る介〕

衆軍士、外廂に伺候せよ。

〔軍〕領旨。

〔下る〕〔生、進む介〕

高力士、此は馬嵬を去ること、還ほ多少の路あるか。

〔丑〕只一百多里あり。

〔生〕前已に旨を傳へて、該地方官をして妃子の新墳を建造せしめたれば、爾星夜前み往き、工程を催督して、朕が到る時、改葬するを候つべし。

〔丑〕領旨。暫く鳳儀を辭して去り。先づ馬嵬に向つて行く。

〔下る〕〔內侍、暗と下る〕

〔生〕西川に(一二)出狩して、乍ち東に歸り。離宮に駐蹕して、(一三)夕暉に對す。記し得たり去年、(一四)麥飯を嘗めしを。一回追想して、一たび衣を沾す。

〔一一〕鳳儀宮。離宮の名、第二十六齣、獻飯に出づ。
〔一二〕出狩。巡狩の意、行幸をいふ。
〔一三〕夕暉。夕陽に同じ。
〔一四〕麥飯。郭從謹の獻ぜし所獻飯の齣に詳なり。

寡人蜀中に幸してより、覺えず一載有餘、幸に喜ぶ、西京の恢復せられたるを。回つて此間に到れば、儞看、離宮は寥寂、暮景は蒼涼たり。好だ人を傷感めずや。

〔攤破金字令〕　黄昏近し。庭院に(一五)微靄凝り。清宵靜かなり。鐘漏(一六)虛籟に沈む。一箇の(一七)愁人、誰有つて愀保せん。己自ら(一八)消し難く、受け難し。那んぞ堪へんや、牆外。又這の(一)輪の明月を推將し來るに。寂寂として、空階を照し。淒淒として、碧苔を浸す。獨歩んで哀を增し。雙淚頻りに揩ふ。千思萬量(一九)佈擺する沒し。

寡人這の(一)輪の明月に對著して、妃子の冷骨荒墳を想ひ起し、愈〻傷心を覺ゆるなり。

〔夜雨打梧桐〕　(二〇)霜の般く白く。雪の樣に皚し。照し到らず、冷かなる墳臺に。好だ傷懷。獨り(二一)嬋娟に向つて陪待し。驀地回思ふ當日、(二二)儞と偶爾ま離開し。一時半刻も、也た打捱へ難きに。何ぞ況んや是れ、今朝永く(二三)幽明界を隔つるをや。

〔泣く介〕

【一五】微靄凝り。うすもやがたつこと。
【一六】虛籟に沈む。鐘聲が風に消ゆる意。
【一七】愀保せん。誰もかまはぬ意。
【一八】消し難く受け難し。こらへられぬ意。
【一九】佈擺する沒し。安排する能はざる意、千萬無量の感慨をやるせなきこと。
【二〇】霜の般く白く。月色の明なるをいふ、地を照らして明るき月も、貴妃の墓の中までは、照さないと歎する意。
【二一】嬋娟、月をいふ。
【二二】儞と偶爾ま離開し。貴妃と偶然分離せしこと、虢國夫人との紛糾をいふ、第八齣、獻髮に詳なり。
【二三】幽明界を隔つ。生死を隔つる意。

我が那の妃子呵、當初儞と釵盒もて(二四)情を定めたるに、豈に料らんや、遂に殉葬の物とならんとは。歡娛再びせず。只だ這の盒釵。怎んぞ人間に向つて(二五)守らず。翻つて地下に埋れしむるや。

〔歎ずる介〕

咳、妃子、妃子、想へば儞の生前の音容は昨の如し、我をして怎生ぞ(二六)忘記れしめんや。

〔攤破金字令〕(二七)〔換頭〕　他の嬌嚬妍笑を說ふを休めよ。風流復び偕にせず。就是ひ(二八)顏を頹めて微しく怒り、淚眼擡ぐるに慵きも。便ち千金、何處にか買はん。縱し別に佳人、一般の姿態有るも。怎んぞ伊の情投じ意解け。恰も人の懷に可きに似ん。思量うて此に到れば、(二九)呆打孩。我想ふに、妃子既に沒し。朕が此の一身は、生くと雖も猶ほ死せるがごとし。倘し死後重ねて逢ふを得ば、(三〇)獨り活くるより强如らざる可きか。

(三一)孤獨、形骸を愧ぢ。餘生、死も亦該る。唯只願はくは、速に塵埃を離れ。

【二四】情を定む。夫婦約束の意。
【二五】守る。約束を守る意。
【二六】忘記。忘る意。
【二七】【換頭】大意に云ふ、貴妃の嚬笑の愛嬌はいはずもがな、されど風流は再び偕にするを得ず、たとひ顏を赤めて怒を帶びたるところでも、又眼に淚を浮べて、しほれたるところでも、一段の風情あり、千金を投じても、何處にても買ふことは出來ぬ。よしや別に同じく美しき佳人ありとも、とても貴妃のうちとけて情意投合し、如何にも自分の氣に入つたのに及ぶものはない、思うて此に至れば、茫然として自失するあるのみ。
【二八】顏を頹めて云云。梅妃との紛糾をいふ、第十九齣、絮閣に詳なり。

早く泉臺に赴いて。伊と地中に連理をば栽ゑんことを。

記し得たり、當年の七夕、妃子と同に女牛に祝り、共に密誓を成ししに、豈知らんや、今宵の月下、單に朕一人を留めて、此に在らんとは。

〔夜雨打梧桐〕長生殿、嘗て階を下り。細語して香腮に倚り。兩情諧ひ。生生の恩愛を結ばんことを願ひしに。誰か想はんや、那の夜は(三三)雙星同に照ししに。此夕は(三三)孤月重ねて來り。時移り境易りて、人事改まらんとは。

月兒、月兒、我想ふに密誓の時は、儞もまた、一同聽見(三四)けり。

記す、鵲橋の河畔。也た儞姮娥の在る有りしを。如何ぞ(三五)斷賴するや。索應該に他の牛と女とを擅掇して、咱が盒と釵とを完成せしむべし。

〔內侍上る〕

〔三一〕呆打孩。茫然自失の狀、ぼかんとすること。

〔三二〕獨り活くる云云。獨りでわびしく暮らすよりも、死んで夫婦になつた方が、ましであるとの意。

〔三三〕孤獨形骸を愧ぢ云云。獨りこの世にながらへて、自分の形骸を愧ぢ、餘生は惜しむに足らず、死するも當然である、願くは早く塵の世を逃れ出で、冥途に赴いて、地下で夫婦になりたしといふ意なり。

〔三三〕雙星。明皇と貴妃の兩人に喩ふ。

〔三四〕孤月。明皇一人に喩ふ。

〔三四〕記す云云。七夕の天の河の畔には御月樣も居たのに、何故しらばくれてゐるのであらうか、當然、牛女の雙星に勸めて、我が釵盒の盟を完成し、貴妃と再び夫婦とならしむべきであらうと、月に對して怨言を述ぶる意なり。

〔三五〕斷賴。騙す、しらばくれる意。

〔三六〕擅掇。慫慂すること。

夜色已に深し。請ふ萬歲爺、宮に進みて安息たまへ。

〔生〕銀河漾漾、月輝輝たり。(崔櫓)

(三七)萬乘淒涼、蜀路より歸る。(崔道融)

(三八)香散じ艷消えて、一夢の如し。(王適)

(三九)離魂漸く杜鵑を逐うて飛ぶ。(韋莊)

〔三七〕萬乘。天子をいふ。

〔三八〕香散じ艷消え。貴妃の死をいふ。

〔三九〕離魂。貴妃の遊魂に喩ふ。

第四十二齣　(一)驛備

〔副淨、(二)驛丞に扮して上る〕

〔越調過曲〕〔梨花兒〕我は驛丞と做つて(三)傷僮沒し。(四)供應を缺いて、時常に(五)打を吃す。今朝駕の到るは、是れ要ならず。(六)若し差遲有らば、便ち拿れ去つて殺されん。

自家は馬嵬の驛丞なり。小より衙門に役を辨じ、(七)雜職行頭を(八)考了て、馬嵬の大驛に挖選ばる。陸路衝繁しと雖然ども、却つて(九)津貼の饒溢きを喜ぶ。(一〇)分例を送れば、些の(一一)折頭を落下し、(一二)銷算を造れば、些の馬匹を(一三)開除す。日に(一四)正項の俸薪を支し、還た月に(一五)衙門の工食を扣くを要す。怕

【一】驛備。馬嵬驛にて、奉迎の準備をすること。
【二】驛丞。驛長をいふ。
【三】傷僮。字典に云ふ、不謹の貌と、沒傷僮は俗語にて、反說なり。
【四】供應。接待の準備をいふ。
【五】打を吃す。打たるること。
【六】差遲。齟齬に同じ。
【七】雜職行頭。雜役夫といふ如し、行頭は組長の意。
【八】考了。試驗に及第の意。
【九】津貼。役得といふ如し、俸給以外の收入をいふ。
【一〇】分例。季節の禮物、驛を經て送くるが常なれば、その頭をはねること。
【一一】折頭を落下す。あたまをはねること。
【一二】銷算。決算の報告書。
【一三】開除。開列除去の意、馬匹を多く書き立てて、馬糧錢をごまかす意。
【一四】正項の俸薪。本俸をいふ。
【一五】衙門の工食。官費の食料をいふ。
【一六】公吏の承差。御用の官吏をいふ、公用にて官吏が出張する時は、驛にて萬事を準備

るるは是れ(一六)公吏の承差、嚇かすは是れ(一七)徒犯の驛卒。(一八)買免を求めては、(一九)常規を設定し、(二〇)月錢を(二一)比しては、百般に威逼す。(二二)站を擺し(二三)人を缺くに至るに及んで、常に(二四)屁をば都て急に出す。今更に大事の頭に臨む有り。太上皇此に來つて駐蹕したまへば、連忙いで、(二五)各色の匠人を喚び、驛舍の周圍を收拾けしめ、又貴妃娘娘を改葬し、重ねて墳塋をば建立するに因りて、土工の(二六)玉體を窺見かんことを恐れ、另に女工四百を選ばんことを要す。報道ふ、高公公已に到り、工程を催辦すること緊急なりと。若し還た些兒を誤らば、

〔紗帽を彈く介〕

怕らくは(二七)此の頭は一尺を短うせんことを要す。

〔末、驛卒に扮して上る〕〔見る介〕

(二八)老爹、我已に各匠を催し齊へたれば、儞放心して憂慮するを須ひざれ。

〔副淨〕還ほ女工有るか。

〔末〕現に四百の女工有り、都て驛門に在りて齊ひ集まれり。

せざるべからず、故に怕るといふなり。
【一七】徒犯の驛卒。犯罪人を送る驛卒、是も驛にて世話せざるべからず、嚇も亦怕の意なり。
【一八】買免。罪人が錢を出して刑具を免するを求むること。
【一九】常規を設定す。規則を設けて、免錢を取ること。
【二〇】月錢。月給のこと。
【二一】比す。併すこと、二箇月分の月給を、一箇月しかやらぬこと、之は下に向つて威張ることをいふ。
【二二】站を擺し。驛站中の人をならべること、檢閲の場合をいふ。
【二三】人を缺く。缺員をいふ、檢閲の際に缺員ありては、罰を受けざるべからず。
【二四】屁をば云云。放屁連發のこと、狼狽の狀をいふ。

〔副淨〕快く喚進來れよ。

〔喚ぶ介〕

〔末〕女工每(二九)走動め。

〔貼・淨・雜、村婦に扮し、丑、短鬚、女に扮し、各〻鍬鋤を携へて上る〕

本是れ村莊の婦。來つて埋築の人に(三〇)充つ。

〔見る介〕

女工每叩頭。

〔末〕起來よ、(三一)點名せん。

〔副淨、點ずる介〕

周(三二)二媽。

〔淨、應ふ〕

〔副淨〕吳(三三)姥姥。

〔貼、應ふ〕

〔副淨〕鄭(三四)胖姑。

〔雜、應ふ〕

〔二五〕各色の匠人。諸般の職人をいふ。
〔二六〕玉體。貴妃の屍をいふ。
〔二七〕此の頭は一尺を短うす。首が刎ねられて、一尺身の丈が縮む意。
〔二八〕老爹。おやぢといふ如し、老爺より身分の卑きものに對する稱なり。
〔二九〕走動。歩み出すこと。
〔三〇〕充つ。當る意。
〔三一〕點名。點呼に同じ、名を呼んで、出席をつけること。
〔三二〕二媽。第二の妻をいふ。
〔三三〕姥姥。婆さんをいふ。
〔三四〕胖姑。肥つたをばさんの意。

〔副淨〕尤(三五)大姐。

〔丑、口を掩ひ、嬌聲を作つて應ふる介〕〔副淨、細かに看るを作す介〕

呀、怎麽ぞ這箇の女工は、嘴を掩著うて答應ふるや。一定めて些の(三六)蹊蹺有らん。驛子、我が與に看來よ。

〔末、應じて、丑の手を扯き、開き看る介〕

老爹、是箇(三七)鬍子。

〔副淨〕是男、是女。

〔丑〕是女。

〔副淨〕女人の鬍子は、那裏ぞ嘴上に生在るもの有らんや。我不信。驛子、再び他が褲襠裏を搜一搜よ。

〔末、應じて搜るを作し、丑、諢る介〕

老爹、這の鬍子は、是れ假に女工に充つる的なり。

〔副淨〕哎呀、了不得。這是は上用の(三八)欽工にして、(三九)小可に同じきに非らず。我老爹の精細なるに(四〇)虧得る。若し皇帝の看見を待たば、(四一)險些く、我這の顆頭をば(四二)斷送して(四三)鬍子の嘴上に在らん。(四四)

〔二五〕大姐。れいさん、未婚者を呼ぶ。
〔二六〕蹊蹺。あやしきこと、ごまかしをいふ。
〔二七〕鬍子。有髯男子の意。
〔二八〕欽工。おかみのしごとの意。
〔二九〕小可。小事に同じ、いいかげんなこと。
〔四〇〕虧得。おかげの意、我輩の精細なる注意のおかげで、見出したが、若し見出し得なかつたら、こいつの爲に首が飛んでしまふ意。
〔四一〕險些。も少しのことでの意。
〔四二〕斷送。拋棄の意、なくしてしまふこと。
〔四三〕鬍子の嘴上に在らん。嘴上の鬍子の爲に、首がなくなる意。
〔四四〕好打、ひどく打つこと。

好打、好打。

〔丑〕只だ老爹が這裏にて催得すこと緊しく、本村は三百九十九名を湊め得て、單單一名を少くに因り、故此に權り來つて數に充つ。明日(四五)另に換はれば便了。

〔副淨〕也罷、快打出去よ。

〔末、應じ、丑を打つて下る〕〔副淨、衆を看て笑ふ介〕

如今我老爹は疑心起來。只だ怕らくは儞毎までも、也た是れ女人ならざるを。

〔衆、笑ふ介〕

我毎は都是て女人なり。

〔副淨〕口說は(四六)憑る無し。我老爹は、只要手を用ひ來つて、大家を摸一摸して、纔に信せん。

〔撈摸を作し、衆躲避けて、走り笑ふを作す介〕

〔淨〕笑ふ、儞老爹の(四七)好長手きを。

〔雜〕剛剛に一箇の鬚剔帚に摸著る。

〔副淨〕一手の(四八)白鰲香を弄了る。

【四五】另に換れば便了。明日になつて、他の女と換はれば差支なしといふ意。

【四六】憑る無し。證據のなきこと、口だけでは信用出來ぬ意。

【四七】好長手。お上手、本事好の意、ここにては笑話なり、以下三句皆同じ。

【四八】白鰲香。石首魚の乾物を白鰲といふ、異臭あり。

〔貼〕房中に拿去つて、下酒にせよ。

〔諢ける介〕〔老旦、一面に上る〕

(四九)錦襪をば天子に獻せんと欲して。權りに鏵鍬を把つて女工に充つ。老身は王媽媽なり。楊娘娘の錦襪を拾ひ得て自從、過客爭うて一看せんことを求め、許多の、(五〇)錢鈔を賺けたり。目今閒道く老萬歲爺は、回來りたまふと。一には則ち禁物を收藏せば、恐らくは禍端あらん、二には則ち此の錦襪をば獻上せば、或は重賞あらんも、也た未だ知るべからず。恰も好し驛中女工を(五一)僉報するに、去つて一名を(五二)擅上せんと要すと。葬り完れば、就ち進獻するに好し。此に來れば已に是れ驛前なり。

〔末、上り見る介〕

儞這の老婆子は、那裏より來れる的ぞ。

〔老旦〕來つて女工に(五三)投充る的なり。

〔末〕住著。

〔進む介〕

老爹、一箇女工に投充る老婆子有りて、外に在り。

〔副淨〕喚進來よ。

【四九】錦襪。第三十六齣、看襪に應ず。

【五〇】錢鈔。鈔は紙幣をいふ。

【五一】僉報。僉は簽に通ず、名札を以て報告する意。

【五二】擅上。追加すること。

【五三】投充。進んで當る意。

〔末、出でて老旦を喚び、進み見る介〕

〔副淨〕 儞は是れ女工に投充る的か。

〔老旦〕 正是。

〔副淨〕 我儞を看るに、年紀老了些。怕らくは工を做し得ざらん。只是現に一名を少き、(五五)急切里に、人有る沒し。就ち儞をば(五六)頂上せん。儞甚と名字を叫ぶや。

〔老旦〕 王媽媽と叫び做す。

〔副淨〕 好好、恰も好し、(五七)周・吳・鄭・王の四人。儞四人は、就ち(一)個の(五八)工頭と做り、毎人女工九十九人を(五九)管領し、驛中に住在りて(六〇)操演し、鴛の到るを伺候すること便了。

〔衆〕 曉得。

〔各看て、諢けるを做す介〕

〔副淨〕 儞毎各鍬鋤を拿つて、我老爹の親自ら教演一番るを待て。

〔衆、應じて各鍬鋤を拿り、副淨、教演の勢を作し、衆、學ぶ介〕

〔亭前柳〕 〔副淨〕 鍬鑊を手中に拿り。挖掘ること法の如きを要す。玉體を侵さしむる莫く。仔細に(六一)

【五四】 急切里。せつぱつまつての意。
【五五】 頂上。名をかきたすこと補缺の意。
【五六】 周・吳・鄭・王。皆大姓なり。
【五七】 工頭。班長をいふ。
【五八】 管領。率ゐること。
【五九】 操演。稽古すること。
【六〇】 黃沙。黃壤に同じ、墓の土をいふ。

黃沙を撥けよ。

〔合〕 大家演習して、須らく(六二)熟滑すべし。此に(六三)欽遵を奉み。切に(六四)爭差有る休得れ。

〔衆〕 老爹、我毎呵。

〔前腔〕 田舍にて(六四)桑麻を業とし。泥沙を弄るに慣見たり。(六五)小心に齊しく力を用ふ。怎んぞ敢て(六六)消乏を告げん。

〔合〕 大家演習して須らく熟滑すべし。此に欽遵を奉み。切に爭差有る休得れ。

〔副淨〕 且つ裏邊に到り、連夜操演去せよ。

〔衆、應ずる介〕

(六七)玉顏虛しく掩ふ、馬嵬の塵。(高駢)
(六八)雲雨亡ぶと雖も、(六九)日月新なり。(鄭畋)
曉に平原に向つて、祭禮を陳ね。(方干)
共に瞻る鑾駕の、重ねて來巡るを。(僧廣宣)

【六一】 熟滑。熟練に同じ。
【六二】 欽遵。欽命に同じ。
【六三】 爭差。差錯に同じ、まちがひ、そそうのこと。
【六四】 桑麻を業とし。農織に從事すること。
【六五】 小心。細心に同じ、よく氣をつける意。
【六六】 消乏。疲勞のこと。
【六七】 玉顏。貴妃の顏をいふ。
【六八】 雲雨。巫山の雲雨、男女の歡愛に喩ふ。
【六九】 日月新。唐室中興、兩宮の竝び立つに喩ふ。

第四十三齣　(一)改葬

〔生、二內侍を引いて上る〕

〔商調引子〕〔憶秦娥〕傷心の處。(二)天旋り日轉じて、(三)龍馭を廻らす。龍馭を廻らす。踟躕して此に到り。歸り去ること能はず。

寡人蜀より鑾を回へし、妃子の倉卒に生を捐てて、未だ禮葬を成さざるを痛傷み、特に旨を傳へて、另に(四)珠襦(五)玉匣を備へ、改めて墳塋を建て、朕が親しく臨んで遷葬するを待たしむ。此に因りて馬嵬の驛中に駐蹕す。

〔淚する介〕

這の佛堂の梨樹に對著すれば、好だ人を悽慘しむ。

〔商調過曲〕〔山坡羊〕恨み悠悠、江山は故の如し。痛生生、(六)游魂は血に汚る。冷清清、佛堂の半間。綠陰陰、一本の梨花樹。空しく自ら吁く。怕らくは(七)夜臺の人の更に苦しきを。那裏ぞ(八)珮環の夜月に、朱戶に歸る有らんや。也た(九)慢に想ふ、(一〇)顏面の春風、畫圖を識るを。

〔丑、暗と上る〕〔見ゆる介〕

奴婢旨を奉みて、貴妃娘娘の新墳を築造り、俱に已に齊備せり。請ふ萬歲爺、親しく臨んで(一一)墓を啓きたまはんことを。

〔生〕傳旨を(一二)起駕。

〔丑〕領旨。

〔傳ふる介〕

軍士每(一三)排駕。

〔雜、軍士に扮して上り、引き行く介〕

馬嵬の坡下、泥土の中。(一四)玉容を見ず、空しく死せし處。

〔到る介〕

〔丑〕萬歲爺に啓さく、這の白楊の樹下は、就是ち娘娘埋葬の處なり。

〔生〕爾看よ、蔓草春深く、悲風日薄し。妃子、妃子、兀的寡人を痛殺しめずや。

〔哭する介〕

號呼ぶ。叫聲聲に、(一五)魂在りや無しや。歔欷く。哭哀哀み、淚漸く枯る。

〔一〕改葬。貴妃を改葬する場。

〔二〕天旋り日轉じ。時運到來の意、この曲は、長恨歌の「天旋地轉回龍馭、到此躊躇不能去」の二句を改作せるなり。

〔三〕龍馭。天子の車をいふ。

〔四〕珠襦。遺體にきせる肌著。

〔五〕玉匣。玉の棺をいふ。

〔六〕游魂は血に汚る。貴妃の死をいふ、杜甫の哀江頭に「血汚游魂歸不得」とあり。

〔七〕夜臺。泉臺に同じ、冥途のこと、夜臺の人は貴妃をいふ。

〔八〕珮環の夜月云云。貴妃が

再び宮に歸ることのなきをいふ。

〔九〕慢に想ふ。想ふなかれの意。

〔一〇〕顏面の春風畫圖を識る。畫にかける如き春風の面といふ意。この二句は、杜甫の王昭君を詠ぜる詩の「畫圖省識春風面、環珮空歸月夜魂」より來る。

〔一一〕墓を啓く。發堀すること。

〔一二〕起駕。おたちのこと。

〔一三〕排駕。整列すること。

〔一四〕玉容。この二句は長恨歌を用ひ、玉顏を玉容と改む。

〔一五〕魂在りや無しや。聲を限りに叫べども、貴妃の魂は果して之を聞くや否の意。

〔老旦・雜・貼・淨、四女工鋤を帶びて上る〕

老萬歲爺來りたまふ。我每快些く前み去いて、(一六)開墳に伺候せん。

〔丑〕 儞每は都是て女工か。

〔衆、應する介〕〔丑、生に啓す介〕

女工每都て到り齊へり。

〔生〕 旨を軍士に傳へて廻避せしめよ。高力士、儞去いて女工を監督し、小心に開掘せよ。

〔丑、應じ傳ふる介〕〔軍士、下る〕〔衆、女工、掘るを作す介〕

〔水紅花〕〔衆〕 高岡に向つて、(一七)一謎に鍬鋤を下し。當初の白楊の一樹を認む。怕らくは(一八)香銷え翠冷え。(一九)蚍蜉を伴ひて、(二〇)粉肌枯れ。玉容の覩難からんことを。

〔衆、驚く介〕

掘下ぐること三尺にして、只一箇の空穴有り。並して娘娘の玉體を見ず。早難道、(二一)雲と爲り雨と爲り。飛び去つて影都て無きか。但只芳香の四散して、人の裾を襲ふ有る(二二)の也囉。

〔一六〕 開墳。墳墓の發掘をいふ。
〔一七〕 一謎。一圖の意。
〔一八〕 香銷え翠冷え。化粧のはげること。
〔一九〕 蚍蜉を伴ひ。屍の蛆を生すること。
〔二〇〕 粉肌。貴妃の遺體をいふ。
〔二一〕 雲と爲り雨と爲り。巫山神女の故事。
〔二二〕 也囉。語助なり。

〔淨〕 呀、是れ一箇の(二三)香囊なり。

〔丑〕 取り來りて看せよ。

〔淨、囊を遞し、丑、接けて看、淚する介〕

我が那の娘娘呵、儞每且らく那廂に到つて、伺候し去れ。

〔衆、應じ下る〕〔丑、生に啓す介〕

萬歲爺に啓あぐ、墓は已に啓開けるに、却つて是れ空穴にて、身を裹みたる錦褥も、殉葬せる金釵・鈿盒も、都て見えず。只一個の香囊のみ有りて、此に在り。

〔生〕 這等の事有るか。

〔囊を接けて看、大に哭する介〕

呀、這の香囊は、乃ち當日妃子の生辰に、長生殿上に在りて、試みに霓裳を舞ひしとき、他に賜與へし的なり。我が那の妃子呵、儞如今却つて何處に在りや。

〔山坡羊〕 慘悽悽、(二四)一匡の空墓。杳冥冥、玉人は何くに去れる。便ち虛飄飄、(二五)錦褥兒の塵と化するを做し。怎んぞ那の硬撐撐の、釵盒も也た尋ぬる處無きや。空しく香囊を剩取して猶ほ土に在り。尋思へば、何の故に緣るを解せず。(二六)恨不得、(二七)山神を喚び起して、渠を責問せばや。

〔二三〕 香囊。第三十七齣、尸解に照應す。
〔二四〕 一匡。一圍の意、匡はわくのこと。
〔二五〕 錦褥兒。尸解の齣に出づ。
〔二六〕 恨不得。巴不得の意、恨みされず、恨の切なるなり。
〔二七〕 山神。土地神をいふ。

〔想ふ介〕

高力士、爾敢て(二八)記え差へるか。

〔丑〕奴婢は當日曾て楊樹の半邊を削り、字を題して記と爲ししに、如何ぞ差ふを得ん。

〔生〕敢是、人に發掘せられしならん。

〔丑〕若し發掘を經ば、怎んぞ香囊を留下むるを得んや。

〔生、呆想れて、語らざる介〕

〔丑〕奴婢の想來ふに、古より神仙には、多く(二九)尸解の事有り。或は娘娘の尸解して仙去せしやも、也た未だ知る可からず。卽ち(三〇)橋山の陵寢の如きも、止だ黃帝の衣冠を葬れり。這の香囊は原是、娘娘が臨終に佩びし所なれば、將ち來り葬つて新墳の內に入れなば、也た是れ(三一)一般なり。

〔生〕說ふ的理有り。高力士、就ち這の香囊をば、裹むに珠襦を以てし、盛るに玉匣を以てし、禮に依つて安葬すること便了。

〔丑〕領旨。

〔生、哭する介〕

【二八】記。記憶のこと。
【二九】尸解。尸解の齣に詳なり。
【三〇】橋山。陝西鄜州中部縣に在り、黃帝の陵のある所なり、黃帝は龍に乘りて天に上りしかば、その衣冠をのみ葬れりといふ。
【三一】一般なり。黃帝の橋陵と同じ意。

號び呼ぶ。叫聲聲に、魂在りや無しや。欷歔く。哭哀哀み、淚漸く枯る。

〔丑、囊を持つて出づる介〕〔囊を盛つて、匣に入るるを作す介〕

香囊盛り(三二)放くこと(三三)停當。女工每、那里ぞ。

〔衆、上る〕

〔丑〕爾每這の玉匣をば、墓中に放在き、快些く墳を(三四)封起し來れ。

〔衆、墳を築くを作す介〕

〔水紅花〕當時、花貌と香軀と。(三五)虛無に化し。(三六)一抔の空墓。今朝は玉匣と珠襦と。(三七)工夫を費して。重泉に深く錮し。更に新碑(三八)一統を立て。細かに淚痕を把つて書く。今より(三九)流恨山隅に滿つる也囉。

〔丑〕墳已に封じ完る。每人錢一貫を賞す。去れ。

〔衆、賞を謝して、叩頭する介〕〔淨・貼・雜、先づ下る〕〔丑、老旦に問ふ介〕

爾這婆子、何すれぞ去らざる。

〔老旦〕公公に禀上ぐ、老婦人は、舊年馬嵬の坡下に在いて、楊娘娘の錦襪一隻を拾ひ得たれば、帶來つて、老萬歲爺に獻上す。

【三二】放。置に同じ。
【三三】停當。ちやんと香囊をしまつたといふ意。
【三四】封起。土を盛りあげること。
【三五】虛無に化し。無くなること。
【三六】一抔の空墓。一抔は墓のこと、空墓は貴妃の屍のなきをいふ。
【三七】工夫を費やして。工夫は時間をいふ。
【三八】一統。一面に同じ。
【三九】流恨。遺恨に同じ。

〔丑〕待て、我れ儞の輿めに啓奏げん。

〔生を見る介〕

萬歳爺に啓あぐ、(一)箇の女工有りて說ふ、楊娘娘の錦襪一隻を拾ひ得て、帶來つて獻上すと。

〔生〕快宣過來。

〔丑、老旦を喚び、進見せしむる介〕

婢子、老萬歳爺に叩見いたす。

〔襪を獻ずる介〕

〔生〕取り上げ來れ。

〔丑、取つて生に送る介〕〔老旦、起立する介〕〔生、看て哭する介〕

呀、果然是れ妃子の錦襪、儞看よ、芳香未だ散ぜず、(四〇)蓮印猶ほ存せり。我が那の妃子呵。

〔哭する介〕

〔山坡羊〕(四一)俊彎彎、(四二)一鉤(四三)重ねて覩る。暗濛濛、餘香猶ほ度る。裊亭亭、記す當年の翠盤。(四四)瘦尖尖、穩かに(四五)紅鴛を逐うて舞ふ。還ほ憶取ゆ、深宵殘醉の餘。夢酣に春透りて、人を勾いて(四六)覷はしめしを。今日裏、空しく香囊に伴ひ、恨を留めて俱にす。

〔四〇〕蓮印。鞋の迹をいふ。
〔四一〕俊彎彎。いきにまがれる貌。
〔四二〕一鉤。襪をいふ、足なりにまがれるを以てなり。
〔四三〕重れて覩る。再び見る意。
〔四四〕瘦尖尖。鞋のほそく、尖がれる貌。
〔四五〕紅鴛を逐うて舞ふ。足を擧ぐること、鴛鴦の雙舞する如きをいふ。
〔四六〕覷。偸看の意。

〔哭する介〕

號び呼ぶ。叫聲聲に、魂在りや無しや。欷歔く。哭哀哀み、淚漸く枯る。高力士、他に金錢五千貫を賜はり、就ち此に在りて、貴妃の墳墓を看守せしめよ。

〔老旦、叩頭する介〕

多謝老萬歳爺。

〔起ち出でて、鋤を看る介〕

(四七)再た鋤を持つ女を學ぶに心なく。(四八)鈔有り、甘んじて墓を守る人と爲る。

〔下る。外、四軍を引いて上る〕

(四九)見に乾坤を闢いて、新に位を定め。看す日月を題して、更に高く懸く。

〔見ゆる介〕

(五〇)臣は朔方の節度使郭子儀、欽んで(五一)上命を奉じ、(五二)鹵簿を帶領して、恭しく太上皇の聖駕を迎へまつる。

〔生〕卿は逆寇を蕩平して、神京を收復し、宗廟重ねて新に、乾坤再び造らる。眞に(五三)不世の功

〔四七〕再た鋤を持つ云云。もはや鋤を持つて土工をする女のまねはする氣がない、御札を頂いて、甘んじて墓守をするといふ意。
〔四八〕鈔。錢鈔をいふ。
〔四九〕見に乾坤を云云。この二句は唐の沈佺期の詩句なり、唐詩選に出づ、題すとは額に題するなり、ここにては唐室中興、兩宮同坐の事に用ふ、極めて巧なり。
〔五〇〕臣は朔方の節度使。郭子儀のことは、第三十五齣、收京に詳なり。
〔五一〕上命。天子の命、肅宗をいふ。
〔五二〕鹵簿。天子の儀仗をいふ。
〔五三〕不世。不世出の意、千歳一遇をいふ。

なり。

〔外〕臣忝くも大帥と爲り、賊を破ること已に遲く、罪を負ふに遑あらず。何の功か之れ有らん。

〔生〕卿說那裏話來。高力士、(五四)分付つけて起ち行かしめよ。

〔丑〕領旨。

〔傳ふる介〕〔生、吉服に更むる介〕〔衆、生を引いて行く介〕

〔水紅花〕(五五)五雲(五六)芝蓋、鑾輿に簇がり。皇都に返れば。旌旗路に溢る。黃童白叟、共に相扶けて。盡く歡呼す。天顏重ねて覩る。此より(五七)新豐の行樂。(五八)少帝(五九)興居を奉ず。千秋萬歲、皇圖鞏き也囉。

(六〇)腸斷將軍、改葬して歸る。(徐夤)

山を下り馬を回へす、尙遲遲たり。(杜牧)

此地を經過すれば、千年の恨。(劉倉)

空しく香囊有りて、淚に和して滋し。(鄭嵎)

【五四】分付つけて。出發の命令を下すこと。

【五五】五雲。祥雲をいふ。

【五六】芝蓋。儀仗の傘をいふ。

【五七】新豐の行樂。漢の高祖が、その父を新豐に迎へて離宮を造り、歡を奉ぜし故事、ここにては驪山溫泉宮の行幸にもかかりて妙なり。

【五八】少帝。肅宗をいふ。

【五九】興居。起居に同じ、御機嫌を伺ふこと。

【六〇】腸斷將軍。高力士をいふ、力士驃騎將軍たるを以て云ふ。

第四十四齣　(一)慫合

〔小生、上る〕

〔南呂引子〕〔阮郎歸〕(二)碧梧天上、葉初めて飛び。秋風又期を報ず。雲中遙かに望めば、鵲橋齊し。河を隔てて(三)影半ば迷ふ。

(四)豈是れ仙家別離を好み。故らに(五)迢遞に佳期を作さしめんや。只だ碧落銀河の畔に(六)緣る。好し(七)金風玉露の時に在り。吾は乃ち牽牛とは是れなり。今は下界の(八)上元二年、七月七夕に當る。王孫將次河を渡らんとす。此に因りて先づ河邊に在りて伺候す。記し得たり、天寶十載、吾天孫と相會へる時、唐の天子と、貴妃楊玉環と、長生殿上に在りて、拜禱して誓を設け、世世夫婦と爲らんと願へるを見しに、豈料らんや、(九)轉眼の間に、玉環をば、生生ながら(一〇)斷送れり。好だ(一一)憐む可き人ならずや。

〔南呂過曲〕〔香徧滿〕佳人絕世。千秋第一、寃禍奇なり。無限の綢繆をば

【一】慫合。とりなしの場、牛郎が天孫に明皇貴妃の重圓を慫慂するなり。

【二】碧梧。桐葉秋を報ずる意、唐人の詩に「山僧不レ解敗二甲子一、一葉落知二天下秋一」とあり。

【三】影半迷ふ。天の河を隔てて、橋影のぼんやりせること。

【四】豈是れ仙家云云。詩の大意は、仙人は離別が好きで、一年一會と定めたわけではないといふ意。

【五】迢遞。遙の意。

【六】緣る。銀河の畔に沿ひて待つ意。

【七】金風玉露。秋景、七夕を

輕しく抛棄す。憐む可きも、已むを得ず。(二)死生見る期無く。空しく萬種の悲しみを留め。(三)枉げて多情の誓を罰下ふ。

〔貼、雜の二仙女に扮せるを引いて上る〕

〔朝天懶〕〔朝天子〕 好會年年天上の期。(四)塵緣の淺くして、變移有るに似ず。

〔水紅花〕 (五)仙郎の、河畔に獨り徘徊するを見て。駕をば頻りに催す。

〔雜、報ずる介〕

天孫到る。

〔小生、迎ふる介〕

天孫來了。

〔織女と同に對し拜する介〕

〔合〕〔懶畫眉〕 相逢うて一笑、(六)深深拜す。隔歲の離情、各自知る。

〔小生〕 天孫、請ふ同に(七)斗牛宮に到り去かん。

〔貼を攜へて行く介〕

手を攜へて雲中に步めば。

【八】 上元。肅宗の年號。
【九】 轉眼。一瞬時をいふ。
【一〇】 斷送。見捨つる意。
【一一】 憐むべき人。貴妃をいふ。
【一二】 死生。一死一生、幽明界を隔つる意。
【一三】 枉げて多情の誓を罰下ふ。釵盒の盟に背きしことをいふ。
【一四】 塵緣。人間の俗緣をいふ、卽ち前に引ける、「休言天上相逢少、猶勝人間去不同」の意なり。
【一五】 仙郎。牛郎をいふ。
【一六】 深深拜す。丁寧に御辭儀すること。
【一七】 斗牛宮。斗も牛も、二十八宿の一、ここにては牛郎の宅となす。

〔貼〕 仙裾好風に颺る。

〔合〕 河は烏鵲の渚に明かに。星は斗牛の宮に聚まる。

〔到る介〕〔雜、暗と下る〕

〔小生〕 天孫、請坐。

〔坐する介〕

〔二犯梧桐樹〕〔金梧桐〕 (八)瓊花繡帷を繞り。霞錦珠珮を搖かす。

〔貼・合〕 (九)斗府星宮に。歲歲今宵會す。

〔梧桐樹〕 銀河碧落(一〇)神仙の配。地久天長。豈但に朝朝暮暮の期のみならんや。

〔五更轉〕 願はくは他人世上の夫妻の輩をして。都て我と伊との似く、永遠に雙を成し、對を作さしめん。

〔小生〕 天孫。

〔浣溪紗〕 爾且らく提ふを慢て。(一一)人間の世に一處有り。怎んぞ偏に忘記れたるや。

〔貼〕 何處を忘れしぞ。

〔小生〕 記得ゆ可し、長生殿裏人一對。曾て我に向つて香を焚き(一二)密誓することの齊しきを。

【八】 瓊花云云。仙宮の美しきをいふ。
【九】 斗府星宮。斗牛宮をいふ。
【一〇】 神仙の配。牛女をいふ、年年一會と雖も幾久しく變らず、朝暮の期ではないといふ意、朝朝暮暮を一朝一夕の意に解くべし。
【一一】 人間の世に一處有り。天孫の語を聞きて、不圖長生殿のことを想ひ起したるなり。
【一二】 密誓すること齊し。共に密誓せしこと。

〔貼〕此れは(二三)李三郎と楊玉環との事なり。我怎んぞ記得えざらん。

〔小生〕天孫既に然く記得せば、須らく彼が萬古傷心の地に墮つるを念ふべし。他は世世生生かけて願ひしを。(二四)中路に分離せしむるに忍びんや。

〔貼〕玉環の事を提起せば、委實に心を傷ましむ。我前に(二五)馬嵬の土地の奏に因つて。

〔劉潑帽〕他が獨り情を抱いて際り無く。死と生と。(二六)守定つて移らず。寃を含んで幽冥の地に流落せるを念ひ。此に因りて、他が爲めに(二七)玉墀に奏し。再び(二八)蓬萊の位を證せしめぬ。

〔小生、笑ふ介〕天孫、則ち此の如しと雖も、只是れ他呵。

〔秋夜月〕玉妃と做るも。羣仙の隊。(二九)寡鵠孤鸞、白雲の內なるに過ぎず。何んぞ翼を並ぶる鴛鴦の美なるに如かんや。(三〇)盟言を念ふは彼に在り。(三一)圓成を與ふるは儞に仗る。

〔貼〕仙郎、我豈他が爲めに、重ねて斷緣を續くを欲せざらんや。只是れ李三郎呵。

【二三】李三郎。明皇のこと。
【二四】中路に分離す。途中で夫婦分れをすること。
【二五】馬嵬の土地。第三十三齣神訴に應ず。
【二六】守定。固守すること。
【二七】玉墀。天階をいふ。
【二八】蓬萊の位を證す。尸解に詳なり、證は證果の意。
【二九】寡鵠孤鸞。ひとりぼつちなること、群仙の內に在りとも、仙偶を得ず、孤獨を歎する意。
【三〇】盟言を念ふは云云。約束を重ずるは、貴妃に在れども、再緣を與ふるは天孫の力なりとの意。
【三一】圓成。夫婦の團圓を成就すること。

〔東甌令〕他は情を輕しく斷ち。誓を先づ隳る。那の玉環呵。

一箇の(三三)鍾情、枉げて自ら癡なり。從來(三四)薄倖なる男兒の輩。多く佳人の意に負く。(三五)伯勞は東に去り、燕は西に飛ぶ。怎んぞ雙棲を做さしめんや。

〔小生〕天孫の言ふ所は、李三郎も自ら應に罪を知るべし。但是れ當日馬嵬の變呵。

〔金蓮子〕國事危く。君王令有るも、也た反抗して逼る。怎んぞ佳人の命の摧くるを救はんや。想ふに今日こそ。(三六)怎生般なる悔恨と、傷悲とを知らず。

〔貼〕仙郎、恁般說へば、李三郎の罪は原す可き有り。他若し果して悔心有らば、再び前誓を(三七)證完するを爲すこと便了。

〔二仙女、上る〕

娘娘に啓あぐ、(三七)天雞將に唱へんとすれば、請ふ娘娘河を渡りたまへ。

〔貼〕此にて告辭せん。

【三三】鍾情。情塊をいふ。
【三四】薄倖。輕薄に同じ。
【三五】伯勞は東に去り。梁の武帝に東飛伯勞歌あり、「東飛伯勞西飛燕、黃姑織女時相見」云云、黃姑は牽牛星をいふ、ここにては伯勞飛燕の東西に分るるを以て、明皇貴妃の離別に喩ふるなり。
【三六】怎生般なる云云。どんなに悔恨し、傷悲せるかを知らざる意。
【三六】證完。證果の意、成すこと。
【三七】天雞。天上の雞。

〔小生〕河邊に相送らん。

〔手を攜へて行く介〕

〔尾聲〕沒來由、他人の情事をば、閒に評議し。這度の良宵をば、虛しく廢す。

唉、李三郎、楊玉環、

知る可し、俺が(三八)一夜の工夫を破りしは。都て儞の爲めなるを。

雲階月地、一たび相過ぐ。(杜牧)

爭でか閒に往事を、思ふを奈何せんや。(白居易)

一たび(三九)仙娥の、碧落に歸りしより。(劉滄)

千秋恨むを休めよ、馬嵬坡。(徐夤)

【三八】一夜の工夫を破る。一夜を費したること。

【三九】仙娥の碧落に歸る。嫦娥の月に走りしこと、ここにては貴妃の昇天に喩ふ。

第四十五齣　(一)雨夢

〔生、上る〕

〔越調過曲〕(二)〔霜天曉角〕愁は深く夢は杳かなり。白髮多少を添ふ。最も苦しむ、佳人逝くこと早く。

(三)獨夜を傷み、閒宵を恨む。

閒夜雨聲の頻りなるに堪へず。一たび重泉を念ひ、一たび神を愴ましむ。燈花を挑げ盡して、眠り得ず。淒涼(四)南內、更に何人ぞ。朕獨に幸して京に還りてより、退いて南內に居り、毎日只是妃子を思想ふ。前に馬嵬に在りて改葬せしとき、一たび遺容を覩んと指望みしに、想はざりき、變じて空穴と爲り、祇だ香囊一箇を剩すのみならんとは。知らず、果然(五)尸解せるや、還是(六)玉化し香消せるや。徒然に展轉尋思するも、怎んぞ他の一面を見るを得ん

【一】雨夢。明皇が雨夜に貴妃を思ひ、夢に入る場、梧桐雨雜劇の大詰にあたる。

【二】【霜天曉角】大意に云ふ、貴妃を憶ひてやまず、夢路遠くして逢ふこと少れに、愁多くして白髮は大にふえ、貴妃の早く去りしを悼み、獨り寢ぬる夜のさびしさに、ひまの宵を如何にしてすごされようかと、追悼の切なるをいふ、この曲は梧桐雨の第四折開幕の端正好の一曲より來る。

自從幸西川還京兆、甚的是月夜花朝、這半年來、白髮添多少、怎打疊愁容貌、

【三】獨夜。孤眠の夜をいふ。

【四】南內。興慶宮、元來明皇の潛邸なり、明皇蜀より返りて、此に居る、後李輔國に逼まられて、西宮に遷る。

【五】尸解。昇天せしこと。

【六】玉化し香消す。肉體が腐朽すること。

や。今夜這の一庭の苦雨、半壁の愁燈に對著して、好だ人を淒涼ならしめずや。

〔越調過曲〕〔小桃紅〕冷風(七)掠雨、長宵に戰き。聽く點點、都て那の梧桐に向つて哨ゆるを。蕭蕭颯颯、一齊暗に亂愁をば敲く。纔に住了。又還飄へる。那んぞ堪へん、是れ(八)鳳幃空しく、(九)串煙の銷ゆるに。人獨り坐し。孤燈を(一〇)厮湊めて照らす。也た恨む、同に聽くに、(一一)箇の嬌嬈沒きを。

〔淚する介〕

猛かに舊歡娛を想著ひては。淚痕の交るを止不住ず。

〔內にて、初更を打つ介〕〔小生、內にて唱ひ、生、聽くを作す介〕

呀、何處の歌聲ぞ。淒淒耳に入るは、梨園の舊人に非ざるを得んや。不免や、簾前に到り、闌に凭りて一たび聽かん。

〔起立ちて闌に凭るを作す介〕

此れ(一二)張野狐の聲なり。且つ他の唱ふ的は、是れ甚の曲兒なるかを聽かん。

【七】掠雨。降りそそぐ雨をいふ。
【八】鳳幃。閨中をいふ。
【九】串煙。香の烟が線の如く起ち上る意。
【一〇】厮湊著。燈をかきたてることか、長恨歌の「孤燈挑盡未レ成レ眠」の意なり。
【一一】箇の嬌嬈。貴妃をいふ、獨り聽くを恨ますして、同に聽かざるを恨み、舊歡を想ひ起して、自然落淚に及ぶ處、極めて妙なり。
【一二】張野狐。梨園の弟子、明皇に從つて蜀に入り、雨淋鈴の曲を傳ふ、第二十九齣、聞鈴、下場詩の註に詳なり、又太眞外傳に云ふ、「至德中、復幸二華淸宮一、從レ宮嬪御、多非二舊人一、上於二望京樓下一、命二張野狐一、奏二雨霖鈴曲一、曲半上四顧淒涼、不レ覺流涕、左右亦爲感傷」と。
【一三】岩蕘。棧道のけはしきこと。
【一四】碎聒。音聲の細碎亂雜なること。
【一五】鬧挑。鈴の音に挑發せらるること。
【一六】淸商。音樂をいふ、雨淋鈴の曲を造りしこと。
【一七】二鼓。二更を打つこと。
【一八】雨淋鈴。聞鈴の齣に詳なり。
【一九】新舊。新舊の恨をいふ。
【一〇】天荒れ地老ゆ。天地も爲に愁ふる意、天荒地老の字は、亦梧桐雨の倘秀才の曲より來る。本待二閒散心追歡取一レ樂、倒惹下的感二舊恨一天荒地老快快歸來鳳幃悄、甚法兒捱二今宵懊惱一

〔一面には聽き、一面には愁歔して淚を掩ふを作す介〕〔小生、場內に在り、高處に立ちて唱ふ介〕

〔下山虎〕萬山の蜀道。古棧(一三)岩蕘たり。急雨林杪に催し。鐸鈴亂敲して。怨むに似、愁ふるが如く。(一四)碎聒しうして了らず。響は空山に應じて、魂暗に消え。一聲兒は忽ち慢嫋く。一聲兒は忽ち緊搖し。限り無き傷心の事。他に(一五)鬪挑され。(一六)淸商に寫して入れて、恨を傳ふること遙かなり。

〔內にて、(一七)二鼓する介〕〔生、悲しむ介〕

呀、原來是、朕が製せし所の(一八)雨淋鈴の曲なり。記ふ昔、朕棧道に在りて、雨中に鈴聲の相應ふるを聞き、妃子を痛念し、因つて其聲を採りて、此の曲を製成れり。今夜之を聞きて、蜀道の悲悽を想ひ起し、愈腸斷を加ふるなり。

〔五韻美〕淋鈴を聽けば。懷抱を傷ましむ。淒涼萬種、(一九)新舊續り。愁人をば禁虐得めて、十分に惱ます。(二〇)天荒れ地老い。這種の恨、誰人か知道らん。

爾聽け、窗外の雨聲、越發大なり。

疎にして還密。低うして復高し。纔に眼を合はせば。又幾陣か、窗前八夢をば攪す。

〔丑、上る〕

(二一)西宮南内秋草多し。夜雨梧桐葉落つる時。

〔見ゆる介〕

夜已に深ければ、請ふ、萬歲爺、安寢。

〔内にて、三鼓する介〕

〔生〕呀、漏鼓(二二)三交す。且自く几に隱りて臥せん。哎、今夜呵、(二三)甚の夢兒か俺が眼裏に來るを得るを知らんや。

〔仰いで哭する介〕

〔哭相思〕(二四)悠悠たる生死、別れて年を經。魂魄曾て來つて夢に入らず。

〔睡る介〕

〔丑〕萬歲爺は、睡りたまへり。咱家も也た去いて歇息兒咱。

〔虛と下る〕〔小生・副淨、二内侍に扮し、帶劍して上る〕

(二五)幽情は消未得。夢に入つて君王を感せしむ。

〔(二六)上に向つて跪く介〕

【二一】西宮南内。この二句は長恨歌を用ふ、南内は前に出づ、西宮は西内、唐の宮城なり、天子は大明宮に居る、之を東内といふ。春風桃李花開日、秋雨梧桐葉落時、西宮南内多二秋草一、落葉滿レ階紅不レ掃、

【二二】三交。三度鳴ること。

【二三】甚の夢兒云云。どんな夢を見るであらうかとの意。

【二四】悠悠。この二句、長恨歌を用ふ。

【二五】幽情。幽靈の情思をいふ。

【二六】上。上座をいふ。

萬歲爺、請醒來。

〔生、醒めて看るを作す介〕

儞二人は、是れ那裏より來れる的ぞ。

〔小生・副淨〕奴婢は楊娘娘の命を奉じ、來つて萬歲爺を(二七)請まをすなり。

〔五般宜〕只だ當日箇は、亂軍の中にて、禍殃に慘遭し爲めに。悄地に人叢裏に向ひ、妝を換へて隱逃れたれば。此上に因つて流落して、久しく(二八)蓬飄す。

〔生、驚き喜ぶ介〕

呀、原來楊娘娘は曾て死せざりしか。如今却つて那裏に在りや。

〔小生・副淨〕陛下の朝に想ひ暮に想ひて、恨縈り愁繞るが爲に。此に因つて驛庭をば靜かに掃ひ。

〔叩頭する介〕

鑾輿の幸することの早きを望み。說ふ、(二九)牛女の會の深盟を把つて。君王と(三〇)未了を續がんと要す。

〔生、淚する介〕

朕は妃子の爲めに、百般思想せしに、那んぞ曉得らん、却つて驛中に在らんとは。儞二人は、快く

【二七】請。招請の意。

【二八】蓬飄。蓬の風に飄ふ如く、諸方を流落する意。

【二九】牛女の會の深盟。七夕の夜牛女に對して、世世夫婦とならんと誓ひしこと。

【三〇】未了。未了の緣をいふ、未了を續ぐとは、さきの世にて再び夫婦となり、この世にて未だ了らざりし緣を續がんといふ意なり。

朕に隨つて前み去き、連夜迎へ回ること便了。

〔小生・副淨〕 領 旨。

〔生を引いて行く介〕

〔山麻稽〕〔換頭〕 聽說くを喜ぶ。花の如き貌は。(三三)猶兀自現に人間に在りて。當面邀ふるに堪へたりと。忙しく(三三)敎へて。御苑の內の。(三三)夾城複道を潛び出でしむ。(三四)顧み得ず、夜深く人靜かに。露涼しく風冷かに。月黑く塗邃なるを。

〔末、上つて攔ぎる介〕

陛下は久しく已に南內に安居したまへるに、何に因つて深夜に微行し、那裏に到り去りたまふぞ。

〔生、驚く介〕

〔蠻牌令〕 何處の(三五)潑官僚か。駕を攔つて語曉曉いふは。

〔末〕 臣は乃ち陳玄禮なり。陛下、快く請ぞ宮に回りたまへ。

〔生、怒る介〕

唏、陳玄禮、爾は當日馬嵬の驛中に在つて、暗に軍士を激せしめ、貴妃を逼死せり。罪誅を容さず。今日は又特に來つて駕を犯すか。

【三二】猶兀自。兀自は兀的に同じ、助字なり。
【三三】敎。一本には、發に作る。
【三三】夾城複道。夾城は九重の宮牆、複道は渡り廊下をいふ。
【三四】顧み得ず。かまはず逃むこと。
【三五】潑官僚。馬鹿役人の意、潑は罵語なり。

(三六)君臣を全く顧みず。輒ち敢て(三七)狂驍を肆にするとは。

〔末〕 陛下、若し宮に回へりたまはずんば、只だ怕らくは六軍の又た將に變を生ぜんとするを。

〔生〕 唏、陳玄禮、

爾は朕の權柄無く。(三八)閒居退朝せるを欺きて。只だ爾の威風有り。卒悍に兵驕るを逞しうす。法は恕し難く。罪怎んぞ饒さんや。內侍をして、快く這の亂臣賊子の首級をば(三九)懸梟せしむ。

〔小生・副淨〕 領 旨。

〔末を拏へ、殺して下り、(四〇)轉くを作す介〕

萬歲爺に啓あぐ、已に驛前に到れり。請ぞ萬歲爺進去みたまへ。

〔暗と下る〕〔生、進む介〕

〔黑麻令〕 只見る、(四一)沒多半、(四二)空寮廢寮の。冷淸淸、這の荒郊遠郊に臨むを。

內侍、娘娘は那裏に在りや。

〔回顧す介〕

呀、怎んぞ一箇も也た見えざる。

【三六】君臣。君臣の禮をいふ。
【三七】狂驍。狂暴に同じ。
【三八】閒居退朝。位を讓りて上皇となり、今は權柄のなきことを、馬鹿にしての意。
【三九】懸梟。首を刎ねて、獄門にさらすこと。
【四〇】轉く。一旦下り、又轉じて上り來ること。
【四一】沒多半。くづれて、半分もなき意。
【四二】空寮。空房に同じ。

罩則、颯刺刺、風搖れ樹搖れ。啾唧唧、四壁の寒蛩の絮くを聽くのみ。(四三)一片の愁苗怨苗。

〔哭する介〕

哎喲、我が那の妃子呵。

(四四)叫び出さず、(四五)花嬌月嬌。料ふに多應形消え影消えしならん。

〔内にて鑼を鳴らし、生、驚く介〕

呀、好だ奇怪、一霎時にして、驛亭までも、也た都て見えず。倒つて曲江の池上に來到れり。好だ一片の大水なるかな。

不隄防、(四六)斷砌頹垣。翻へつて(四七)驚濤怒濤と做らんとは。

〔望む介〕

爾看、大水の中間より、又一箇の怪物を湧出せり。(四八)猪首にして龍身、爪を舞はし牙を張り、奔突して來る。好怕人也。

〔内にて、鑼を鳴らし、猪龍に扮して、項に鐵索を帶び、跳り上つて、生を撲つ、生、驚き奔り、趕つて原の處に至り、睡る介〕〔二の(四九)金甲の神、鎚を執つて上り、猪龍を擊つて、喝する介〕

唏、(五〇)孽畜好だ無禮なり。怎んぞ又逃げ出して此に到り、聖駕を驚犯かしたてまつるや。還だ快く

【四三】一片の愁苗怨苗。一段の愁の種といふ意。

【四四】叫び出さず。呼び出すことが出來ない、いくら呼んでも出て來ない意。

【四五】花嬌月嬌。花月の嬌態、貴妃をいふ。

【四六】斷砌頹垣。馬嵬驛の荒廢をいふ。

【四七】驚濤怒濤。曲江池の出水をいふ。

【四八】猪首龍身。安祿山のおばけをいふ、第三十四齣、刺逆に出づ。

【四九】金甲の神。甲冑をつけたる武神をいふ、郭子儀李光弼に喩ふ。

【五〇】孽畜。畜生の意。

去らざるか。

〔猪龍を牽いて打つを作す介〕〔生、驚き叫ぶを作す介〕

哎喲、唬殺我也。

〔丑、急ぎ上りて扶くる介〕

萬歲爺、何すれぞ夢中大に叫びたまへる。

〔生、呆れ坐して、神を定むるを作す介〕

高力士、外邊は什麼の響ぞ。

〔丑〕是れ梧桐の上の雨聲なり。

〔内にて、四更を打つ介〕

(五一)〔江神子〕〔別體〕〔生〕我は只だ道ふ、誰か殘夢を驚かして(五二)飄へすと。原來是れ亂雨蕭蕭たり。恨然む、他の枕邊に肯て(五三)相饒さず。聲聲點點寒梢に到るを。只だ潑梧桐をば鋸き倒す待し。

高力士、朕方纔がた夢に兩箇の内侍が、楊娘娘の馬嵬の驛中に在りて、來つて朕を請び去ると道ふを見たり。多應芳魂未だ散せざるべし。朕想ふに、昔時(五四)漢の武帝は李夫人を思念ひしに、李少君

【五一】〔江神子〕〔別體〕この曲は梧桐雨の〔變姑兒〕〔倘秀才〕の二曲より出づ。

【變姑兒】懊惱、睿約、驚レ我來的、又不二是樓頭過雁、砌下寒蛩、簾前玉馬、架上金雞一、是兀那窗外梧桐雨瀟瀟、一聲聲灑二殘葉一、一點點滴二寒梢一、會把二愁人一定虐、

【倘秀才】這雨一陣陣打二梧桐一葉凋、一點點滴二入心一碎了、枉著二金井銀牀緊圍遶一、只好把二潑枝葉一、做二柴燒餬倒一、

【五二】飄。夢をさますこと。

【五三】相饒さず。遠慮もなくの意。

【五四】漢の武帝云云。漢の武帝神仙を好み方士を寵す、寵する所の李夫人の死してより、思慕して止まず、方士李少君をして、その姿を帳中に寫さしめしといふ故事、史記の孝武本紀に云ふ「上有二所レ幸王夫人一、夫人卒、少翁以二方術一、蓋夜致二王夫人、及竈鬼之貌一云、天子自二帷中一望見焉」とあり、然るに漢書の郊祀志には李夫人となせり、兩書共に少翁となし、李少君とは自ら別人なり、蓋し傳聞の訛なり、第二十七齣、冥追、反魂香の註參照。

有り、之が爲めに魂を召きて相見しめたりと。今日豈其の人無からんや。爾は天明を待つて、卽ち旨を傳へて、遍く方士を覓め來り、楊娘娘の與めに魂を召かしむ可し。

〔丑〕 領旨。

〔內にて、五鼓する介〕

(五五)〔尾聲〕〔生〕 紛紛たる淚點、珠の如く掉ひ。梧桐の上の雨聲厮鬧し。只だ一箇の窗兒を隔てて、直に滴つて曉に到る。半壁の殘燈、閃閃として明なり。(吳融)

雨中因つて想ふ、雨淋鈴。(羅隱)

傷心一たび覺む、興亡の夢。(方壺居士)

直ちに書を裁して、(五六)杳冥に問はんと欲す。(魏樸)

【五五】【尾聲】 この曲は梧桐雨大尾の【黃鍾煞】の結數句を學びしものなり、云ふ、

掛量來這一宵、雨和人緊厮熬、伴銅壺一點點敲、雨更多、淚不少、雨濕寒梢、淚染龍袍、不背相饒、共隔著一樹梧桐、直滴到曉、

【五六】 杳冥。冥府に赴いて、貴妃の消息を尋ねしむる意。

第四十六齣 (一)覓魂

〔淨、道士に扮し、小生・貼、道童に扮し、旛を執りて引き上る〕

(二)臨邛の道士、(三)鴻都客。能く精誠を以て、魂魄を致す。君王の展轉の思を感せしめんが爲めに。便ち遍處に殷勤に覓めしむ。貧道は楊通幽とは是れなり。籍は(四)丹臺に隸し、名は(五)紫籙に登る、(六)風を呼び電を掣して、氣を天門に御し、魄を攝り魂を招きて、神を地府に游ばしむ。只太上皇帝の、楊妃を思念ひまして、遍く異人を訪ね、魂を招いて相見んとしたまふが爲に、俺此に因つて詔に應じて來るに、太上皇帝は十分に歡喜せられ、

【一】 覓魂。道士が方術を以て貴妃の魂を求むる場。

【二】 臨邛の道士。臨邛は蜀中に在り、今四川の邛州なり、この四句は長恨歌を用ふ、但し第四句は、原來「遂教二方士殷勤覓一」に作れり、本齣は全く白詩の後半を粉飾せしものなり。

【三】 鴻都。漢宮の門の名、因て宮城となす、或は曰く、京師なり、或は曰く道觀なりと、何れも明瞭なし、後偶〻柳宗元の龍城錄を讀むに、「明皇夢遊二廣寒宮一」の條に、「開元六年、上皇與二申天師一道士、鴻都客一、八月望日夜、因二天師作一レ術、三人同在二雲上一遊」とあり、是に依れば、鴻都客は道士の名にして、楊通幽とは別人なり、白詩には兩人を混用せるに似たり。

【四】 丹臺。仙人の居る所なり、列仙傳に云ふ、「紫陽眞人周季道、遇二羨門子一、乞二長生訣一、羨門子曰、名在二丹臺石室中一、何憂レ不レ仙」と。

【五】 紫籙。仙人の名簿をいふ。

【六】 風を呼び電を掣し云云。以下道士の方術、天地に通じ風雲を御するをいふ。

詔して(七)東華門内に于て、(八)科に依りて法を行はしめたまふ。已に曾て法壇を結就したれば、今晩壇に登りて宣召せんとす。童兒、我に隨つて壇上に到去來れ。

〔童、劍水を捧げて、同行する科〕

(九)〔仙呂點絳唇〕〔淨〕只だ(一〇)他が一點の情緣。死生に怨を銜み。重ねて見んことを思ふが爲めに。咱が(一一)道力の無邊なるに(一二)憑著り。特地に神通をば顯はさん。

〔場上に高壇を建つる科〕

〔小生・貼〕已に壇に到れり。

〔淨〕是れは好き一座の法壇なり。

〔混江龍〕這の壇は本と(一三)虛空に在りて闢き建つ。(一四)象は太極を涵れ、(一五)先天に法る。(一六)無の中に陰陽の攢聚する有り。有の中に水火の(一七)陶甄する無し。

〔童〕基址は何に從つて立つや。

〔淨〕基址呵。

【七】東華門。宮城の門の名。

【八】科に依り。科は、規則といふ如し。

【九】【仙呂點絳唇】本齣は北曲、仙呂宮の套數を用ふ、元人雜劇の第一折に用ふる所と同じ、但し【混江龍】以下に至りては、字數甚多く、曲譜には合はず、且つ多く道士の方術を述べ、縱横に筆を揮ひたれば、意は解し難きに苦しむ、又固より解するを用ひず但し對句法に注意して讀むべし。

【一〇】他。明皇をいふ。

【一一】道力の無邊。限りなき、神通力をいふ。

【一二】憑著。たのむ意。

【一三】虛空。空中をいふ。

【一四】象は太極を涵れ云云。宇宙の本體に象る意、太極とは天地の本なり、易繫辭傳に云

(一八)五丁を遣はし、六甲を差はし、(一九)戊己を中央に運らして、當下に立つ。

〔童〕何の(二〇)工夫を用ひて成れるや。

〔淨〕工夫を用ふとは。

(二一)嬰兒を養ひ、姹女を調へ、(二二)乙庚を金木に配して、刹那に全し。

〔童〕壇上に(二三)戶牖有る可きか。

〔淨〕戶牖呵。

(二四)金雞に對し、(二五)玉兎に朝す。(二六)坎離(二七)卯酉。

〔童〕(二八)方向呢。

〔淨〕方向呵。

(二九)黃庭に鎭し、(三〇)紫極に通ず。(三一)子午(三二)坤乾。

〔童〕這の壇は多少の大さ有りや。

ふ、「易有二太極一、是生二兩儀一、兩儀生二四象一」と、兩儀は陰陽即ち天地なり。

【一五】先天。天地の初、宇宙の本體をいふ、老子第二十五章に「有レ物混成、先二天地一生、寂兮寥兮、獨立而不レ改、周行而不レ殆、可二以爲一天下母一、吾不レ知二其名一、字之曰レ道、强爲二之名一曰レ大」とあり。

【一六】無の中に云云。無といふも絶對の無に非ず、陰陽のあつまるあり、さりながら有といふも、まだ水火の分るることなし、即ち有無未分れざる境、又老子の「有無相生」の意なり。

【一七】陶甄。陶冶甄別、相分別すること。

【一八】五丁。六甲。神差をいふ、即ち道家にて役使する五丁六甲神なり。

【一九】戊己。中央。五行に於て、皆土に屬す、故に土を運ぶことに切なり。

【二〇】工夫。方法、法力をいふ。

【二一】嬰兒。姹女。童男童女をいふ、養ひ、調ふとは、修養の功をいふ、即ち老子の「復二歸於嬰兒一」の意なり。

【二二】乙庚。乙は木に屬し、庚は金に屬す、故に乙庚を金木に配すとは、金木の材料を配合する意なり。

【二三】戶牖。開いて居ること。

【二四】金雞。太陽をいふ。

【二五】玉兎。月をいふ。

【二六】坎離。易の八卦の名、坎は北、離は南に象る。

【二七】卯酉。卯は東、酉は西、即ち東西南北が皆開いて居ること。

【二八】方向。即ち方角のこと。

【二九】黃庭。地をいふ。

【三〇】紫極。天をいふ。

【三一】子午。子は北、午は南。

〔淨〕只是(三三)方隅に倚り、基階を占め。壇場は咫尺なりと雖も。却つて(三四)也た須彌を納れ。(三五)世界を藏む可く。(三六)道里由延なり。

〔童〕原來包維すること恁寛きか。

〔淨〕上に一周天、(三七)三百六十躔度内の星辰日月を包著む。

〔童〕想ふに、那の(三八)分統の處、量るに也た小ならじ。

〔淨〕中に(三九)四大洲、億萬百千の(四〇)閻浮界、岳瀆山川を分統つ。

〔童〕壇上誰か號令を聽くや。

〔淨〕號令を聽くは、則ち那些の(四一)稽滯無き(四二)司風・司火・司雷・司電なり。

〔童〕誰か驅遣に供するや。

〔淨〕驅遣に供するは、這の(四三)職掌有る、(四四)値時・値日・値月・値年に非るは無し。

〔童〕壇を繞つて、何の景象か有る。

〔淨〕半空中には、(四五)雝雝たる、鸞吟鳳嘯を繞らし。兩壁廂には、(四六)森森たる虎伏龍眠を列ぬ。端的に是れ一塵も染まず。(四七)衆妄都て鐲く。

〔三三〕坤乾。坤は東南、乾は西北、されば北に坐して、南に朝する方向なり。

〔三三〕方隅に倚り云云。一隅に立つて居れども、萬有を包含すべきをいふ。

〔三四〕須彌。卽ち佛說須彌山なり、一世界の中央金輪の上に在りて、七山七海環り列なる、水面より高さ八萬由旬、縱廣亦然り、四面皆一色にして、東は黃金、南は玻璃、西は白銀、北は瑪瑙、日月之により廻轉し、諸天之によりて居ると云ふ。

〔三五〕世界。佛說、三世を世といひ、八方を界といふ、又五世界、大千世界等の語あり。

〔三六〕道里由延。道里の廻りて遠きをいふ。

〔三七〕三百六十躔度。天空を三百六十度に分つ、躔は日月の運行をいふ。

〔童〕若し吾が師の無邊の道力に非ずんば、安んぞ能く此の無上の法壇を建てんや。

〔淨〕這れ全く、大唐朝の君王の福分に托賴る。敢て俺(四八)小鴻都の道力の精虔なるを誇らんや。

〔童〕請ふ、吾が師壇に上去れ。

〔內〕にて、細樂し、二童、淨を引いて壇に上る科〕

〔淨〕天風を趁ひ、仙樂に隨ひ。(四九)雙びに鸞旌を引著いて、高く(五〇)斗を步り。

〔內〕にて、鐘鼓する科〕

〔淨〕金鐘を響かし、法鼓を鳴らし。恭しく(五一)象簡を擎げて、迥かに(五二)元に朝す。

〔童、香を獻ずる科〕

請ふ吾が師、(五三)香を拈ぜよ。

〔淨、香を拈ずる科〕

這の香呵。

〔三八〕分統。分界に同じ。

〔三九〕四大洲。佛經に四大洲あり、東勝身洲、南贍部洲、西牛貨洲、北俱盧洲をいふ。

〔四〇〕閻浮界。佛語、此世をいふ、世界といふ如し。

〔四一〕稽滯無き。命を奉ずれば、遲滯することなき意。

〔四二〕司風・司火・司雷・司電。皆神の使をいふ。

〔四三〕職掌有る。任務を有する意。

〔四四〕値時・値日・値月・値年。その時、その日、その月、その年の當番をいふ。

〔四五〕雝雝。和鳴すること。

〔四六〕森森。多數をいふ。

〔四七〕衆妄都て鐲く。無慾なる極樂世界をいふ。

〔四八〕小鴻都。大唐朝に對して用ふ、小道士鴻都客といふ意。謙稱なり。

〔四九〕雙びに。左右對をなすこ

他の(五四)西天竺、(五五)旃檀林、(五六)青獅窟の、根は(五七)鸞鷟の蟠るごとく。(五八)東洋の海、波斯國、(五九)瑞龍腦の、形は蠶蟬に似たるを(六〇)算へず。(六一)祥雲を結び、寶霧を騰げて、直ちに霄漢を衝き。(六二)清微を透し、碧落を縈りて、普く(六三)眞玄に供す。(六四)第一灶は、當今の皇帝の、無疆の聖壽を享けたまひて。(六五)洪圖を保ち、社稷の鞏く、國祚の延綿たらんことを祝りまつり。第二灶は、疆埸靜に、(六六)烽燧銷え、普天の下、各道各州各境里、民安く盜息みて、征戰無く。禾黍登り、蠶桑茂り、百姓每、若しくは老、若しくは幼、若しくは壯なる者、家封じ戶給して、田園に樂まんことを願ひ。第三灶は、單只(六七)死生分れて、情滅びず、這の香頭の一點に憑つて(六八)夜臺の魂を溫熱了めんと待し。幽明隔たりと。

【五〇】斗を步り。壇上北斗を拜すること、步は天文推步の意なり。

【五一】象簡。象牙の笏をいふ。

【五二】元に朝す。天に朝することを、元は天地の元氣をいふ。

【五三】香を拈す。燒香のこと。

【五四】西天竺。印度のこと。

【五五】旃檀林。旃檀は香木なり、王維の六祖碑に云ふ、「林是旃檀、里無雜樹、花惟薝蔔、不聞餘香」と。

【五六】青獅窟。瑞龍腦に對して用ふ、原來香の產地にして、香の名に冠するか。

【五七】鸞鷟の蟠る。根の糾繞盤屈するに喩ふ。

【五八】東洋の海。西天竺に對して用ふ、深意なし。

【五九】瑞龍腦。名香の一種。

【六〇】算へず。物の數ならぬこと、天竺や、波斯の名香も比較にならぬ意。

【六一】祥雲を結び云云。香烟の騰がることをいふ。

【六二】清微。空氣をいふ。

【六三】眞玄。一本眞如に作る、宇宙の本體をいふ、老子に所謂、「谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地之根」、又「玄之又玄、衆妙之門」の意なり。

【六四】第一灶。灶は燒香のこと、第一灶は皇帝萬歲の爲、第二灶は人民安寧の爲、第三灶が招魂の爲なるをいふ。

【六五】洪圖。大帝國をいふ。

【六六】烽燧。兵亂を報するのろし。

【六七】死生分れて、情滅びず。幽明隔りて情了り難くに對す、明皇貴妃の、死生幽明を隔てて、思慕の情頗る切なるをいふなり。

【六八】夜臺の魂。貴妃が地下の

て、情了り難く、此の香煙の百轉を倩つて、(六九)春風の面を吹現出さんことを思ふが爲なり。

〔童、花を獻ずる介〕

花を散けよ。

〔淨、花を散く科〕

這の花呵。

他の(七〇)老瞿曇が(七一)迦葉に對して、(七二)糊塗笑つて撚るを學ばず。他の諸天女が(七三)維摩を訪ひて、(七四)撒漫飛旋せるを勞する謾れ。俺は特地に(七五)薝蔔を採りて、(七六)閻苑を踏み穿ち。幾度價か、(七七)懷夢を尋ねて、(七八)瓊田に摘み徧ねし。神奇を顯はして、他の(七九)殘英をば再び相思樹に接せんと要し。伎倆を施して、管ず他の落花をして重ねて並頭の蓮を放たしめん。

〔童、燈を獻ずる科〕

魂をいふ。

【六九】春風の面。貴妃が生前の美貌をいふ。

【七〇】老瞿曇。釋迦をいふ、釋迦譜に云ふ、「淨飯遠祖、捨國修行、受瞿曇姓、故曰瞿曇氏」と。

【七一】迦葉。釋迦の十大弟子、大迦葉なり。

【七二】糊塗笑つて撚る。笑つてごまかす意、所謂拈華一笑の故事、五燈會元に云ふ、「世尊在靈山會上、拈華示衆、是時衆皆寂然、惟迦葉尊者破顏一笑、世尊云、吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門、不立文字、敎外別傳、付囑摩訶迦葉」と。

【七三】維摩。維摩詰、菩薩の名、その義を淨名となす。

【七四】撒漫飛旋。飛翔して花を散くこと、所謂天女散花の故事、維摩經に云ふ、「會中有一天女、以天花散諸菩薩悉皆墮落、至大弟子、便着不墜、天女曰、結習未盡、故花着身、結習盡者、花不着身」と。

【七五】薝蔔。香の名、拾遺記に云ふ、「武帝息于延涼、臥夢李夫人授帝薝蔔之香、帝驚起、香氣著衣枕、歷月不散」。

【七六】閻苑。閻風に同じ、崑崙山に在り、仙人の居る所なり、集仙傳に云ふ、「西王母所居宮闕、在龜山、崑崙之圃、閻風之苑、左帶瑤池、右環翠水」と。

【七七】懷夢。草の名、紅豆に相思子といふ如くなるべし。

【七八】瓊田。仙山をいふ、十州記に云ふ、「東海有不死之草、生瓊田中」と。

【七九】殘英を再び相思樹に接す。「落花をして重ねて並頭蓮を放たしめん」に同じ、明皇と

燈を獻せよ。

〔淨、燈を捧ぐる科〕

這の燈呵。

爛輝輝として、靈光常に千秋に向つて照らし。燦熒熒として、(八〇)心燈只一情の爲めに傳ふ。(八一)衡遙石の、懷中に秘授し。(八二)還形燭の、帳裏に高く燃ゆるも(八三)抵多少。他は則ち癡情を續いで、這の殘燈の焰に接上せんと要し。俺は神燈を點じて、那の(八四)舊寃愆を照徹せんと可待す。

〔童、法盞を獻ずる科〕

請ふ吾が師、(八五)水を咒へ。

〔淨、水を捧ぐる科〕

這の水呵。

曾て(八六)比目を游がせ。曾て雙鴛を汎ぶ。儞道ふ

貴妃をして、再び夫婦の舊緣を復さしめんとの意。

【八〇】心燈。佛家の語、心靈といふ如し、不昧の意なり。

【八一】衡遙石。之を懷けば則ち相思ふと、前の懷夢の如くなるべし。

【八二】還形燭。道士の還魂に用ふる燭をいふ、瑯環記に云ふ、「楊太眞馬嵬變後、明皇朝夕思惟、有二道士一以二少君術一求レ見レ上、畫二一女人像一、供二諸五色帳中一、復以二五色石一研絕細、和以二諸藥一、作レ燭、外畫二五色花一、謂二之還形燭一、定昏時請レ上自乘レ燭入レ帳、既入、見二太眞在一帳中一」と。

【八三】抵多少。とてもあたらざる意。

【八四】舊寃愆。舊日の寃業をいふ。

【八五】水を咒ふ。水に對して咒文を唱へること。

【八六】比目。雙鴛。夫婦の意。

【八七】魚の水を得たるが如し。原文には如二魚也那得レ水とあり、也那は助字なり、魚の水を得たりとは夫婦の仲善きに喩ふ。

【八八】水米。茶飯をいふなり、「交纏するなし」とは、貴妃の死後、茶飯を供へて、其靈を祭ることもなしといふ意。

【八九】波の終に竭く。恩情の斷絕に比するなり。

【九〇】浪の掀げ易き。情海の波瀾をいふ。

【九一】滄海を經て水と爲し難し。既に大海を見れば、他の水流を見るも、水とするに足らざる意、孟子盡心篇に云ふ、「孟子曰、孔子登二東山一而小二魯、登二太山一而小二天下一、故觀二於海一者、難レ爲レ水、遊二聖人之門一者、難レ爲レ言」と、表は供養の水なれども、裏面の

を漫めよ、當日箇、(八七)魚の水を得たるが如しと。知道る可し、到頭來(八八)水米も也た半點の交纏する有る沒し。數へ盡さず、情河愛海、(八九)波の終に竭くるを。那等幻泡浮漚、(九〇)浪の掀げ易きに似たり。他は只だ道ふ、曾て(九一)滄海を經て、水と爲し難しと。怎んぞ俺が這の一滴の(九二)楊枝の、九泉に徹するに如かんや。

〔童〕供養已に畢れり、請問、吾が師、如何に法を行ひて魂を召すや。

〔淨〕儞我が與に(九三)招魂衣を攝り、(九四)遺照圖を懸け。(九五)龍墀を淨掃し、鳳幄を高く褰げよ。那の二更以後、三鼓の前。眠猫も吠えず、宿鳥も喧無く。葉は樹杪に寧く、蟲は階沿に息ひ。露明に星皓く、月漏れ風穿ち。潛潛隱隱、冉冉翩翩、步珊珊、(九六)是耶非、一箇の佳人の現ずるを看るを等到つて。纔に(九七)人間の幽恨、(九八)地下の殘緣を(九九)折證せん。

〔內にて、(一〇〇)法音を奏する科〕〔丑、(一〇一)青詞を捧げて上る〕

九天(一〇二)青鳥の使、一幅(一〇三)紫鸞の書。

〔進んで跪く科〕

高力士、太上皇の命を奉じ、謹んで青詞を送つて此に到る。

意は、明皇は既に貴妃の如き絕世の美人を見た後は、尋常の美人など、美人と思はぬ意。

【九二】楊枝。咒水をいふ、法苑珠林に云ふ、「佛圖澄天竺人、石勒聞レ名召レ之、其子暴病、澄取二楊枝一、沾レ水洒レ之遂甦」と卽ち吾が法力によつて、貴妃を反魂再生せしむる意。

【九三】招魂衣。招魂術を行ふ時に著る法服をいふ。

【九四】遺照圖。寫眞といふ如し。

【九五】龍墀、鳳幄。道場をいふ。

【九六】是耶非。あるかなきかにぼんやり現はるること。

【九七】人間の幽恨。明皇にかかる。

【九八】地下の殘緣。貴妃にかかる。

【九九】折證。幽恨殘緣の未了らざるを證明する意。

〔童、詞を接けて進み上る科〕〔淨、丑に向つて拱する科〕

(一〇四) 中官、且請ぞ壇外にて、少らく候片時よ。

〔丑、應じて下る〕

〔油胡蘆〕〔淨〕 俺れ只だ見る、御筆の青詞(一〇五)鳳箋に寫すを。漫ろに頭より仔細に展ぶ。單只死離生別せる、那の(一〇六)嬋娟の爲めに。牢く眞情を守り定りて、一點も更らに變る無く。他の芳魂と、兩下重ねて相見んと待想ふ。俺索に(一〇七)李夫人を召して、帳中に來らしむべし。煞だ(一〇八)西王母の殿前に臨むより强如る。(一〇九)穩情取、(一一〇)漢の劉郎をして、心頭の願を遂却げ。今宵に向つて、同に欵欵因緣を話さしめんことを。

(一一一)〔法器を動かす科〕〔淨、法を作し、符を焚きて念ずる科〕

此の道符章は、(一一二)鶴翥び鸞翔る。(一一三)功曹符使、速かに壇場に涖め。

〔雜、符官に扮し、騎馬にて舞ひ上り、見る科〕

仙師、何の法旨か有る。

〔淨、符を付す科〕

(一一四) 使者を煩はす有り、此の符命を將つて、速かに貴妃楊氏の陰魂を召して、壇に到らしめよ。

〔雜、符を接くる科〕

領法旨。

〔馬に上り、場を繞るを做して下る〕

〔天下樂〕〔淨〕 俺は只見る、(一一五)力士の(一一六)黃巾して去いて召宣すを。鞭を揚げて暫らくも(一一七)延べず。管ず他をして陰風を閃めかして、一靈兒を勾きて前に向はしめん。俺這裏にては、靜悄悄として、壇上に(一一八)躬身して等ち。他那裏にては、急煎煎として、宮中に(一一九)望眼めて穿たん。呀、怎んぞ多半日なるに、(一二〇)雲頭は轉ずるを見ざるや。

何すれぞ、此時還だ到來らざるや。好だ疑惑也。

〔那吒令〕 濶迢迢なる山前水前。(一二一)香魂を望めば渺然たり。黯沈沈き星前月前。芳容を盼れば杳然たり。冷淸淸き階前砌前。靈蹤を聽けば悄然たり。不免や再び一道の(一二二)催符を燒き去らん。

〔符を焚く科〕

(一二三) 蠢硃符、住めずに燒き。(一二四)歹劍訣、空しく掐み遍し。枉しく(一二五)准

【一〇〇】法音。道家の音樂をいふ。

【一〇一】青詞。祭文のこと、文體明辯に云ふ、「青詞者方士懺過之詞也、或以祈福、或以薦亡、唯道家用之」と、青詞の文は青藤紙を用ひて、朱字にて寫す、故に青詞といふ。

【一〇二】青鳥の使。天子の使者をいふ、漢武故事に云ふ、七月七日、急有二青鳥一、飛集二殿前一、東方朔曰、此西王母欲レ來、有レ頃王母至、二青鳥夾二侍王母傍一」と。

【一〇三】紫鸞の書。天子の詔をいふ。

【一〇四】中官。內侍に同じ、宦官をいふ。

【一〇五】鳳箋。立派なる紙をいふ。

【一〇六】嬋娟。貴妃をいふ。

【一〇七】李夫人。雨夢酬の末に出づ。

【一〇八】西王母。西王母が武帝の宮中に降りしこと、漢武內傳漢武故事に詳なり。

【一〇九】穩情取。管保に同じ、うけあひの意。

【一一〇】漢の劉郎。武帝のこと、明皇に喩ふ。

【一一一】法器を動かす。法音を奏するに同じ。

【一一二】鶴翥び鸞翔る。天に翔ける意。

【一一三】功曹符使。使者をいふ、功曹は屬官なり。

【一一四】使者を煩はす有り。御苦勞だがといふ意。

【一一五】力士。符使をいふ。

【一一六】黃巾。道巾、道家は黃色を重んず。

【一一七】延。遷延の意。

【一一八】躬身。拜すること。

【一一九】望眼穿。孔を穿たんばかりに見つめて居ること。

【一二〇】雲頭の轉ずる。雲が動く

沒さの眞言を念殺ず。

〔雜、上つて見る科〕

仙師に（二六）覆さく、小神は（二七）人間にて遍く楊氏の陰魂を覓めたるも、召し取るに從無し。

〔淨〕符使、且らく退け。

〔雜〕領法旨。

〔舞ひ下る〕〔淨、壇を下る科〕

童兒、高公公を請うて、相見ん。

〔童、內に向つて請ずる科〕

高公公、有請。

〔丑、上る〕

（二八）玉漏は長短を聽き。芳魂は有無を問ふ。

〔見る科〕

仙師、楊娘娘は可曾て召し到るか。

〔淨〕方纔符使到來りて說はく、娘娘は召し取るに從無しと。

こと、使者が陰風を御し、雲に乘りて歸り來ること。

【二二】香魂、芳容、靈蹤。皆貴妃をいふ、待てど暮せど更にたよりなき意。

【二三】催符を燒く。督促する意。

【二四】蠹硃符。罵語、符の靈ならざるを罵るなり。

【二五】歹劍訣。罵語、同前、劍訣とは手指にて劍の形をなす、呪法なり。

【二六】准沒き眞言。ききめなき不靈の呪文を唱ふる意、何れも應驗のなきを罵るなり。

【二七】覆す。返事の意。

【二八】人間。人界の意。

【二九】玉漏。漏斗のこと。長短を聽くとは、待遠うの意。

〔丑〕呀、此の如くんば怎生せば是れ好からん。

〔淨〕公公、且らく去いて覆旨し、貧道が就ち壇中に在つて、（二九）元神を飛び出さしめ、天に上り地に入るを論せず、（三〇）好歹娘娘を尋著ぬるを待たれよ。三日を出でずして、定ず消息の回報する有らん。

〔丑〕太上皇は思念したまふこと、甚だ切なれば、仙師、是必ず意を用ひよ。且らく方士の語を傳へ。去つて上皇の情を慰めん。

〔下る〕〔內にて細樂し、淨、（三一）鶴氅に更たむる科〕

童兒、壇に在りて、小心に伺候せよ。俺は自ら（三二）打坐して、神を出し去らん。

〔童〕領法旨。

〔內にて、鐘鼓を鳴らすこと各二十四聲、淨、壇に上りて端坐し、（三三）齒を叩き、目を閉ぢて神を出すを作す科〕

〔童〕儞看、我師は神を出し去れり。不免や雲幃を放下して、壇下に伺候せん則個。

〔壇上の帳幔を放すを作し、淨、暗と下る〕

〔童〕壇上鐘聲靜かに。天邊雲影閒なり。

【二九】元神。精神、精靈をいふ、元神を飛び出さしむとは、即ち鎭魂歸神の法に同じ、長恨歌の精誠を以て魂魄を致すに應ず。

【三〇】好歹。兎も角、是非ともの意。

【三一】鶴氅。法服なり。

【三二】打坐。端坐すること。

【三三】齒を叩き。上下の齒を嚙みあはすこと、修眞法の一なり。

〔同に下る〕

〔末、〕(一三四)道士の元神に扮し、墳後より轉じて行き上る〕

〔鵲踏枝〕瞑子裏に(一三五)眞元を出す。夢遊の仙も(一三六)抵多少。俺は則ち虛空を踏破し、去つて嬋娟を訪はんと待す。

貧道楊通幽は、上皇に楊妃の魂魄を尋覓めんことを許ししが爲めに、特に元神を出して、到る處に遍く求めん。如今先づ那裏に到り去らん。

〔思ふ科〕

嘎、有了。

且らく自ら(一三七)閶闔に叫び。輕く(一三八)玉殿を干すを(一三九)慢めて。索らく先づ去いて幽冥に赴き。大に黃泉を索むべし。

此に來れば已に是(一四〇)酆都城なり。

〔內に向ふ科〕

(一四一)森羅殿上の判官何くに在りや。

〔判、跳つて上り、小鬼隨つて上る〕

善惡は(一四二)鐵算子に細分せられ。古今は(一四三)大輪廻を出でず。仙師、何

【一三四】道士の元神。これよりは、道士に非ず、道士の靈なり。

【一三五】眞元。元神に同じ。

【一三六】抵多少。前に出づ、我は肉體を離れて、靈となつたれど、のんきな夢遊の仙どころではなし、天上にかけ上りて是非とも貴妃の魂を招かんとの意。

【一三七】閶闔。天門をいふ。

【一三八】玉殿。天宮をいふ。

【一三九】慢。ゆつくり、後廻はしにする意、卽ち人界に既になし、天界を後にして、地界を先にするなり。

【一四〇】酆都城。地獄のこと、第二十七齣、冥追に出づ。

【一四一】森羅殿。閻魔殿に同じ、十王廳をいふ。

【一四二】鐵算子。地獄に在る鐵の算盤、之にて善惡を差引き勘定すること。

事あつて降臨せられしや。

〔末〕貧道特に來つて大唐の貴妃楊玉環の鬼魂を尋覓む。

〔判〕凡て是れ宮嬪妃后は、地府には、另に文冊有り。仙師、請ふ坐し、且らく簿を呈するを待つて、查看せられよ。

〔末、坐する科〕〔鬼、冊を送り、判、冊を遞す科〕〔末、看る科〕

〔寄生草〕這是、一本の宮嬪の冊。歷朝の妃后の編にて。一箇の(一四三)壓弧箕服周宗をば殄くせる有り。一箇の(一四四)牝雞野雉、劉宗をば煽れる有り。一箇の(一四五)蛾眉狐媚、唐宗をば變せし有り。好だ奇怪、古今來の(一四六)椒房金屋、盡く標題せるを看るに。怎んぞ楊太眞の名字、其の中に現はるる沒有きや。

地府には既に無ければ、貧道去らん。不免や天上に向つて尋覓むることを一遭せん。

〔虛と下る〕〔判、跳り舞ひ下り、鬼、隨つて下る〕〔二仙女、旌幢、貼の朝服して(一四八)拂を執れるを引いて上る〕

高く霓旌を引いて(一四九)絳闕に朝し。緩く(一五〇)鳳舄を移して紅雲を踏む。

【一四三】大輪廻。佛家の語、轉生の意。人畜は一生一死、六道の中に輾轉すること車輪の如くなるをいふ、心地觀經に云ふ、「有情輪廻、生二六道一、猶如二車輪一、无二終始一、或爲二父母一、爲二男女一、生生世世、互有レ恩」と。

【一四四】壓弧箕服云云。周の褒姒をいふ、周の宣王の時に童謠あり、曰く、壓弧箕服（桑の弓、箕のやなぐひ）、實亡二周國一と、適〻是の器を鬻ぐものありしかば、宣王之を執へしめしに、その人逃れ道に棄女を見て、その夜號くを哀み、之を取つて褒に逸せり、幽王の時褒人罪あり、是の女を王に入る、是を褒姒となす、王之を嬖し、遂に國を傾くるに至る。

【一四五】牝雞野雉云云。漢の呂太后をいふ、呂后諱は雉、漢人

吾は乃ち天孫織女、(一五一)玉宸に向つて朝見するに因り、來つて天門に到るに、前面より一個の道士來れり。是れ誰なるかを看ん。

〔末、上る〕

〔玄篇〕足を拔いて纔に地を離れ。神を飛ばして直ちに天に上る。

〔貼を見る科〕

原來是、織女娘娘、小道楊通幽叩首。

〔貼〕通幽、(一五二)免禮、此に到るは何事ぞ。

〔末〕小道は大唐太上皇の命を奉じて、玉環楊氏の魂を尋訪ねしに、適〻地府に從つて、之を求むれども得ず、特に天上に來りて找尋ぬるに、誰か知らん、天上にも亦無し。此に因つて(一五三)一遝出で來れり。若し是れ(一五四)嫦娥に伴つて、共に(一五五)蟾宮をば戀ふるならずんば。多敢是(一五六)雙成を趁ひて、同に(一五七)瑤池に向つて現はれしならん。

〔貼〕通幽、那の玉環の魂は、原と地下にも在らず、天上にも在らず。

〔末〕呀、早く難道(一五八)梁清を逐ひて、又天曹の譴を受けんや。那の霓裳善舞の俊楊妃を尋ねんと要するに。到つて(一五九)留仙不住の(一六〇)喬飛燕と做

誹を避け、雉を改めて野雞といふ、牝雞は牝雞の晨を司る意、呂后高祖を内に輔けて天下を定め、惠帝の暗弱なるを以て、太后自ら天下に號令し、諸呂を王として、劉氏を危うせり。

【一四六】蛾眉狐媚云云。唐の則天武后をいふ、武氏高宗の后となり、權略あり、後帝位に即き、國を周と號し、則天大聖皇帝といふ。

【一四七】椒房金屋。皇后妃嬪をいふ。

【一四八】拂。拂子のこと。

【一四九】絳闕。天宮をいふ。

【一五〇】鳳舄。靴をいふ。

【一五一】玉宸。玉帝の宮をいふ。

【一五二】免禮。挨拶の辭。

【一五三】一遝。まつすぐにの意。

【一五四】嫦娥。月主なり、第十一齣、開樂に詳なり。

【一五五】蟾宮。月のこと。

了りぬ。

〔貼〕通幽、楊妃は既に覓むる處無ければ、爾索さに自ら去つて覆旨すべきこと、便了。

〔末〕娘娘、覆旨するは難からざれども、不爭ん小道呵。

〔後庭花滾〕沒來由、金鑾に向つて、大言を出し。元神を運らし、空を排して電の轉ずるが如く。(一六一)一口の氣、他に(一六二)上下裏に、花貌を尋ぬるを許了しぬ。莽に擔承け、(一六三)虛無中に向つて、麗娟を覓む。

〔貼〕誰か爾に弄嘴し來らしめしや。

〔末〕是れ俺が(一六四)沒干纏に、自ら驅遣を尋ぬるに非ずして。單只老君王の(一六五)鍾情生死堅く。舊盟棄捐てざるが爲めなり。

〔貼〕馬嵬の坡下、既已に(一六六)玉を碎き香を

【一五六】雙成。董雙成、西王母の侍女、漢武内傳に出づ。

【一五七】瑤池。西王母の居る所。

【一五八】梁清。仙童の名、梁清を逐ひかけし爲に、天の罰を受けしこと、故事明ならず。還魂記の幽媾齣にも「莫レ不二是小梁清夜走天曹罰一」の句あり。

【一五九】留仙不住。仙を留め得ざる意、霓裳善舞に對して、留仙裙の故事を用ふ。飛燕外傳に云ふ「后歌二中流一、歌酣風大起、后順二風揚レ音、無方長嘯細嚬、相與屬二后裙幹一曰、願レ我願レ我、后揚レ袖曰、仙乎仙乎、去レ故而就レ新、寧忘レ懷乎、帝曰、無方爲レ我持レ后、無方捨レ吹持二后履一、久之風霽、后泣曰帝恩レ我、使二我仙得不レ待、悵然曼嘯、泣數行下、帝益愧愛、后賜二無方千萬一、入二后房闥一、他日宮姝幸者、或嫉レ裙爲レ綽、號曰二留仙裙一」と。

【一六〇】喬飛燕。喬の字、俊に對す、俊は俏に同じ、いきの意、喬は假に同じ、にせの意、かの霓裳の舞に巧なるいきな楊貴妃を尋ねようとすれば、却て仙になりそこねた、にせの趙飛燕となつてしまつたかと、尋ぬる處なきを嘆ずる意なり。

【一六一】一口の氣。一氣にの意。

【一六二】上下裏。天に上り地に入る意。

【一六三】虛無中。大膽に引き受けたれども、今や貴妃を尋ぬるにあてのなき意。

【一六四】沒干纏。無關係の意、むやみやたらに、自ら求めて奔走するのではなく、明皇の情の深きが爲であるとの意。

【一六五】鍾情生死堅く。情の鍾まる處、死生と雖も渝らぬ意。

【一六六】玉を碎き香を採む。貴妃に死を賜はりしこと。

揉めるに、還ほ甚の情を討ね來るや。

〔末〕 娘娘、(一六七)人を屈するを休めよ。

想ふ當日、亂紛紛、乘輿播遷に値ひ。翻滾滾、(一六八)羽林に鬧喧を生じ。惡狠狠、兵驕り將又專に。焰騰騰、威行はれ虐肆に煽り。(一六九)交頸の鴛を由らず。昏慘慘、妃后の寃を結び成し。撲刺刺、生ながら(一七〇)杜鵑分開き。格支支、輕く並蒂の蓮を撏搦り。致使得、嬌怯怯、遊魂を逐はしめ。空落得、哭哀哀、悲啼んで(一七一)楚猿を咽ばしむ。恨茫茫、高く(一七二)太華と連なり。淚漫漫、平かに滄海をば塡む。

〔貼〕 如今死生久しく隔り、歲月頻りに更まる。只怕らくは此情も也た漸く淡からんことを。

〔末〕 那の上皇呵。

精誠歲年を積み。說べ盡さず、相思の萬千を累ぬるを。(一七三)鎭日家、嬌容をば心坎に鐫り。每日裏、芳名をば口上に編む。(一七四)殘鈴の劍閣に懸るを聽き。(一七五)衰梧に秋雨の傳はるに感ず。暗に心を傷めて(一七六)肺腑煎り。漫に(一七七)魂を銷して(一七八)形影憐む。(一七九)香囊に對して呵、恨を惹いて(一八〇)綿たり。錦襪を抱いて呵、空しく淚漣たり。玉笛を弄して呵、舊怨を懷ひ。琵琶を撥つて呵、(一八一)斷絃を憶ふ。坐ては凄涼。思へば亂纏。睡れば(一八二)迷離。夢は倒顚す。一心兒、癡は變ぜず。十分家、病怎んぞ痊えん。(一八三)嬌花の再び鮮かならざるを痛み。芳魂の重ねて前に至るを盼む。

〔貼〕 (一八四)前夜牛郎も、曾て李三郎の爲に辨白せり。今他が說來るを聽けば、果して此の如く情眞然なり。亦可憐の人なり。

〔末〕 小道呵。

他が意中の人、緣の未だ全からざるを生憐み。俺(一八五)閒中の客を打動かして、情慢に牽かれしむ。此上に因つて、(一八六)他の往返に蹟くを辭せず。甘んじて這の辛苦を肩ふ。猛かに泉臺をば(一八七)踏んで穿ち。早く又穹蒼をば(一八八)磨つて圓からしむべし。誰か知らん、他は(一八九)長風の斷鳶を吹くと做り。(一九〇)晴曦の曉煙を散ずるに似んとは。(一九一)莽桃源、花の一片を尋ね出さず。(一九二)冷巫山、雲の半邊を找ね著けず。好だ俺をして空中に向つて、(一九三)袖手をば展べ難く。雲頭に竚んで、惟だ目を睜つて(一九四)延つ有るのみならしむ。(一九五)百忙の裏、幻し出さず、(一九六)春風圖畫の面。(一九七)揑ね就さず、(一九八)

【一六七】人を屈す。寃屈の意、無實の罪をきせて、苦むること、前に土地神は貴妃の爲に寃を訴へ、後に道士は明皇の爲に屈を辯じ、兩兩相對す。

【一六八】羽林。近衞軍をいふ。

【一六九】交頸の鴛、並蒂の蓮。共に夫婦に喩ふ。

【一七〇】杜鵑。望帝を以て明皇に擬す。

【一七一】楚猿。楚蜀の間、三峽に猿多し、故に云ふ、以て明皇の斷腸に喩ふ。

【一七二】太華。西嶽華山をいふ。

【一七三】鎭日家。鎭日價に同じ、家、價は助字なり。

【一七四】殘鈴云云。第二十九齣、閒鈴に出づ。

【一七五】衰梧云云。前の雨夢の齣に詳なり。

【一七六】肺腑煎り。思を焦がすこと。

【一七七】魂を銷す。心を傷むるに

同じ。

【一七八】形影憐む。一人相顧みて憐む意。

【一七九】香囊、錦襪。共に第四十三齣、改葬に出づ。

【一八〇】綿。綿綿の意。

【一八一】斷絃。夫婦の絕緣に喩ふ。

【一八二】迷離。不明白の意、うとうとすること。

【一八三】嬌花、芳魂。共に貴妃をいふ。

【一八四】前夜牛郎。第四十五齣、慫合に詳なり。

【一八五】閒中の客。ひま人の意、意中の人と對す。

【一八六】他の往返。這の辛苦に對す、往返の辛苦に勞するを憚らざる意。

【一八七】踏み穿ち。冥途の泉臺を踏みぬくこと。

【一八八】磨つて圓からしむ。天空を磨りへらすとも貴妃の行く

名花傾國の妍。若し紅顏の重ねて出現するを得ずんば。怎んぞ俺(一九)黃冠をして、獨り自ら還らしめん。

娘娘呵。

則ち問ふ、他が那の精靈は(二〇〇)何處の天なるかを。

〔貼〕通幽、儞若し必ず他を見んと要せば、待、我れ一箇の所在を指し、儞の與めに去つて尋訪せしめん。

〔末、稽首する科〕

請問娘娘、玉環は見に何處に在りや。

〔青哥兒〕謝す娘娘の咱が與に、咱が與に方便せられ。玉人の消息、消息をば親しく傳へらるるを。多少(二〇一)花に根芽有り、水に源有るを得ん。則ち他は誰邊に落在るか。望むらくは明言

衞を尋れんとの意。

【一八九】長風の斷鳶を吹く。鳶が風に吹き飛ばされること、貴妃の何處へ往つたか分らぬ意。

【一九〇】晴曦の曉烟を散ず。日が出て烟が晴れる意なれども、ここでは曉烟に日が蔽はるることとせざれば通じ難し。

【一九一】莽桃源。莽は罵語なり、桃花の源に溯りて、仙人に逢ひしこと、桃の一片を貴妃に喩ふ。

【一九三】冷巫山。冷の字は莽の字に對し、巫山神女の故事、雲の半邊は貴妃に喩ふ。

【一九三】袖手をば展べ難く。袖手旁觀するあるのみの意。

【一九四】延つ。遷延の意。

【一九五】百忙の裏。非常に多忙の際をいふ。

【一九六】春風鬪畫の面。杜甫の詩句を用ふ。改葬劒の註に出づ。

【一九七】捏れ就さず。塑像を造るに喩ふ、貴妃を求め得ざるをいふ。

【一九八】名花傾國の妍。李白の清平調の詩句を用ふ、前に出づ。

【一九九】黃冠。道士の冠、紅顏に對して用ふ、貴妃の靈を求め得ずんば、ただでは還へらないといふ意。

【二〇〇】何處の天。何處に居るかといふ意。

【二〇一】花に根芽あり。花の本、水の源がわかる樣になれば結構だといふ意。

【二〇二】留連せじ。ここにぐずぐすしては居らぬ意。

【二〇三】另に周旋ありと。別に手段がある、尋常の手段では往かれぬ意。

【二〇四】洞府は何天。仙洞は何天に在るか、又そこへはどうしたら行き得るかを、敎へ給へといふ意。

を賜はらば。我は便ち疾く跟前に到りて、敢て(二〇五)留連せじ。

〔貼〕通幽、儞は世界の外に、別に世界有り、山川の內に、另に山川有るを聞かざるか。

〔末〕聽說道世外の山川は。(二〇六)另に周旋有りと。只知らず、(二〇七)洞府は何天なるか。(二〇八)渡を問ふは、何に緣るかを。

〔貼〕那の東極巨海の外に、一仙山有り、名づけて(二〇九)蓬萊と曰ふ。儞那裏に到らば、便ち楊妃の消息有らん。

〔末〕娘娘の指引を多謝す。

上下の(二一〇)俄延を枉了うして。都て(二一一)北轍南轅と做了ぬ。元來只(二一二)弱水の三千。(二一三)溟渤の風煙を隔てて。那の(二一四)鱗鳳洲の偏。(二一五)蓬閬山の顚に在り。那裏には、(二一六)蕙圃芝田。白鹿玄猿。(二一七)琪樹の翩翩。瑤草の芊芊。碧瓦雕檐。月館雲軒。樓閣の蜿蜒。門闥の勾連有りて。塵喧を隔斷て。神仙を合住ましむ。

〔貼〕這般說ふと雖も、只怕らくは那裏は、天涯を絕て、海角に跨り、途路遙に遠ければ、儞去き得ざらん。

【二〇五】渡を問ふ。道案內を尋ねること。

【二〇六】蓬萊。東海の中に在りといふ、史記封禪書に云ふ、「自二威宣、燕昭一、使二人入レ海、求二蓬萊方丈瀛洲一、此三神山者、其傳在二渤海中一、去レ人不レ遠、患且レ至、則風引而去、蓋嘗有二至者一、諸仙人及不死之藥皆在焉、其物禽獸盡白、而黃金銀爲二宮闕一、未レ至望レ之如レ雲、及レ到、三神山反居二水下一、臨レ之風輒引去、終莫二能至一云」と、蓋し渤海中に現はるる蜃氣樓をいふなり。

【二〇七】俄延。遷延に同じ。

【二〇八】北轍南轅。あべこべ、ゆきちがひのこと、今まではまるで見當違をして居たとの意。

【二〇九】弱水。仙川をいふ、山海經に云ふ、「西海之南、流沙之濱、有二大山一、曰二崑崙之邱一、其下有二弱水之淵一、環レ之」と。

〔末〕哎、娘娘よ。

(三三五)他那裏は、情深くして底無く、更に綿綿たり。諒著ふに這の蓬山の路、何ぞ遠しと爲さんや。

〔貼〕既に此の如くんば、儞自ら前み去咱。又聞く人間無窮の恨。(三三六)機絲を綰ぎて斷緣を補はんと待す。

〔仙女を引いて下る〕

〔末〕不免や天風を御著して、海外の仙山に到り、(三三七)找尋一遭し去らん。

〔風を御して行くを作す科〕

〔煞尾〕穩かに白雲を踏著んで輕く。巧に(三三八)罡風の便を趁取ふ。(三三九)椀大の滄溟をば跨り展き。(三四〇)齊州を回望れば何處にか顯はる。淡濛濛と、(三四一)九點の飛煙。

【三三〇】溟渤。滄溟渤海をいふ。

【三三一】麟鳳洲。海内十洲記の十洲の一に鳳麟洲あり、後に出づ。

【三三二】蓬閬。蓬萊閬風をいふ。

【三三三】蕙圃芝田。蕙蘭、靈芝、皆仙草なり。

【三三四】琪樹、瑤草。共に仙草なり。

【三三五】仙那裏。明皇をいふ、明皇の情は深くして底なし、蓬山の路遠しと雖も何かあらんとの意。

【三三六】機絲を綰ぐ。織女の機絲を以て斷緣をつなぎ、再び明皇貴妃をして夫婦たらしめんとの意、後齣の補恨に應ず。

【三三七】找尋一遭去也。一番尋れにゆかうといふ意。

【三三八】罡風。天罡は北斗をいふ、空氣の上に、物を損する風あり、之を罡風といふ、天罡星より發する所なりといふ。

【三三九】椀大の滄溟。天上の高處より見れば、大海は椀大に過ぎざるをいふ。

【三四〇】齊州。齊國をいふ、今の山東省、東方に在り渤海に瀕するを以ていふなり。

【三四一】九點の飛煙。禹貢九州を指していふ。

說話の間に、早くも來つて海東の邊。萬仞の峯巔に到る。這的是れ(三三一)三島十洲の別洞天なり。俺は只だ索に(三三二)清虛閬苑を繞りて。玲瓏たる宮殿に到るべし。是れ必ず(三三三)工夫を破りて、那の(三三四)玉天仙を找著ねん。與に魂魄を招いて、(三三五)蒼蒼に上る。(黃滔)誰か識らん蓬山、不死の鄉。(趙嘏)此は人寰を去ること、(三三六)知る遠近ぞ。(秦系)(三三七)五雲遙に指す、海の中央。(韋莊)

意。

【三三八】五雲。五色の雲をいふ、遙に五色の雲のたなびける海の中央を指したといふ意。

第四十七齣 (一)補恨

〔貼、織女に扮して上る〕

〔正宮引子〕〔燕歸梁〕 憐取む、(二)君王の情意の切なるを。(三)魂を遍く覓めて、(四)周折を費さんとは。好し(五)蓬島の那の人と說はん。(六)雲珮を邀へて、(七)星闕に赴かしむ。

(八)前夕渡河の時、牛郎は楊玉環と李三郎との、長生殿中の誓を說起して、我に彼が與に重ねて前緣を續がんことを要めたり。今適ま天門の外に在りて、人間の道士、楊通幽に遇見しに、說らく、上皇は貴妃を思念ひて、(九)一意衰へず、他をして遍く幽魂を覓めしむと。此情實に憫む可しと爲す。已に通幽を指引きて、蓬山に到り去らしめたり。又侍兒をして太眞を召取して此に到り、他に說與して知らしめ、再び細かに其(一〇)衷曲を探らんとするに、敢待來らん。

〔仙女、旦を引いて上る〕

【一】補恨。願をかなへる場。
【二】君王。明皇をいふ。
【三】魂。貴妃の魂をいふ、前齣に詳なり。
【四】周折。周旋の意。
【五】蓬島の那の人。蓬萊仙子卽ち貴妃をいふ、貴妃と前以て話して覺きたいから、迎へ來らしむとの意。
【六】雲珮。仙珮、貴妃をいふ。
【七】星闕。天孫の宮をいふ。
【八】前夕渡河。第四十四齣、慫合に詳なり。
【九】一意。專心一意の意。
【一〇】衷曲。中情の委曲。

〔錦堂春〕 聞道ならく(一一)璇宮命有りと。雲中忙しく、(一二)香車に駕し。强ひて(一三)愁緒を驅つて、天上に來る。怕らくは眉黛の恨遮り難きを。

〔仙女、報じ、旦、進み見ゆる介〕

娘娘の在上、楊玉環叩見。

〔貼〕 太眞、免禮、請坐了。

〔旦、坐する介〕

適ま娘娘の呼喚を蒙るに、知らず何の法旨か有る。

〔貼〕 一向曾て爾に問はざりしが、生前唐の天子と、兩人の恩情をば、細說一遍て、我に知道らしむ可し。

〔旦〕 娘娘、聽啓。

〔正宮過曲〕〔普天樂〕 歎ず、生前の(一四)寃と業とを。

〔悲む介〕

纔に提起せば、聲先づ咽ぶ。單只一點の情根の爲めに。那の(一五)歡苗愛葉を種出す。他憐み我慕ひて、兩下とも分別無く。世世生生、拋撇つること休からんと誓ひしに。隄防はざりき、慘悽悽、(一六)月墜ち花折れ。悄冥冥、(一七)雲收まり雨歇み。恨茫

【一一】璇宮。璇璣宮に同じ、天孫の居る所なり、天孫の御用と承はり、いそいで參つたれど、眉間の恨がかくされまいと恐縮する意。
【一二】香車。七香の車、婦人の車をいふ。
【一三】愁緒、眉黛の恨。明皇を思ふ戀情をいふ。
【一四】寃と業と。宿命をいふ。
【一五】歡苗愛葉。歡樂の生活をいふ。
【一六】月墜ち花折れ。中道短折をいふ。
【一七】雲收まり雨歇み。夫婦のこと終るをいふ。

茫、只落得、(二八)死斷生絶せり。

〔雁過聲〕〔換頭〕〔貼〕 舊情の(二九)那些を聽說けば。(三〇)荷絲の劈開けて未だ絶えざるに似て。生前死後休歇むこと無し。萬重にも深く、萬重にも結ぶ。儞と他と兩邊も、既に恁く(三一)疼熱く。況んや盟言も、曾て共に設けつるに。怎生ぞ他は陡地に心鐵の如く。馬嵬坡にて、便ち忍んで伊に負きしや。

〔旦、涙する介〕

〔傾盃序〕〔換頭〕 傷嗟。豈是れ他が頓に(三二)薄劣なるならんや。想ふに那の日(三三)磨劫に遭ひ。兵刃縱横、社稷阽危し。難を蒙れる君王は、怎んぞ臣妾を護らんや。(三四)妾は甘んじて死に就き、死して怨み無し。君と(三五)何ぞ涉らん。

〔哭する介〕

怎んぞ(三六)定情の釵盒の、那の(三七)根節を忘れ得んや。

〔釵盒を出して、貼の與に看せしむる介〕

這の金釵鈿盒は、就是ち君王が定情の日に賜ひし所にて、妾難を被りし時にも、身邊に帶在け、携へて蓬萊に入り、朝夕佩玩せり。再び前緣を

【二八】死斷生絶。死生斷絶に同じ、生死によりて夫婦分れしこと。
【二九】那些。さ、こしばかり聞いた所でもの意。
【三〇】荷絲。藕絲に同じ、即ち藕斷絲連の意、外形は斷絶するも、中心は連續するをいふ、孟郊の詩に、「妾心藕中絲、雖レ斷猶連牽」の句あり。
【三一】疼熱。疼愛の意。
【三二】薄劣。薄情の意。
【三三】磨劫。災阨をいふ。
【三四】妾は甘んじて死に就く。第二十五齣、埋玉に詳なり。
【三五】何ぞ涉らん。何等君とは關係なき意。
【三六】定情の釵盒。第二齣に詳なり。
【三七】根節。根苗に同じ、仔細、緣由の意。

續がんと思量へども、只だ知らず、能彀す可きやを。

〔玉芙蓉〕〔貼〕 儞は初心の誓(三八)賒てず。(三九)舊物懷うて撇て難し。太眞、我想ふに、儞が馬嵬の一事は、是れ千秋の慘痛にして。此の恨は(三〇)獨り絶す。誰か道はん、儞は(三一)殞骨を將て微憾を留めず。只だ(三二)斷頭香の再び爇かんことを思ひて。蓬萊の闕も、愁城の萬疊と化せんとは。

〔旦に釵盒を還す介〕

只是れ儞は如今已に(三三)仙班を證し、(三四)情緣宜しく斷つべし。若し一念牽纏れなば。怕らくは端無く又此より(三五)塵劫に墮ちしめんことを。

〔旦〕 念ふに玉環呵、

〔小桃紅〕 位は縱ひ神仙の列に在りとも。夢は唐の宮闕を離れず。(三六)千廻萬轉するも情は滅し難し。

〔起つ介〕

娘娘の在上、倘し情緣の再び續ぐを得ば、(三七)仙班を謫下せられんこと

【三八】賒。物を買ひて、あとで價を拂ふこと、借り賈ひをいふ、轉じてすつぽかす意に用ふ。
【三九】舊物。釵盒をいふ、初心に對す。
【三〇】獨り絶す。かけはなるること、別段の意。
【三一】殞骨。骨をおとすこと、死をいふ、死しても遺恨とせざるをいふ。
【三二】斷頭香。もえさしの線香、夫婦の斷絶に喩ふ、ひたすら夫婦の舊緣を復さんことを願ひて、蓬萊の仙境も、却て愁の種とならうとは少しも思はなかつたといふ意。
【三三】仙班を證し。仙人となりはてしこと。
【三四】情緣。人間の夫婦の緣をいふ。
【三五】塵劫。浮世に貶謫せしむ

を情願ふ。

(三八)雙飛若し(三九)鴛鴦の牒に註し。(四〇)三生の舊好緣の重ねて結ばるるならば。

〔跪く介〕

又何ぞ人間にて再び(四一)罰折を受くるを惜まんや。

〔貼、扶くる介〕

太眞、坐了。(四二)我久しく儞の爲めに重ねて前緣を續がんことを思へども、只だ馬嵬の事に因りて、唐帝の情薄く盟ひに負きしを恨み、作合を爲し難し。方纔道士楊通幽を見しに、說へらく、儞が遭難の後、唐帝は痛念して衰へず、特に通幽をして、天に昇り地に入り、各處に芳魂を尋覓めしむと。我れ他が此の如く(四三)情を鍾むるを念ひ、已に通幽を指引きて、蓬萊山に到らしめたり。還ほ儞の遺憾無からざるを怕れて、故此に召して問へるなり。今兩下の眞情の、合是に一對なるを知り、我當に天庭に上奏し、儞兩人をして世〻(四四)忉利天中に居て、永遠に雙を成し、以て從前の離別の恨を補はしむべし。

【三六】千廻萬轉。輪廻の意、幾度轉生しても、この情は變らざるをいふ。

【三七】仙班を謫下す。再び明皇と夫婦になれさへすれば、人間に貶謫せらるるも、固より本望なりとの意。

【三八】雙飛。比翼に同じ、夫婦に喩ふ。

【三九】鴛鴦の牒。婚姻簿をいふ。天仙の所に在り、若しも天仙が婚姻簿に記入して、再び夫婦となり得るならばとの意。

【四〇】三生。三世に同じ、前世、現世、後世をいふ、夫婦は三生の緣なりといふ。

【四一】罰折。折罰に同じ、ばちあたりの意。

【四二】我久しく云云。天孫は女なれば、飽くまで貴妃に同情して明皇の薄倖を恨めるなり。

〔擺拍〕那壁廂にては、(四五)人間痛絕し。這壁廂にては、(四六)仙家念熱す。兩下の癡情恁く(四七)奢り。癡情恁く奢る。我は彼此の精誠をば、天闕に上請げ。恨を補ひ愁を塡めて、萬古(四八)缺くる無からしめん。

〔旦、背いて淚する介〕

還た只だ怕らくは(四九)孽障週遮し。緣尙(五〇)蹇み、會猶賒ならんことを。

〔轉りて貼に向ふ介〕

多く娘娘の憐念を蒙る。只だ上皇と一たび見んことを求めば、願に於て足れり。

〔貼〕也罷、中秋の夕、月中にて儞の新譜霓裳を奏すと聞得けば、必然儞を邀へん。恰も好し此の夕は、正に是れ唐帝(五一)飛昇の候なれば、儞回り去るべし。通幽をして期に屆り、徑ちに上皇を引いて月宮に到りて、一見せしめば何如。

〔旦〕只だ恐らくは月宮の內は、(五二)私會に便ならじ。

〔貼〕(五三)妨げず。待ば、我れ先づ姮娥の與に說明しおかん。儞等相見るの時、我就ち(五四)玉旨を奏請して到來り、儞の情緣をして永く證せしむる

【四五】情を鍾む。熱心なること。

【四四】忉利天。佛經にて、三十三天をいふ、六欲天の第二なり、或は兜率天に作る、帝釋此に居る、須彌山の頂、闍浮提の上八萬由旬の處に在り、四方に峯ありて、廣きこと五百由旬、之を喜見城といふ。

【四五】人間痛絕。明皇をいふ。

【四六】仙家念熱。貴妃をいふ。

【四七】奢。大の意。

【四八】缺くる無し。夫婦圓滿の意。

【四九】孽障週遮。邪魔の入ること。

【五〇】蹇。行き難むこと。

【五一】飛昇。昇天のこと、崩御をいふ。

【五二】私會。夫婦の密會をいふ。

【五三】妨げず。差支なしの意。

【五四】玉旨。玉帝の勅旨。

こと便了。

〔旦〕多謝娘娘、就此告辭。

〔貼〕〔尾聲〕(五五)團圓は中秋の節を等待つて。管ず儞をして情償ひ意愜はしめん。

〔旦〕只だ我が這の(五六)萬種の傷心は。他を見る時怎地に說べん。

〔旦〕身前身後、事茫茫たり。(天竺牧童)
却つて厭ふ仙家の、日月の長きを。(曹唐)

〔貼〕今日君が與に、萬恨を除く。(薛蓬)
月宮の(五七)瓊樹、是れ仙鄉。(薛能)

【五五】團圓。夫婦團圓の意、中秋明月の團圓にかかりて妙なり。

【五六】萬種の傷心云云。兒女の情寫し出して妙なり、西廂雜劇第五本第四折に、崔鶯鶯が再び張生を見し時の喜悅の狀を叙したると併せ見るべし。

【沈醉東風】不レ見時准二備著千言萬語一、得二相逢一都變做二短歎長吁一、他急攘攘卻纔來、我羞答答乍生覷、將二腹中愁一恰待二伸訴一、及レ至二相逢一一句也無、則道箇先生萬福。

【五七】瓊樹。玉樹に同じ。

第四十八齣　寄情

〔末、道士の元神に扮して上る〕

〔南呂過曲〕〔懶畫眉〕(一)海外に曾て聞く、仙山有り。山は(二)虛無縹緲の間に在りと。
貧道楊通幽、適ま織女娘娘を見しに、說く楊妃は蓬萊山上に在りと。
卽便ち海上の諸山を飛び過ぎて、一逕此に到る。
見れば參差たる宮殿、彩雲寒し。
前面の洞門は深く閉したれば、不免や上前つて看來らん。

〔看ろ介〕

〔念ずる介〕試に銀榜をば、端詳に覷ふ。
玉妃太眞の院。呀、是れ這裏なり。

(三)〔簪を抽いて門を叩くを做す介〕不免や、瓊簪を抽取いて輕く(四)關を叩かん。

【一】海外に云云。長恨歌の「忽聞海上有二仙山一、山在二虛無縹緲間一」より來る。

【二】虛無縹緲。卽ち蜃氣樓をいふ。

【三】簪。かむりどめのピン。

【四】關を叩かん。長恨歌の「金闕西廂叩二玉扃一」の意なり。

〔貼、仙女に扮して上る〕

〔前腔〕雲海は沈沈として、洞天は寒く。深く雲房を鎖して、(五)鶴逕は閒なり。

〔末、又叩く介〕

〔貼〕誰か花下に來つて、(六)銅環を叩く。

〔門を開く介〕

是れ那箇ぞ。

〔末、見る介〕

貧道楊通幽稽首いたす。

〔貼〕此に到るは何事ぞ。

〔末〕大唐の太上皇帝、特に貧道を遣はして、(七)玉妃を問候しめらる。

〔貼〕娘娘は(八)璇璣宮に到去りたまへば、請ふ仙師少らく待たれよ。

〔末〕原來如此。

我且らく從容として、瑤階の上に貯立まん。

〔貼〕遠遠く望見めば、娘娘來れり。

〔末〕遙かに仙風の珮環を吹くを聽く。

【五】鶴逕は閒なり。往來のなきこと。
【六】銅環。門扉の上の環をいふ。
【七】玉妃。太眞玉妃、貴妃をいふ。
【八】璇璣宮。天孫の宮なり。

〔旦、仙女を引いて上る〕

〔前腔〕雲中より歸れば、步(九)珊珊。聞く、(一〇)青鸞の信、遠く頒つ有りと。

〔末を見る介〕

呀、果然仙客(一一)重關に候つ。

〔貼、迎ふる介〕

〔旦〕道士何くより來れる。

〔貼〕正に娘娘に稟知げんと要す。

他は是れ唐家の天子の、人間の使にて。命を銜んで迢遙此の山に來れり。

〔旦、進む介〕

既是に上皇の使者ならば、快く(一三)請じて相見ん。

〔仙女、末を請じ、進む介〕〔末、見る科〕

貧道楊通幽、稽首つかまつる。

〔旦〕仙師、請坐。

〔末、坐する介〕

〔旦〕請問、仙師は何くより來れる。

【九】珊珊。珮玉の聲をいふ。
【一〇】青鸞。使者に喩ふ。
【一一】重關。重門に同じ、中の門をいふ。
【一三】請。招請の意、呼び入れること。

〔末〕貧道は上皇の命を奉じ、特に來つて娘娘を問候まをす。

〔旦〕上皇は安否。

〔末〕上皇は朝夕に娘娘を思念ひ、因つて疾を成したまふ。

〔宜春令〕廻鑾の後より、日夜に思ひ。(一三)鎭昏朝、潸潸として淚滋し。(一四)春風秋雨、(一五)卽景傷心の事に非ざるは無く。(一六)芙蓉に映ずる(一七)人面は俱に非なり。楊柳に對して、(一八)新眉誰か試みん。特地に他が一點の舊情をば、咱を倩うて傳示せしむ。

〔旦、淚する介〕

〔前腔〕腸は千斷、淚は萬絲。君王に謝す、情を鍾むること玆の似きを。音容一別。仙山隔斷して、親侍に違ふ。(一九)蓬萊の院、(二〇)月悴れ花憔る。(二一)昭陽の殿、(二二)人非にして物は是なり。漫自に咱が一點の舊情をば、伊を倩うて(二三)回示せしむ。

〔末〕貧道命を領せり。只娘娘に求む、再た一物をば寄去せて信と爲さんことを。

〔旦〕也罷、當年寵を承けし時、上皇より金釵鈿盒を賜有はりしかば、

【一三】鎭昏朝。鎭日價に同じ、終日終夜の意。

【一四】春風秋雨。長恨歌に云ふ。

春風桃李花開日
秋雨梧桐葉落時

【一五】卽景傷心。景を觀て心を傷めしむる意。

【一六】芙蓉に映ずる云云。長恨歌に云ふ。

歸來池苑皆依レ舊
太液芙蓉未央柳
芙蓉如レ面柳如レ眉
對レ此如何淚不レ垂

【一七】人面は俱に非。舊人に非る意。

【一八】新眉誰か試みん。新粧をなすものもなき意。

【一九】蓬萊の院。仙宮をいふ。

【二〇】月悴れ花憔る。貴妃の憔悴をいふ。

【二一】昭陽の殿。唐の宮中をいふ。

如今就ち(二四)釵の一股を分ち、(二五)盒の一扇を劈き、仙師を煩はして、代つて上皇に奏せしめん。只だ兩意能く堅く、自ら前盟の負かざる可きを要す。

〔釵盒を分つを作し、淚する介〕

侍兒、這の釵盒をば、仙師に送與よ。

〔貼、釵盒を遞して、末に與ふる介〕

〔旦〕仙師請ぞ(二六)上へ、待、妾拜煩せん。

〔末〕不敢。

(二七)〔拜する介〕

〔三學士〕舊物を親しく傳ふるは、全く爾に仗る。深情略ぼ表して(二八)孜孜たり。半邊の鈿盒は孤另を傷み。一股の金釵は遠思を寄す。

幸に上皇に達せよ。

只だ願はくは此心堅きこと始の似くならば。終には還た相見る時あらん。

〔末〕貧道還た一說有り。釵盒は乃ち人間に有る所の物なれば、上皇に獻與するも、恐らくは未だ深く信ぜられじ。須らく當年の一事にして、他人の知らざる者を得て、

【二三】人非にして物是なり。物のみは舊にして、人は舊に非ざるをいふ。

【二四】回示。返事のこと。

【二五】釵の一股。一枝に同じ。

【二六】盒の一扇。半邊をいふ。長恨歌に云ふ、

惟將舊物表深情、
鈿盒金釵寄將去
釵留一股盒一扇
釵劈黃金盒分鈿
但教心似金鈿堅、
天上人間會相見

【二六】上へ。禮を受ける爲に、上席に就くこと。

【二七】拜する介。旦が拜するなり。

【二八】孜孜。つとめて倦まぬこと、熱心の意。

傳去へて(二九)驗を取るべし。纔に貧道が言ふ所の謬らざるを見たまはん。

〔旦〕這也說得有理なり。

〔旦、頭を低れて沈吟する介〕

(三〇)〔前腔〕別れに臨んで殷勤重ねて詞を寄す。詞中無限の情思。

哦、有了、記得へば、天寶十載。

七月七日長生殿。夜半人無く私語の時。

那の時、上皇妾と肩を並べて立ちたまひ、牛女の事に感ずるに因つて、

密かに相心に誓ふらく、願はくは世世生生、永く夫婦と爲らんと。

〔泣く介〕

誰か知道らん、比翼は分飛れて、連理は死し。綿綿たる恨盡止くることなし。

〔末〕此の一事有れば、貧道上皇に覆す可し。就此告辭つかまつらん。

〔旦〕且住、還ほ一言有り。今年八月十五日の夜、月中の大會に、霓裳を奏演す。恰も好し此の夕は、正是しく(三一)上皇飛昇の候なれば、我れ那裏に在りて專等一會べし。敢て仙師を煩はす、期に屆りて、上皇を指引きて彼に到らんことを。此の機會を失はば、便ち永く再見の期なからん。

【二九】驗を取る。證據にせんといふ意。

【三〇】【前腔】この曲は長恨歌の大結より來る、云ふ、

臨レ別殷勤重寄レ詞
詞中有レ誓兩心知
七月七日長生殿
夜半無レ人私語時
在レ天願作二比翼鳥一
在レ地願爲二連理枝一
天長地久有レ時盡
此恨綿綿無二絶期一

【三一】上皇飛昇。前齣に應じ、後齣に接す。

〔末〕貧道領命。

〔旦〕仙師(三二)說我。

〔貼〕情を含み睇を凝らして、君王に謝す。(白居易)

(三三)塵夢は何んぞ(三四)鶴夢の長きに如かんや。(曹唐)

〔末〕密に君王に奏して、月に入るを知らしむ。(王建)

衆仙同日、霓裳を詠せん。(李商隱)

【三二】說我。よろしく傳へて吳れといふ意、次の情を含み云云のことを、よく申して吳れとの意。

【三三】塵夢。人生の夢。

【三四】鶴夢。仙夢をいふ。

第四十九齣 (一)得信

〔生、病裝し、宮女扶けて上る〕

〔仙呂引子〕〔醉落魄〕 相思骨に透り、痾に沈むこと久しく。越消瘦を添ふ。(二)蘅蕪燒き盡すも、魂來るや否や。仙音を(三)望斷む。一片(四)晚雲の秋。黯黯として愁は釋き難く。綿綿として病は轉た成る。(五)哀蟬將た落葉。一種傷情を爲す。寡人妃子を夢想して、染成一病しかば、因つて方士楊通幽をして芳魂を攝召かしめしに、誰か料らんや、尋覓むるに從無く、通幽又我が爲めに(六)神を出して訪求し去れり。唉、知らず、是れ方士の妄言なるや。還知らず、果して能く尋著つるやを。寡人(七)展轉懷に縈はり、病體越〻重し。已に高力士を遣はして、壇に到りて打聽ねしめしに還は來るを見ず。這の一庭の秋景に對著して、好生人を懸望ならしむ。〔仙呂過曲〕〔二犯桂枝香〕〔桂枝香〕 (八)葉は紅藕に枯れ。條は青柳に疏なり。淅淅刺刺、滿處の西風。都て(九)愁人に送與りて消受けしむ。

〔一〕 得信。消息の場、明皇が道士より貴妃の消息を聽くこと。
〔二〕 蘅蕪。反魂香のこと、覓魂の齣に出づ。
〔三〕 望斷。のぞみつめること、待ちこがるる意なり。
〔四〕 晚雲の秋。秋の暮をいふ。
〔五〕 哀蟬、秋蟬をいふ。秋蟬の鳴き、木葉の落つる、皆傷心の種ならざるなきをいふ。
〔六〕 神を出す。鎭魂のこと、覓魂の齣に詳なり。
〔七〕 展轉。輾轉に同じ、ごろごろ寢返を打つこと。
〔八〕 葉は紅藕に枯れ。荷葉の

〔四時花〕 悠悠たり。眠らんと欲して眠られず、(一〇)枕頭を欹つ。(一一)非耶是耶、望眸を睜る。(一二)巫陽に問ふも、渾て(一三)未だ剖らず。〔皂羅袍〕 (一四)活ける時は救ひ難く。死せる時は怎んぞ求めん。(一五)他の生未だ就らざるに。此の生頓に休む。〔桂枝香〕 憐む可し、他が渺渺たる魂は覓むる無く。量ふに我が這の(一六)慨慨たる病は怎んぞ瘳えん。

〔丑、釵盒を持ちて上る〕

〔不是路〕 (一七)鶴は瀛洲に轉じ。信物を攜へ將ちて、遠く寄せ投ず。回奏に忙し。

〔生に見えて叩する介〕

仙壇より語を傳へて、離憂を慰めまつる。

〔生〕 高力士爾來れり。因由を問ふ。佳人果して(一八)佳音有りや否や、(一九)我が淹煎せるが爲めに、浪語を把て謅く莫れ。

〔丑〕 萬歲爺聽啓たまへ、那の仙師呵。

枯れしぼむこと。
〔九〕 愁人に送與りて消受けしむ。愁人に愁の種を進上する意。
〔一〇〕 枕頭を欹つ。頭を枕よりはなして聽くこと、眠り著けざる狀なり。
〔一一〕 非耶是耶。有邪無邪に同じ、來るか來らざるかと待ちわぶる狀をいふ。
〔一二〕 巫陽。みこのこと、楊通幽を指す。
〔一三〕 未だ剖らず。明白ならざる意。
〔一四〕 活ける時云云。貴妃がまだ活きて居る時にも、その命を救ふことが出來なかつたのに、(馬嵬の變をいふ)、死んでから、どうしてその魂を求め得るであらうかといふ意。
〔一五〕 他の生云云。貴妃は未だ生れかはらざるに、我がこの生命はもはや危しといふ意。

追尋ぬること久しく。黄泉碧落に遍ねけれども、俱に有ること無し。

〔生、驚き哭する介〕

呀、這等に説來ならば、妃子は永く再見の期無けん。兀的寡人を痛殺ましめずや。

〔丑〕萬歳爺。

請ふ(二〇)僝僽するを休めたまへ。

那の仙師呵。

〔前腔〕(二一)氣を御して遨遊し。織女に遇ひて、海上の洲に在ることを傳へ知れり。

〔生〕可曾見るを得しか。

〔丑〕蓬萊の岫に。太眞仙院の(二二)榜の高頭なるを見たり。

〔生〕原來妃子は、果然仙と成れるか。甚麼なる説話か有りつらん。

〔丑〕(二三)來由を説せば。情を含んで、只だ君恩の厚きを謝し。下(二四)塵寰を望んで、兩涙流る。

〔生〕果然這等の事有るか。

【一六】 慨慨たる病。うつらうつらの氣の病をいふ。

【一七】 鶴は瀛洲に轉ず。道士が轉じて仙島に到りしことをいふ。

【一八】 佳音。よき返事。

【一九】 我が淹煎云云。我が愁悶の爲に、いいかげんなうそをついてはいけないといふ意、淹煎は焦がるること。謂は、言を弄するをいふ。

【二〇】 僝僽。惡罵をいふ、わるくいふこと。

【二一】 氣を御す。元氣に乘ずること、長恨歌に「排レ空御レ氣奔如レ電」とあり。

【二二】 榜の高頭。高頭の榜をいふ。高札のこと。

【二三】 來由を説せば。仔細を言へばの意、前齣の末、説我の二字に應ず。

【二四】 塵寰。下界をいふ。

〔丑〕虚謬に非ず。當年の釵盒有り、親しく分ち授け。寄せ來つて呈奏せしむ。

〔釵盒を進むる介〕

這の鈿盒金釵は、就ち是れ娘娘が臨終の時、奴婢に付して殉葬せしめたる的。想はざりき、娘娘が携へて仙山に到り去らんとは。

〔生、釵盒を執つて、大に哭する介〕

我が那の妃子嗄。

〔長拍〕鈿盒は分開れ。鈿盒は分開れ。金釵は對を折る。都て玉人の別後に。單形隻影。(二五)兩載侶寡く。一般兒、離愁を做成すに似たり。還た憶ふ、伊に付して收めしめしは。(二六)曉妝の雲鬢。(二七)晚香の羅袖を助けしめしを。此の際輕く分ちて遠く寄與せ。無限の恨、箇の中に留まる。見了つて怎生んぞ手を釋かん。(二八)枉しく自ら想ふ、同心の再び合ひ。雙股の重ねて儔せんことを。

且住、這の釵盒は乃ち人間の物なれば、怎んぞ天上に到るを得んや。前日墓中に見えず、朕正に疑心ふに、今日如何ぞ、却つて他の手の内に在らんや。

【二五】 兩載。兩方の意なるべし、然らざれば、上元二年は、天寶十五年を距ること五年なり、是れ作者の不用意か。

【二六】 曉妝の雲鬢。金釵にかかる。

【二七】 晚香の羅袖。鈿盒にかかる、卽ち釵盒を與へしは、彼の化粧を助けんが爲なりしに、これを今分つて寄するとは、さても深き恨のあることなりとの意。

【二八】 枉しく自ら想ふ。想へど甲斐なき意、同心の再び合ひ、雙股の重ねて對をなして、舊の夫婦になり度と、想へど甲斐なきことをいふ。

〔丑〕萬歲爺、疑ふことを休めたまへ。那の仙師は早く已に(二九)慮り及び、娘娘に向つて、當年の一件の密事を問ひ得て、此に在り。

〔生〕是れ那の一事ぞ、儞ぢ說べ來る可し。

〔丑〕娘娘呵。

〔短拍〕天寶年間。天寶年間。長生殿裏。恨茫茫、(三〇)說ひ起して頭より す。七夕に牽牛に對し。正に夜半、肩に凭つて私に咒りしを。

〔生〕此の事果然之れ有り。

誰か料らんや、釵は分れ盒は剖れんとは。

〔泣く介〕

只だ今日呵。

翻へつて(三一)孤雁漢宮の秋と做らんとは。

〔丑〕萬歲爺、且らく愁煩するを省めたまへ。娘娘は還ほ話說有り。

〔生〕還ほ甚麼を說ひしぞ。

〔丑〕娘娘說へらく、今年中秋の夕、月宮にて霓裳を奏演し、娘娘も也た那裏に在れば、仙師をして萬歲爺を引著いて、月宮の裏に到りて相會せしめんと。

【二九】慮り及び。その事に氣付きて。

【三〇】說ひ起して頭より す。天寶中の長生殿のことを、始から詳しく述べたといふ意。

【三一】孤雁漢宮の秋。元の馬致遠の雜劇、王昭君のことをしくみしもの、本叢書中に收めらる、この意は漢の元帝が、王昭君に分れ、秋夜孤雁に夢を破られて、思やるせなきに同じく、明皇も貴妃を失ひて、孤獨の生活をわぶる意なり。

〔生、喜ぶ介〕

既に此の話有らば、儞何ぞ早く說はざる。如今は是れ幾時ぞ。

〔丑〕如今は七月も將に盡きんとし、中秋の期は、只だ半月有るのみ。

請ふ萬歲爺、龍體を(三二)將息ひたまへ。

〔生〕妃子既に重ねて逢ふことを許すならば、我が病體は(三三)一些も也た有る沒し。

〔尾聲〕廣寒宮に、(三四)相就くを容るす。十分の愁病、一時に休む。倒つて人間半月の秋を(三五)捱不過。

海外より書を傳へて、(三六)鶴の遲きを怪む。(盧綸)

詞中誓ひ有り、兩心知る。(白居易)

更に期す十五、團圓の夜。(徐夤)

縱ひ淸光有るも、(三七)誰に對するを知らんや。(戴叔倫)

【三二】將息。安息に同じ。

【三三】一些も有る沒し。病氣は少しもない、全く癒えたといふ意。

【三四】相就く。相會ふこと。

【三五】捱不過。待ちきれぬ意、半月も人間に生存して居ることが苦痛なるといふ。

【三六】鶴。使者に喩ふ。

【三七】誰に對するを知らんや。誰が爲なるかを知らざる意。

第五十齣　(一)重圓

〔淨、道士に扮して上る〕

〔雙調引子〕(二)〔謁金門〕情一片。幻し出す、人天の姻眷。但だ有情をして終に變せざらしめば。定ず能く夙願を償はん。

貧道楊通幽は、前に元神を出し、蓬萊に在つて、(三)玉妃の面囑を蒙り、中秋の夕、上皇を引いて、月宮に到りて相會せしめらる。上皇は原是れ(四)孔昇眞人にして、今夜は八月十五、數合に飛昇すべし。此時黃昏以後、儞看、碧天は水の如く、銀漢は塵無し。正に上皇を引いて前み去るに好し。道つて猶ほ未だ了らざるに、上皇は宮を出で來せり。

〔生、上る〕

〔仙呂入雙調〕〔忒忒令〕碧澄澄、雲は遠天に開き。光皎皎、月は(五)瑤殿に明かなり。

〔淨、見ゆる介〕

【一】重圓。夫婦再會の場。
【二】〔謁金門〕大意に云ふ、一片の情根があつて、人間天上の夫婦の緣を造りなすものなれば、若し有情の人をして、終に變心せざらしめば、必ず宿願を償つて、復夫婦となることが出來るであらうと、第一齣傳概の首に在る(滿江紅)曲の前段の意を結ぶ。
【三】玉妃の面囑。寄情の齣に應ず。
【四】孔昇眞人。仙人の名。
【五】瑤殿。月宮をいふ。

上皇貧道稽首。

〔生〕仙師(六)少禮、今夜呵。只だ儞が信を傳へて、蟾宮に相見るを約せしに因り。我を急得して、黃昏を盼んで、(七)眼兒穿たしむ。這の靑霄の際、全く(八)託賴む、(九)步を引いて展べんことを。

〔淨〕夜色已に深し、就ち請ふ同行せん。

〔行く介〕

〔淨〕明月何許に在りや。手を揮つて靑天に上る。

〔生〕知らず天上の宮闕。今夕は是れ(一〇)何の年ぞ。

〔淨〕我風に乘つて歸り去らんと欲すれば、只だ恐らくは(一一)瓊樓玉宇。高き處(一二)寒に勝へざらんことを。

〔合〕起ち舞へば、淸影を弄す。何ぞ人間に在るに似んや。

〔生〕仙師、天路迢遙なり。怎生飛び渡えんや。

〔淨〕上皇不必憂心、貧道が手中の拂子を將て、擲つて仙橋を作り、引いて月宮に到るを待たるること便了。

〔拂子を擲つて、橋と化して下る〕

【六】少禮。免禮に同じ。
【七】眼兒穿つ。待ち遠の意。
【八】託賴。たよること、御蔭での意。
【九】步を引いて展べん。導き步むこと、天上への案內を宜しく賴む意。
【一〇】何の年ぞ。如何なる運り合せで、我が昇天することであらうかとの意。
【一一】瓊樓玉宇。月宮をいふ。
【一二】寒に勝へず。月は太陰の精、月殿を廣寒といふ。

〔生〕 爾看、一道の仙橋、空より現出で、仙師は忽然として見えず。只得獨自り橋に上つて行かん。

〔嘉慶子〕 看よ彩虹一道、(一三)歩むに隨つて顯れ。直ちに銀河霄漢と連なり。香霧濛濛として辨せず。

〔內にて、樂を作す介〕

聽く何處にか、(一四)鈞天を奏す。想ふに(一五)桂叢の邊に近著けるならん。

〔虛と下る〕〔老旦、仙女の扇を執つて隨へるを引いて上る〕

〔沈醉東風〕 秋光を助けて、(一六)玉輪正に圓かに。霓裳を奏して、(一七)約して清讌を開く。

吾は乃ち月主嫦娥とは是なり。月中向に霓裳天樂の一部有りしが、昔唐皇の貴妃楊太眞が、夢中にて聞き得たるが爲めに、遂に(一八)譜して人間に出され、其の音反つて天上に勝れり。近ろ貴妃已に(一九)仙班を證せしかば、吾蓬山に向つて、(二〇)其の譜を覓め取り、補つて鈞天に入れ、今夕に於て奏演せんと擬せしに、想はざりき、(二一)天孫は彼が情の深きを憐み、爲めに重ねて良緣を續がんと欲し。我が月府を借りて、二人の與めに相會せしめんと要せんとは。太眞は已に道士楊通幽をして、唐皇を引いて今夜此に到らしむ。眞に千

【一三】 歩むに隨つて顯れ。同時に又歩むに隨つて滅す。

【一四】 鈞天。天上の樂、第十二齣、開樂に出づ。

【一五】 桂叢。月宮をいふ。

【一六】 玉輪正に圓に。中秋の滿月をいふ。

【一七】 約して。仙憶・補恨等の齣に出づ。

【一八】 譜して。第十二齣、製譜に詳なり。

【一九】 仙班を證す。仙籍に登りしこと。

【二〇】 其の譜を覓め。仙憶の齣に出づ。

【二一】 天孫云云。補恨の齣に出づ。

秋一段の佳話なり。只だ他が情兒久しく、意兒堅きが爲めに。天人の重見に(二二)合す。此上に因りて、天孫を感ぜしめ。他の爲に(二三)方便せしむ。

仙女毎、太眞の到る時を候著ひ、他をして(二四)桂陰下に在りて少く待たしめ、上皇の到來りて見過するを等つて、然る後に我が與に相會せしめよ。

〔仙女〕 領旨。

〔合〕 桂華正に妍しく、露華正に鮮かなり。好會を撮り成して。(二五)清虛洞天に在り。

〔老旦、下る〕〔場上に月宮を設け、仙女、宮門に立つて候つ介〕〔旦、仙女を引いて行き上る〕

〔尹介〕 玉山の仙院を離却れ。行いて彩蟾の月殿に到る。(二六)紫宸の人面を盼みて。(二七)三生の願償ふ。(二八)今夕の相逢は(二九)昔年に勝る。

〔到る介〕

〔仙女〕 玉妃、請進。

【二二】 合す。該當する意、情の堅い爲に、天上人間再び逢ふことに相當するをいふ。

【二三】 方便せしむ。便宜を謀り、夫婦の再會をなさしむる意。

【二四】 桂陰。月桂をいふ。

【二五】 清虛洞天。月宮をいふ。

【二六】 紫宸。紫宸殿、唐宮の名。紫宸の人面は明皇をいふ。

【二七】 三生の願償ふ。三生夫婦となる願が屆いた意。

【二八】 今夕の相逢。仙界の夫婦をいふ。

【二九】 昔年。人界の夫婦をいふ。

〔旦、進む介〕

月主娘娘は、那裏に在りや。

〔仙女〕 娘娘は分付けて、玉妃に請ひて、少く待たしめ、上皇の來り見過するを等つて、然る後相會せしめんとすれば、請少坐。

〔旦、坐する介〕〔仙女、月宮の傍に立つて候つ介〕〔生、行き上る〕

〔品令〕 行き行きて(三〇)橋を度り盡く。漫俄延、身は夢裏、飄飄として風を御して旋るが如し。(三一)清輝正に顯れ。入り來れば翻つて見えず。只だ見る樓臺の隱隱として。暗に(三二)天香を送つて、面を撲つを。

〔看る介〕

(三三)廣寒清虛の府。呀、這は是れ月府ならずや。

早く此地の(三四)佳期を約定せるに。怎んぞ(三五)蓬萊別院の仙を見ざるや。

〔仙女、迎ふる介〕

來れるは上皇に非ざる莫きか。

〔生〕 正是。

〔仙女〕 玉妃は此に到れること久し。請ふ進んで相見られよ。

【三〇】 橋。虹の橋をいふ。
【三一】 清輝。滿月をいふ、既に月中に到れば、月の光はまぶしくて、却て見えず、樓臺の影かすかに、何處とも知らず、桂の香がして來たといふ意、月に入るの狀、寫し出して妙なり。
【三二】 天香。桂香をいふ。
【三三】 廣寒清虛の府。月宮をいふ、天寶遺事に云ふ、「唐明皇遊二月宮一、見二天府一、榜曰二廣寒清虛府一、素蛾十餘人、皓衣乘二白鸞一、舞二于桂樹下一」と。
【三四】 佳期。重婚のよき日をいふ。
【三五】 蓬萊別院の仙。蓬萊の仙子、貴妃をいふ。

〔生〕 妃子は那裏に。

〔旦〕 上皇は那裏に。

〔生、旦を見て哭する介〕

我が那の妃子呵。

〔旦〕 我が那の上皇呵。

〔對し抱いて哭する介〕

〔豆葉黃〕〔生〕 乍ち相逢うて手を執れば。痛く咽んで言ひ難し。想ふ當日、(三六)玉の折れ香の擺けたるは。都て只だ時の衰へ(三七)力の軟きが爲なり。伊の寃慘を累はしたるは。盡く咱が罪愆なり。今日に到つて、滿心の慚愧。訴べ出さず、相思の萬萬千千。

〔旦〕 陛下、說那裏話來。

〔姐姐帶五馬〕〔好姐姐〕 是れ妾が孽深く(三八)命蹇む。(三九)魔障に遭ひ、君を累はして幾んど免れざらしむ。梨花(四〇)玉殞し。斷魂(四一)杜鵑に隨ふ。

〔五馬江兒水〕 只だ前盟の未だ了らざるが爲めに、苦に殘緣を憶ひ。惟だ舊盟をば(四二)癡抱すること堅し。荷なくも君王棄てたまはず。念切に思專らに。碧落黃泉。奴の爲めに尋ね遍し。

【三六】 玉の折れ香の擺く。馬嵬の慘事をいふ。
【三七】 力軟き。弱の意、軟は韻字なり。
【三八】 命蹇む。命の難きこと。
【三九】 魔障に遭ひ。災厄に逢ふこと。
【四〇】 玉殞。玉碎に同じ。
【四一】 杜鵑。明皇の蜀に幸するに喩ふ。
【四二】 癡抱。墨守すること。

〔生〕寡人駕を馬嵬に回へし、妃子をば改葬せしに、誰か知らん、玉骨全く無く、只だ香囊一箇を剩せるのみ。後來朝夕思想し、特に方士をして、遍く芳魂を覓めしめたり。

〔玉交枝〕纔に仙山に到りて尋ね見。卿卿の與めに、衷腸をば代つて傳ふ。

〔釵盒を出す介〕

釵は一股を分ち、盒は一扇。又(四三)乞巧の盟言を提起たり。

〔旦、釵盒を出す介〕

妾の釵盒も、也た帶ちて此に在り。

〔合〕同心の鈿盒、今再び聯なり。雙飛重ねて對す釵頭の燕。漫に回思らせば、(四四)黯然に勝へず。再び相看て(四五)涙の漣るるに禁へず。

〔旦〕幸に天孫の鑒憐を荷ひ、斷緣をして重ねて續がしむるを許さる。今夕の會は、誠に偶然に非ざるなり。

〔五供養〕(四六)仙家の美眷。比翼連枝。(四七)好合依然たり。天は(四八)離恨をば補ひ。海は怨愁をば塡む。

〔生合〕(四九)蒼蒼に謝す、憐む可し。(五〇)情腸を潑して、(五一)翻新に重ねて建つ。(一)箇の(五二)鴛鴦牒を添註す、紫霄の邊り。千秋萬古、奇緣を證す。

【四三】乞巧。七夕の祭をいふ。
【四四】黯然。悲傷の狀。
【四五】涙の漣る。感涙をいふ。
【四六】仙家の美眷。仙人の夫婦、明皇と貴妃とをいふ。
【四七】好合。夫婦の會合をいふ。
【四八】離恨を補ひ、怨愁を塡む。不平も、心配もなくなること。
【四九】蒼蒼。天をいふ。
【五〇】情腸を潑す。煩惱を起すこと。
【五一】翻新重建。再建の意、再び起ること。
【五二】鴛鴦牒。夫婦の名簿、天上で再び夫婦の名簿に書きたすこと。

〔仙女〕月主娘娘來れり。

〔老旦、上る〕

(五三)白榆歷歷たり月中の影。丹桂飄飄たり雲外の香。

〔生、見る介〕

月姐、拜揖。

〔老旦〕上皇、稽首。

〔旦、見る介〕

娘娘、稽首。

〔老旦〕玉妃、少禮、請坐了。

〔各坐する介〕

〔老旦〕上皇・玉妃、恭喜、仙果重ねて成り、情緣永く證す。往事は提ふを休めよ。

〔江兒水〕只だ怕らくは(五四)情種無くんば。何ぞ斷緣有るを愁へんや。

爾兩人呵。

別離生死をば同に(五五)磨鍊し。情關を打破して、(五六)眞面を開く。前因後果、緣に隨つて現はれ。會合

【五三】白榆、丹桂。共に月中に在る所なり、白榆は又星をいふ、古樂府に「天上何所レ有、歷歷種二白榆一」の句あり。
【五四】情種無くんば云云。結んだ緣なればこそ斷れる、原來情の種がなく、夫婦となることがなければ、何も夫婦の斷緣を心配することはないといふ意。
【五五】磨鍊。修行の意。
【五六】眞面。眞理をいふ、煩惱を打破して、眞理を覺りしこと。

尋常、猶ほ淺きを覺ゆ。偏に您相逢うて、這の(五七)團圓の宮殿に在り。

〔仙女〕 玉旨降れり。

〔貼、玉旨を捧げて上る〕

(五八)織り成す天上千絲の巧。綰び就す人間百世の緣。

〔生・旦、跪く介〕

〔貼〕 玉帝勅諭はく、唐皇李隆基・貴妃楊玉環、咨爾二人、本は(五九)元始孔昇眞人・蓬萊仙子に係る。偶ま小譴に因り、暫く人間に住せしに、今(六〇)謫限已に滿ちたれば、天孫の奏する所を准し、爾の情の深きに鑒み、命じて(六一)忉利天宮に居らしめて、永く夫婦と爲す。勅の如く奉行せよ。

〔生・旦、拜する介〕

願はくは上帝の聖壽無疆ならんことを。

〔起つ介〕〔貼、相見て坐する介〕

〔貼〕 上皇・太眞、爾兩下の心堅く、情緣雙び(六二)證る。如今已に天上の夫妻と成り、人の世に比せず。

【五七】 團圓の宮殿。月宮殿をいふ、尋常の會合では、意味が少いから、特に月中にて夫婦團圓ならしむる意。

【五八】 織り成す云云。天孫のことをいふ。

【五九】 元始孔昇眞人。元始は道家の始祖を云ふ。

【六〇】 謫限。貶謫の期限をいふ。

【六一】 忉利天宮。三十三天をいふ、第四十七齣、補恨に出づ。

【六二】 證す。證果の意。

(六三)〔三月海棠〕 忉利天。看よ紅塵碧海の、須臾に變ずるを。永く雙を成し對を作して。總て(六四)牽纏游衍すること沒く。(六五)月を抹し、風を批し、隨つて過遣し。(六六)癡雲膩雨、留戀すること無かれ。釵と盒との舊情緣を(六七)收拾めて。生生世世前願を消せよ。

〔老旦〕 羣眞既に集り、桂宴宜しく張るべし。聊か一觴を奉じて、上皇・玉妃の爲に、賀を稱べん。看酒過來。

〔仙女、酒を捧げて上る〕

酒到。

〔老旦、酒を送る介〕

〔川撥棹〕 (六八)清虛殿に。羣眞集まり、綺筵を列ぬ。(六九)桂花の中、(七〇)一對の神仙。桂花の中、一對の神仙。風流を占む、千秋萬年。

〔合〕 良宵に會して人並び圓かに。良宵を照して(七一)月も也た圓し。

〔貼、旦に向ふ介〕

〔前腔〕〔換頭〕 羨む、爾が死すとも癡情を抱いて、猶太だ堅きを。

〔生に向ふ介〕

【六三】 〔三月海棠〕 大意に云ふ、天上より見れば、人世の變遷止むことなし、されば永く夫婦となりて、みだりかはしきことをなさず、風月を品題して、隨意に消遣し、雲雨の癡情に留戀することなく、金釵鈿盒、比翼連理の舊緣はやめて、生生世世夫婦とならんとの願も廢せよと、もはや神仙となつた以上には、人生の夫婦關係を解脫すべきをいふ意なり。

【六四】 牽纏游衍。つきまとひ遊び樂む意。

【六五】 月を抹し風を批し。風月を批評すること。

【六六】 癡雲膩雨。巫山の雲雨の故事をいふ。

【六七】 收拾。取りかたづける意。

【六八】 清虛殿。月宮をいふ。

笑ふ、儞が生きながら前盟を守りて、(七三)幾たびか變遷せるを。總て(七三)空花幻影の前に當る。總て空花幻影の前に當る。(七四)凡塵を掃つて、一齊に天に上る。

【合】良宵に會して、人並び圓かに。良宵を照して、月も也た圓し。

【前腔】【換頭】【生・旦】敬んで嫦娥に謝す、衷曲をば憐むを。敬んで天孫に謝す、長恨をば塡むるを。愁城苦海の(七五)無邊を歷。愁城苦海の無邊を歷。(七六)猛かに頭を回らして、(七七)癡情を笑つて捐つ。

【合】良宵に會して、人並び圓かに。良宵を照して、月も也た圓し。

(七八)【尾聲】死生仙鬼都て經遍く。直ちに天宮並蒂の蓮と作り。才に長生殿裏の盟言を證却す。

【貼】今夕の會は、原と玉妃の新に譜せる霓裳の爲めなり。天女每那里ぞ。

【衆天女、各〻樂器を執りて上る】

月夜歌ひ殘す(七九)鳴鳳の曲。天風吹き落す、(八〇)步虛の聲。天女每稽首まをす。

【六九】桂花。月をいふ。

【七〇】一對の神仙。孔昇眞人と蓬萊仙子。

【七一】月も也圓し。琵琶記、第二十八齣中秋賞月に「惟願取年年此夜人月雙淸」の句あり、亦この意なり。

【七二】幾變遷。變心せることをいふ。

【七三】空花幻影。何も彼も總べて、空しき花、幻の影の前に當るが如くなり、一切皆空の意。

【七四】凡塵。人界をいふ。

【七五】無邊。無限の意。

【七六】猛に頭を回らす。頓悟すること。

【七七】癡情を笑つて捐つ。夫婦の恩愛を脫却すること。

【七八】【尾聲】死生仙鬼のあらゆる境界を經て、天上にて目出度夫婦の願を遂げ、長生殿の盟を立證したといふ意、こ

【貼】霓裳羽衣の曲を把つて、歌舞一番せよ。

【衆、舞ふ介】

【高平調】【羽衣第三疊】【錦纏道】(八一)桂輪芳し。新聲を按じて、(八二)舞行を分排す。仙珮互に趨り蹌き。天風を趁うて、惟だ遙かに(八三)叮噹を送るを聞く。

【玉芙蓉】宛として龍の起つが如く、(八四)游千丈。翩として鸞の廻るが若く、(八五)色五章。(八六)霞裙蕩いて。瓊絲の袖の張るに對す。

【四塊玉】(八七)團團の翠雲を撒し。(八八)一溜の秋光を堆む。

【錦漁燈】裊亭亭、(八九)緱嶺笙邊の鶴氅を現じ。(九〇)瑤池筵畔の虹幢を會す。香馥馥、(九一)蕊殿の羣姝、玉芳を散ず。

【錦上花】(九二)獨立を呈して、鵠步昂り。(九三)低

の【尾聲】は本劇を結び、後の【尾聲】は作者の意を結ぶなり。

【七九】鳴鳳の曲。成婚の夕に奏する曲。

【八〇】步虛の聲。群仙奏樂の聲をいふ、許渾の句を用ふ。

【八一】桂輪。月をいふ。

【八二】舞行を分排す。舞列をならべること。

【八三】叮噹。珮玉の聲をいふ。

【八四】游千丈。色五章に對すれば、游は旗の旒をいふ、帶の飄ること、一本には千狀に作る、洛神賦に、「宛若ニ游龍ニ」とあり、之によれば游をあそぶと解すべし。

【八五】色五章。五色の彩を現ずるをいふ。

【八六】霞裙蕩く。以下舞容の形容なり。

【八七】團團の翠雲。仙女の頭鬟をいふ。

【八八】一溜の秋光。仙女の美しき眼をいふ。

【八九】緱嶺笙邊の鶴氅。王子喬の故事、第三十八齣、彈詞に詳なり。

【九〇】瑤池筵畔の虹幢。西王母の故事、虹幢は美しきはたをいふ。

【九一】蕊殿の羣姝玉芳を散ず。天女散花の故事、覓魂の齣に出づ、蕊殿は蕊珠殿、天宮をいふ、皆群仙の舞容をいふ。

【九二】獨立を呈す。一本脚にて起つこと、一本には、鸞獨立とあり、次句偸低度に對すれば、呈獨立の方可なるべし。

【九三】低度を偸む。低く身をかはすこと、偸とはそつと人目にとまらぬ樣にの意か。

【九四】相當る。合式の意、衣を整へ、扇を調へる樣が、よく式に合ふこと。

【九五】一字に一回翔す。歌にあ

度を偷んで、鳳の影藏れ。衣を斂め扇を調へて、恰も(九六)相ひ當る。

〔一撮棹〕(九七)一字に一回翔す。

〔普天樂〕(九八)洛妃の凌波の樣を伴ひ。(九九)巫娥の行雲の想を動かす。音と態と、宛轉悠揚たり。

〔舞霓裳〕(九八)珊珊(九九)歩み躡む高霞の唱。更に泠泠たる節奏(一〇〇)宮商に應ず。

〔千秋歳〕(一〇一)紅蕋に映じて、(一〇二)風を含んで放ち。銀漢を逐うて、流雲漾ふ。(一〇三)人間の賞するに似ず。(一〇四)蓮を鋪いて慢りに踏み。(一〇五)燕の輕く颺るに比せんと要す。

〔麻婆子〕(一〇六)歩虛、歩虛、瑤臺の上。飛瓊輿を引きて狂ひ。(一〇七)弄玉、弄玉、秦臺の上。簫を吹いて也た自ら忙し。凡情仙意(一〇八)兩ながら參詳。

はせて舞ふこと。

【九六】洛妃の凌波の樣。美人の歩行の輕逸なるをいふ、魏の曹植の洛神賦に「凌レ波微歩、羅襪生レ塵」とあり。

【九七】巫娥の行雲の想。宋玉の高唐賦の故事、前に出づ。

【九八】珊珊。緩歩の貌。

【九九】歩み躡む高霞の唱。歌唱に合はせて、足拍子を取ること。

【一〇〇】宮商。樂聲高低の調子をいふ。

【一〇一】紅蕋。月中の丹桂をいふ。

【一〇二】風を含んで放ち、流雲漾ふ。皆舞容の形容なり。

【一〇三】人間の賞するに似ず。天上の舞樂をいふ。

【一〇四】蓮を鋪いて慢りに踏み。潘妃の故事。南史齊廢帝東昏侯紀に、「鑿レ金爲二蓮華一、以帖レ地、令二潘妃行一其上一、曰此步步生二蓮華一也」と。

【一〇五】燕の輕く颺る。趙飛燕のことをいふ、飛燕外傳に云ふ、「長而纖便輕細、擧止翩然、人謂二之飛燕一」と。

【一〇六】歩虛。前に出づ。飛瓊。許飛瓊、西王母の侍女なり、漢武內傳に云ふ「酒觴數遍、王母乃命二諸侍女王子登一彈二八琅之璈一、又命二侍女董雙成一吹二雲和之笙一、石公子擊二昆庭之金一、許飛瓊鼓二震靈之簧一、婉凌華拊二五靈之石一、范成君擊二湘陰之磬一、段安香作二九天之鈞一、於レ是衆聲澈朗、靈音駭レ空」と。

【一〇七】弄玉。秦の穆公の女、簫を好み、後蕭史と婚す、蕭史臺上に在りて簫を吹くに、鳳凰降りしかば、二人鳳凰に跨りて去れり。

【一〇八】兩ながら參詳。人間の情と天仙の意と、兩樣が參合する意。

〔滾繡毬〕鈞天を把つて、腔を換へ。巧みに(一〇九)翻成し。(一一〇)弄兒を餘して盤旋未だ央きず。

〔紅繡鞋〕(一一一)銀蟾亮かに、(一一二)玉漏長し。千秋一曲、霓裳を舞ふ。

〔貼〕妙なる哉、此の曲。眞箇に千秋に擅絶するなり。就ち此の樂を借りて、孔昇眞人を送り、玉妃と同に忉利天宮に到り去らしめん。

〔老旦〕天女毎、樂を奏して引導せよ。

〔天女、樂を奏して生・旦を引く介〕

〔黃鐘過曲〕(一一三)〔永團圓〕神仙は本是より多情の種。蓬山遠く、情の通ずる有り。情恨は劫を歷て、生死すること無く。看る到底終に相共にするを。(一一四)塵緣は倥偬。忉利には天情の更に永き有り。比せず凡間の夢。悲歡和哄するに。(一一五)恩と愛と、總て空と成る。癡迷洞を跳り出ふ。

【一〇九】翻成。つくりかへる、元來天上の樂をば、人間に寫し傳ふること。

【一一〇】弄兒を餘す。樂の餘聲を弄すること、餘韻嫋嫋の中盤舞して猶了らざる意。

【一一一】銀蟾。月をいふ。

【一一二】玉漏長し。夜の永きこと。

【一一三】〔永團圓〕神仙（眞人と玉妃）といふとも、原來多情の種で、蓬萊の奧までも、情が通じて居る、その情根は永劫、滅ぶことなく、遂には一處となり、團圓に終はる、人間はせはしくて、天上の方が餘程ゆつくり出來る、悲喜交〻到る樣な、人生の夢とは同一の論でない、恩愛を去り、迷夢を破り、相思を斷ち、羈絆を脫し、笑つて雙鳳に跨り、逍遙天に到るといふ意。

【一一四】塵緣。世上の夫婦をいふ。

【一一五】恩と愛と總べて空と成る。天仙をいふ。

【一一六】金枷、玉鎖。人生の束縛をいふ。

【一一七】瀟灑。逍遙自適の意。

【一一八】〔尾聲〕天上の霓裳の舊譜を、新につくりかへて、知音の君子に聽かせ、よくその意の在る所を知らしめ、人情を萬古無窮に留めんとする意、卽ち開卷第一曲、滿江紅の前段、情の總論に應じて結ぶ。

【一一九】賓筵を拂ふ。舞袖が席上に觸れること。

【一二〇】上界の群仙。嫦娥等をいふ。

【一二一】謫仙。明皇貴妃をいふ。

【一二二】大羅天。天上をいふ、酉陽雜俎に云ふ、「三界外曰二四人天一、四人天外曰二三淸一、三淸之上曰二大羅天一、大羅之上、又

で。相思鞚を割斷す。(二六)金枷脱け。玉鎖鬆ぶ。笑つて雙飛鳳に騎つて。(二七)瀟灑天宮に到る。

(二八)〔尾聲〕舊霓裳、新に翻弄し。知音に唱與せて、心自ら懂り。情をして萬古無窮に留まらしめんと要す。

誰か醉舞して、(二九)賓筵を拂はしむる。(張說)

(三〇)上界の群仙、(三一)謫仙を待つ。(方干)

一曲の霓裳、聽けども盡きず。(吳融)

香風引いて到る、(三二)大羅天。(韋絢)

看る水殿を修めて、長生と號するを。(王建)

天路悠悠、(三三)上清に接す。(曹唐)

此より玉皇、須らく(三四)例を破るべし。(司空圖)

(三五)神仙分有り、情に關らず。(李商隱)

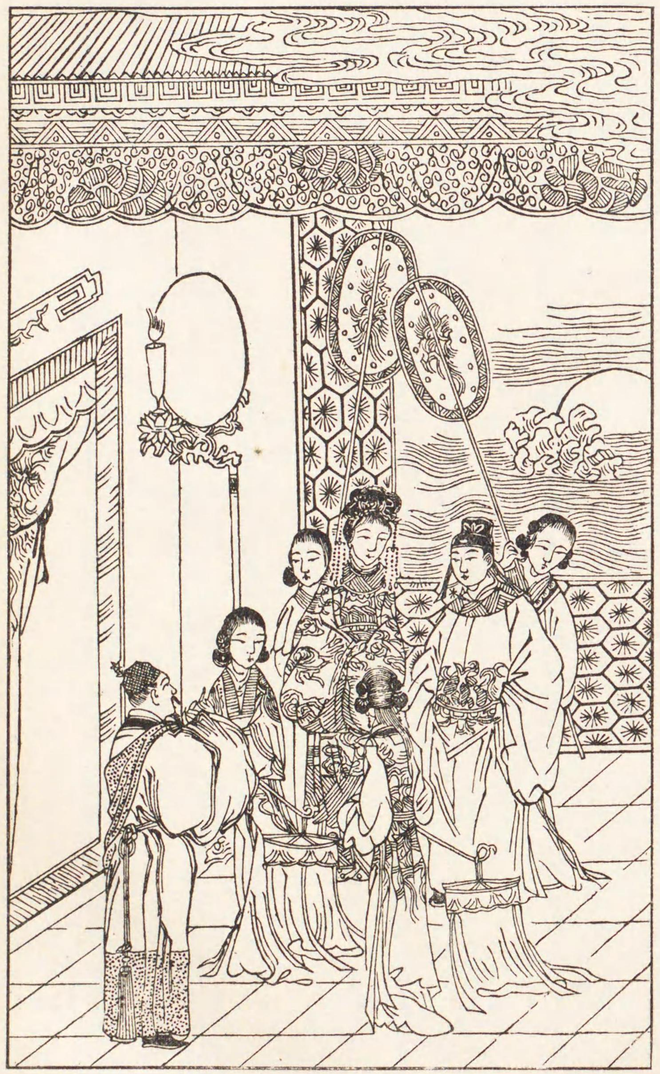
有二九天一」と、因みに李商隱の詩に「曾記大羅天上事、衆仙閒日詠二霓裳一」の句あり。

【三三】上清。天をいふ。

【三四】例を破る。天上にも夫婦あること。

【三五】神仙分有り情に關らず。神仙となるには、自ら福分あり、情の有無に關するのではない、この詩句は、神仙本是多情種といふ本意を翻倒して、癡人の迷夢を醒したるなり、寓意深しといふべし。

國譯長生殿終



凡例

一、本書の國譯は概ね既刊の國譯西廂記國譯還魂記等と同樣の方法に依れり、故にそれ等の凡例をも一應參照せられ度し。

一、本書は腳註の外に解說を加へず、從つて讀者難解の點無きにしもあらざるを恐る、初心の人は先づ國譯還魂記を通讀し、其の解說によりて戲曲解釋の要領を會得し、然る後徐に本書を覽らるるを可とす。

一、原文の文字は幾んど之を削除せずして訓譯を施したる爲、譯文甚だ我が文法に合はざるもの多し、願はくは諒せられよ。

一、第一齣を除き、各齣の末尾にある下場詩は皆唐人の詩句を寄せ集めて成れる集唐詩なり。

一、燕子箋は唐代の事件を描きたるものなれど、往往にして唐人の口より後代の典故を吐くが如き矛盾あり、是れ支那戲曲の常なり。

一、本書は懷遠堂批點燕子箋記に據りて覆刻したる雪韻堂批點燕子箋(夢鳳樓暖紅室刊校)を底本として國譯したるものなり。

一、燕子箋は世上に未だ註釋せるものを見ず、その全譯また本書を以て最初とすべし、杜撰の點は大方の是正を待つ。

目次

燕子箋解題……一——五
國譯燕子箋……一——二六二
第一齣　家門……一
第二齣　約試……三
第三齣　授畫……一〇
第四齣　借征……一七
第五齣　合圍……二四
第六齣　寫像……二七
第七齣　購倖……三六
第八齣　誤畫……四〇
第九齣　駭像……四七
第十齣　防胡……五三
第十一齣　寫箋……五六
第十二齣　拾箋……六四

第十三齣　入闈……七〇
第十四齣　開試……八一
第十五齣　試窘……八四
第十六齣　駝泄……九〇
第十七齣　謀緝……一〇二
第十八齣　閨痊……一〇八
第十九齣　僞緝……一一一
第二十齣　守潰……一二三
第二十一齣　扈奔……一二五
第二十二齣　拒挑……一二九
第二十三齣　兵囂……一三五
第二十四齣　收女……一三八
第二十五齣　誤認……一四七
第二十六齣　謁汧……一五三
第二十七齣　入幕……一五八
第二十八齣　閨憶……一六四
第二十九齣　刺奸……一六八
第三十齣　平胡……一七三
第三十一齣　勸合……一七九
第三十二齣　招婚……一八五

第三十三齣　放榜……一八八
第三十四齣　轟報……一九一
第三十五齣　箋合……一九七
第三十六齣　辨奸……二〇四
第三十七齣　遷官……二一三
第三十八齣　奸遁……二一八
第三十九齣　雙逅……二二七
第四十齣　排宴……二四〇
第四十一齣　合宴……二四三
第四十二齣　誥圓……二五〇

燕子箋原文……一——六七

燕子箋解題

清の李調元は、雨村曲話の中で、「阮大鋮は自ら百子山樵と號す、撰する所の燕子箋は名一時に重し、然れども其人の心術既に壞る、惟淫詞の憎む可きを覺ゆるのみ、所謂亡國の音なり」と痛罵して居るが、作者の如何を以て毛嫌せず、單にその文學的著作としての價値を言ふならば、燕子箋は明代を通じて、戲曲中で屈指の名篇と呼ばるるに辱ぢないものである、作者阮大鋮の著作には所謂石巢諸曲として雙金榜、牟尼盒、忠孝環、春燈謎、燕子箋等の戲曲が有るが、その中で、燕子箋と春燈謎(また十錯認といふ)は特に嘖嘖たるものである、此の兩篇は分量に於ても略同じくらゐで(春燈謎四十齣燕子箋四十二齣)その價値に於ても大した優劣は認められぬけれども、強ひて比較するならば、構想の奇は春燈謎が勝り、詞章の巧は燕子箋が優れて居ると言ふことが能きやう。

原作者阮大鋮は、懷寧(安徽省安慶)の人で、字は集之、圓海と號し、百子山樵の名を以て戲曲を撰して居る、明史では、姦臣の列傳中に、馬士英と共に載せられ、「大鋮機敏猾賊才藻有り」等と評せられて居る、萬曆四十四年會試に及第し、官途に就いて、太常少卿まで爲つたが、稀世の逆閹魏忠賢の黨類だといふかどで莊烈帝の卽位後に廢斥せられ、流賊が安慶に逼つた爲に、南京へ避居したのであつた、當時の生活は可成り豪奢なものであつたらしく、燕子箋も其の時に執筆されたことは本戲曲の第一齣西江月を覽れば分

曉る。

莊烈帝が北京で崩ぜられ、馬士英が福王を南京に立ててから、阮大鋮は再び任官して、遂には兵部尚書まで陞つた、此時は彼生涯の得意時代で、傳奇燕子箋は、吳綾に赤罫を施した贅澤な本に、東閣大學士王鐸が楷書で寫して內廷に進め、供奉の用にしたといふことである、時に崑曲全盛で民間でも爭つて此劇を演じ殆んど虛日無き狀況であつた、それから清兵が南京に逼り、福王が擒へられると、彼はしばらく逃亡したが、後に清に降參し、そして清兵が仙霞關を攻める時、その軍中に從ひ、遂に石上に野垂死をしたさうである。

想ふに彼はさしたる奸物では無かつたに違ひないが、見え坊でお世辭屋でそして頭腦の極めて善かつた人らしく考へられる、清の孔云亭は其の桃花扇の中で、さんざんに阮大鋮を貶しつけて居るが、兎に角同年の友に馬士英を有つて居たことは、一層彼をして不幸ならしめた原因であつたらしい。

燕子箋は何を材料として成つたものか、是に就いては、本譯の據つた暖紅室刊校の雪韻堂批點燕子箋の跋に面白いことが記されてある、それに依ると、祥符の顧家に、燕子箋と名づくる小本が有つて、それは六卷十八回に分たれた平話本であるが、それと傳奇燕子箋と對照すると、平話本には曲文は無いが、說白及び每回の詩句等は全く同一であるさうだ、(ただ寫箋の醉桃源の詞が少し違ふ) そして其平話本は、紙墨の工合から視て明初の刊行である、さすれば阮大鋮は此の平話本を基として傳奇を作つたものであると云

ふのだ。

平話とは、今日の我國の講談のやうなもので、多少節を附けて種種の物語をやるのだが、支那では古くから存在して居て、今日の說書的といふのが矢張りそれである、昔から平話は屢傳奇の材料とせられたのであるから、燕子箋が平話本を藍本としたからと云つて別に異とするに足らぬ、今左に平話燕子箋の目次を擧げると次の通りである。

第一回　恩師に別れ都に來り試に應ず。良朋に餽る水墨の觀音。
第二回　場期を候ち店裡に棲身す。叛逆を謀り途中打獵す。
第三回　舊知交・文士を款留す。重ねて相會し寫して春容を贈る。
第四回　臧書吏・場弊を陳說す。繆室婆醉ひて酒瘋を施す。
第五回　錯つて畫を取り來り容の似たるに驚く。詩箋を贈り去つて燕の傳ふるに任す。
第六回　霍秀夫曲江に字を拾ふ。賈南仲虎牢に營を安く。
第七回　機關洩漏す梅香の口。醜態飜成す皁隸の言。
第八回　坐號を換へ試に口氣を探る。醫病に因り綢かに情由を說く。
第九回　湊合せずんば吏舞を成し難し。奸謀を生ずれば友聽を嚇し易し。
第十回　霍秀才潛に旅邸を逃る。安祿山大に潼關を破る。

第十一回　鄭尙書閨を出でて駕に扈ふ。賈經略女を收めて交を全うす。
第十二回　夫人錯つて親生女を認む。秀士新に入幕の賓に選ばる。
第十三回　參軍檄を作りて賊膽を傷む。節度才を愛して聯姻を許す。
第十四回　美少年軍中に合巹す。老駝婆閣下に陳情す。
第十五回　鮮狀元師の第に私謁す。華養女父の前に弊掀す。
第十六回　假斯文鎖して書齋に試む。眞不通潛かに狗洞より逃る。
第十七回　久しく別離し同に聚會を欣ぶ。相逢ふことを得て各前由を訴ふ。
第十八回　一道の旨雙びて賞宴に排ぶ。兩妻兒均しく榮封を受く。

傳奇燕子箋は確かに之に本づいて作られたことを推察し得られる、所で、傳奇燕子箋の佳なる所以は、其曲文に在るので、曲文は盡く阮氏の筆に成つたのであるから、阮氏の非凡なる才能は之を蔽ふ譯にはゆかぬ、淸の梁廷相の曲話に「燕子箋一曲、兩美を鸞交し、雙姝を燕合し、景を設け情を生じ、具に巧思を徵す、春燈謎の十錯認また過を悔ゆるの意有りて隱然として緖墨の外に露はるるに似たり、然れども其人既に已に罪を名敎に得たれば、卽ち陽春白雪たらしむるも亦諸を彼哉の例に等ち、置いて論ぜざるを可とす矣、況んや其文章の未だ必ずしも能く人の心腑を醉はしめざるを耶」と述べて居るのを看ても、戲曲そのものは充分に讚美し度いが、人物が人物だから、思切つて奬められぬといふ底意が善く分曉る。

燕子箋各齣の中で、いづれの點が最も佳いか、或人は、元人の餘韻を存すといふやうなところから、それに叶ふやうな句を拔き出して推稱して居るが、余は、明末の戲曲に對して、元人の餘韻を云云するのは、支那人の崇古癖から來た見方で、あまり感心しない、余の見る所では、第十一齣第二十八齣第三十五齣第四十二齣などは比較的優れて居るやうに思はれるが何ういふものか。

大正壬戌秋九月

天樵生識

國譯燕子箋

宮原民平譯並註

第一齣　家門

「(一)西江月」「(二)副末」老いて(四)名韁の拘管を卸し、(五)閒に詞苑の平章に充る、春來り秋去り酒罇香り、爛醉す(六)莫愁湖上、燕尾雙叉し翦の如く、鶯歌全副(七)簧を偷む、曉風殘月に(八)新腔を按じ、舊に依つて是れ(九)張緒當年の情況。

「(一〇)漢宮春」(一一)扶風の才子、(一二)嫖姚の後裔、(一三)霍姓都梁、友と挈へ(一四)長安に取應す、試期尚遠きが爲、歡笑を追ひ、題(一五)平康を過ぎて、(一六)

【一】家門。いへがら。
【二】西江月。歌曲の名。
【三】副末。俳優の役名。
【四】名譽地位等の桎梏より逃るること、官を辭する意、名韁とは功名の羈絆をいふ。
【五】詞苑。文壇といふが如し。平章。品評、また官名にあり。詞文に親しむの意なり。閒は元來間の正字なれど俗用して閑と同一と爲す。
【六】莫愁湖。今の江蘇省南京に在り、原作者此地に住居したり。
【七】簧は樂器名。鶯聲簧音の如きをいふ。
【八】新腔。新らしき歌譜。新曲を作ること。
【九】張緒。南齊の人清雅寡欲を以て名あり、武帝曾て弱柳を靈和殿前に植ゑ張緒の當年に似たりといへり。
【一〇】漢宮春。歌曲の名。
【一一】扶風。今の陝西省に在り、長安に遠からず。
【一二】嫖姚。漢の驃騎將軍霍去病。
【一三】霍は姓にして名は都梁。
【一四】長安。唐の都。取應。受驗、進士たるの試驗を受くる

丹青の筆、鶯を聽き蝶を撲ち、小像(一七)雲娘を寫す。料らずも(一八)朱門に女有り、(一九)青樓と一樣に、(二〇)窈窕相當り、(二一)春容箋咏をば、燕子喇將る、同儕の被めに計構れられ、名姓を更へ、策を決して王に勤む、二美幷ぶ、(二二)麒麟高閣、(二三)馬を走らす狀元郎。

倣美なる詩箋を喇む的は是れ多情の燕子、
無端棒打を吃する的は是れ(二四)曲背の醫王、
(二五)兩路の功名を走る的は是れ單身の詞客、
一付の印板を同にする的は是れ二位の雲娘。

【一五】平康。長安の妓女街。
【一六】畫を爲がくこと。聽鶯撲蝶は畫中の景。
【一七】雲娘。妓女の名。
【一八】朱門。貴紳の邸宅。
【一九】青樓。妓館。
【二〇】同樣に美なるをいふ、貴紳の女と妓女と同じく美にして且相似たりとの意。
【二一】春容。女の畫參。箋咏。詞を題せる紙片、喇將。嘴にくはへて運び去ること。「をば」原文「把」字なり。
【二二】此の句高位に昇るをいふ、漢の宣帝功臣十一人を麒麟閣に圖したる故事あり。
【二三】走馬。進士に及第し長安の街を揚揚と騎馬すること、孟郊の詩に「春風得意馬蹄疾、一日看遍長安花」の句あり、狀元郎。進士の首位及第者。
【二四】曲背醫王。せむしの醫者。
【二五】兩路功名。文武の功名。

第二齣　(一)約試

「(二)滿庭芳」(三)生、儒服にて上る」　池柳英を含み、山花錦綻び、些兒に春(四)琴心に到る、裙腰芳草、一線色青青、十載(五)茂陵の燈火、時未だ遂げずして、空しく(六)凌雲を賦し、(七)芸窗の下、(八)寒香晴雪、箋釋す(九)送窮文。

「(一〇)集唐」　寂寞として(一一)相如茂陵に臥せども、青山の百鳥豈貧を知らむや、丈夫飄蕩して今此の如く、愁思春を看て(一二)春に當らず。小生姓は霍、名は都梁、表字は秀夫、扶風茂陵の人氏なり、原是れ(一三)嫖姚の後裔にして、近來(一四)西京に流寓す、(一五)藜を懸くる乙夜、長く(一六)天祿の書を飜き、(一七)櫝に韞むる丁年、未だ(一八)龍媒の駕を展かず、技

【一】共に受驗を相約す。
【二】滿庭芳。歌曲の名。以下歌曲名は之にならつて推知せよ。
【三】生。俳優の役名。上、登場。
【四】琴心。芳心といふが如し、漢の司馬相如琴を以て卓文君を挑みし故事あり。
【五】茂陵。今の陝西省にあり、霍都梁の鄉里、また司馬相如曾て此に居れり。十年茂陵にて苦學せる意。
【六】司馬相如大人之賦を奏す、飄飄として凌雲の氣あり。高志を抱くをいふ。
【七】芸窗。書齋。
【八】梅と雪。
【九】唐の韓愈かつて送窮文を作れり、此の句は霍生の困苦勉學に喩ふ。
【一〇】唐人の詩句を拾ひ集め別に一詩を作るか集唐といふ。
【一一】相如。漢の司馬相如。
【一二】春の加き氣分起らずの意。
【一三】嫖姚。漢の霍去病。
【一四】西京。唐の至德二載鳳翔を西京といへり、其の前後に於ては長安を西京ともいへり、茲にては鳳翔と解すべし、長安の西に在り。
【一五】懸藜。讀書するに「アカザ」を燃やして光を取ること、藜光は甚だ明かなり。乙夜。二更なり、午后十時頃。
【一六】漢の劉向天祿閣に書を校

は古む(一九)虎頭三絶、名は高し(二〇)駿骨千金、只是高堂早く背り、(二一)家室未だ偕ならず、幾時か月下に(二二)鸞に乘らむや、必定(二三)書中女有らむ、昔年試に應じ、曾て(二四)秦樓の妓女華行雲と、偶然邂逅し、有情むに未免れり、哎、只是春風の(二五)韋曲、浪に門戸烟花を尋ぬれど、秋水の(二六)樊川、終には是れ夢魂詩酒、(二七)儞看今日芳意人を撩して、心情遣り難けれど、又(二八)學博秦先生の被めに國士として相待はれ、我を留め(二九)衙齋に書を讀ましむるにより、(三〇)樂遊原上に到り、登眺一廻する能はず、且く小池の花樹の下に向て、略し(三一)歩一歩、以て煩悶を撥かば、多少に是れ好からむ。

〔黄鶯兒〕〔生〕(三二)芳意・寒林に動き、晴檐に鵲の喜ぶ聲を聽き、小池楚楚り倒に梅花の影を浸す、歎ず(三三)黑貂半ば零るるを、況むや(三四)紅鸞未だ盟はざるをや、才人は古より一例兒に皆命無かりき、(三五)鵬程に奮むを待ち、自ら(三六)綵毬の果に當る有りて、(三七)花を看る人に敲打著む。

〔(三八)副末書を持して上る介〕身は(三九)苜蓿寒齋の役に充り、手に桃花春信を送り來る。小人(四〇)齋夫此に在り、這封書は是れ(四一)相公の同窗の的、鮮于相公の捎來れる的なり、說道長安今歲(四二)黄榜賢を招く、他(鮮于)已に吉を擇び路に上り、(四三)前廂の客店に在りて、專ら相公を等ちて同に去かむと。〔書を送る、生書を接けて看る介〕

〔(四四)前腔〕(四五)燈火に停雲を賦し、(四六)雕盤を共にして五辛を薦めず、今春(四七)大比の期將に近づかむとするが爲、(四八)烟花の帝京、繁華の(四九)錦城に亞らず、(五〇)紫騮をば結束して先づ河橋に向て等ち、敢て恭しく迎へむ、(五一)雙魚一紙、(五二)草草宣情せず。

せることあり、此句故事を借つて勉學するに喩へたり。

【一七】櫝は一種の箱なり、韞櫝とは伎倆をかくして現はさざる意、此語もと論語に出づ。丁年。二十歳の男。

【一八】韓媒。駿馬、此句天下に認められざる意。

【一九】晉の顧愷之かつて虎頭將軍たり、此人の才絶藝絶癡絶を三絶といふ。

【二〇】死馬の骨を千金にて買ひ後に千里の馬を得たる故事あり、又燕の昭王黄金臺を築き千金を備へて天下の士を延けり。

【二一】未だ結婚せざる意。

【二二】蕭史簫を吹くを好む秦の穆公その女弄玉を以て妻とせるに後蕭史龍に乘り弄玉鳳に乘りて天に去りし傳說に出づ、妻を得ることに喩ふ。

【二三】詩經に「其人如玉」の句あり、宋の眞宗の觀學文に「書中有女顏如玉」の句あり。

【二四】秦樓。妓館の名。

【二五】韋曲。長安の近くに在る地名、名勝の地なり。春時韋曲に逸樂するも亦悲しとの意。

【二六】樊川。韋曲附近の水流。

【二七】儞看。ここにては感嘆の意。「なんとまあ。」

【二八】學博。官學の教授。

【二九】衙齋。官署内の教學所。

【三〇】樂遊原。長安の南に在り、地高く眺望に佳なり。

【三一】歩一歩。凡そ動詞の中間に「一」を挿入して繰返すは邦語の「うち」なる語を動詞の上に置き「うち見る」「うち笑ふ」等いふが如し。

【三二】芳意。春の氣分。

【三三】蘇秦の說秦王に用ゐられず黑貂の裘やぶれ黄金百金費し盡し秦を去りたる故事に出づ。

【三四】未だ妻無きこと。

【三五】奮鵬程。立身の途に進むこと。莊子に「鵬之徙於南冥也水擊三千里摶扶搖而上者九萬里」とあるに出づ。

【三六】宋の呂蒙正は劉氏の女の綵毬にあたりて其夫となれりとの傳說に因る。また晉の潘岳美容にして少時洛陽道に出づれば婦人果を投じ車に滿てりといふ。當は「代りと爲る」の意なり、即ち潘安に果を投じたるが如く余に綵毬を投ずる女あらんとの意。

【三七】看花人。進士及第の人、(第一齣參照)。著。動詞の助辭。

【三八】副末。俳優の役名。

【三九】苜蓿。まぐさの一種。苜蓿寒齋はいぶせき學塾の意。

【四〇】齋夫。學塾の小使。

【四一】相公。士人を敬ふ語、旦那樣。

【四二】黄榜。天子の詔書なり、賢は賢人、此の句意は天下の人才を集めて試驗すること。

【四三】廂は邊なり。前廂は前方の意。

【四四】前腔。前の歌曲と同一の調子。

【四五】夜更けて友を思ふこと。停雲は晉の陶潛停雲詩に由來す。

【四六】彫盤。彫刻せる盤。五辛五種の辛き菜、正月元日に用ゐる、此の句は別れて以來一年を過ぎたるをいふ。

【四七】大比。進士の試驗。

【四八】帝京。長安。烟花とは繁華なる意。

【四九】錦城。元來地名なれど茲にては美城の意。

【五〇】紫騮。赤栗毛の馬、上文にては單に馬なり。

【五一】雙魚。書信、古人書信の封緘に雙鯉の形を用ふ、古樂

既是鮮于相公已に行けり、我就ち收拾て早晩趕上、他と同に去くこそ便了。

〔副末〕 小人極めて相公の(五三)看顧を承く、但(五四)斗膽ながら一句奉勸せむと要すること有れども、(五五)說得に好からず。

〔生〕 但說へ不妨。

〔副末〕 我鮮于相公の做人を看るに、相公に比得ず。

〔貓兒墜〕 他天生の眼腦、至誠の人に不是、更に花柳場中に太に著情み、(五六)惺惺未だ必ずしも惺惺を惜しまじ、請ふ三省せよ、(五七)算不如伯勞飛燕、各前程に逆れ。

〔生〕 多く儞が好意を承く、只是我他と同窗にして日久し、暫時事を共にするも、也自ら碍無からむ。

府に客從遠方來遺我雙鯉魚の句あり。

【五二】 書信終結の句、此の曲一篇は書信中の文意を叙したるものなり。

【五三】 看顧。ひいきすること。

【五四】 斗膽。大膽なり。「失禮乍ら」

【五五】 云ひ出しにくい。

【五六】 惺惺。聰明人の意、古語に惺惺惜惺惺の語あり、英雄は英雄を知るといふが如き意なり。此句親友なれど必ずしも同情無しとの意。

【五七】 算。「思ふに……なるべし」の意。不如。しかず。算不如「いつそ……する方よろし」の意。伯勞。もずの鳥、燕と季節を交代する故共に居らざる意あり。

【五八】 同袍。寒苦を共にする人、詩經に豈曰無衣與子同袍

【五九】 此句は馬をならべて共に行くとの意なり。晉の士會秦に在りて將に晉に歸らんとするとき、秦の繞朝策を贈つて曰く、子秦に人無しといふ勿れ、吾が謀適〻用ゐられざる也といへる故事に出づ。

【六〇】 河津一名を龍門といふ、大魚之を登れば化して龍と爲るといふ。試驗に及第するに喩ふ。待は「に至りて」の意。

【六一】 鯉。たなご（鯉より下等の魚）

【六二】 秦は姓、爺は敬稱。

【六三】 好は惡又は不可の意に非ず「都合よく」の意なり。「當面」以下の二句は、明朝早く出發するに都合よからしめんため只今直接暇乞ひするとの意、好の字此の用法多し。

【六四】 有請。人を招く敬語。

【六五】 絳帳。紅色の幕、教室の

〔前腔〕 (五八)同袍事を共にせんとするに、何ぞ必ずしも太に疑惜はむや、幼より燈窗に苦辛を共にせり、況してや(五九)繞朝の鞭策暫時行くをや、(六〇)龍門に躍るを待たば、那時水淸みて(六一)鯉鯉、一雯に分明せむ。

儞我が輿めに(六二)秦爺を請じ出來れ、當面辭過して、明早(六三)好く行かむ。

〔副末〕 秦爺(六四)有請。

〔生查子〕〔小生上る〕 (六五)絳帳曉風輕く、梅蕊春信を傳ふ、鶯轉鳴琴を聽き、(六六)走馬新任に之かんと待す。

自家は扶風の學博秦若水是也、家(六七)邢州に住ひ、(六八)此の邑に薄宦たり、(六九)廣文冷かなりと雖、文史娛むに足れり、今日(七〇)汧陽縣尹に陞さるるを報ず、(七一)文憑に走馬任に上ることを限定せり、正に門生霍秀夫と一別して行かむと要せしが、知らず我を請じ出來は(七二)何の話說有るか。〔生(七三)揖す〕〔小生答ふる介〕

〔生〕 門生數年深く教誨を蒙りしが、今日同窗の書到れる有り、說はく試期已に迫る、約同せ一齊に取應せんと、特に老師を請じ出來て拜別す、明早

し前に生徒を教へ後に女樂を列したる故事に出づ。

【六六】 走馬。急速の意。

【六七】 邢州。地名、今の直隸省に在り。

【六八】 此の地に微職を奉ず。

【六九】 廣文。教官なり、杜甫の詩に廣文先生官獨冷の句あり、教官は貧乏なり。

【七〇】 汧陽。今の陝西省に在り。縣尹。官名。

【七一】 文憑。辭令。

【七二】 有何話說。正しくは話は名詞にして說は動詞なれば「何の話の說ぶべき有りや」と爲すべし、然れども話說を一名詞と見るも原意に差はず。

【七三】 揖は敬禮すること。

【七四】 「一たい然うでしたか」或は「なる程然うですか」の意。

【七五】 南宮。禮部衙門進士試驗を管掌するが故に禮部を南宮といふ、原は吏部を南宮とい

〔小生〕（七四）原來此の如し、可喜可喜、賢弟の高才絶學は、國士雙び無し、此（七五）南宮に去かば、（七六）定めて魁選を占めむ、老夫今日信を聞き汧陽に陞任す、目下也任に上るを打點せむと要す、些微の（七七）卷價有り、聊か餞行に代へむ、專ら（七八）看花を候ちて、再に薄賀を申べむ。〔齋夫に向ひ卷價を取り送る介〕

〔生接けて揖する介〕老師に（七九）生受了。

〔貓兒墜〕〔小生〕河橋の（八〇）新柳、贈別す短長亭、（八一）管めて聲名は長卿より重きを取らむ、（八二）鱣堂今や已に遷鶯を報ず、（八三）驪を唱ふ聲、此より（八四）魚龍溝水、相望みて（八五）盈盈たり。

〔尾聲〕〔生拜別する介〕（八六）書箱劍匣俱に齊整へ、早くも准備せり（八七）踏花の鞍韉。

〔小生〕

此乃是（八八）九萬扶搖の第一程。

ひしことあり。試驗を受くる意なり。

【七六】必ず第一番にて及第せんの意、魁選とは首選の意。

【七七】卷價。書を買ふ金子。

【七八】看花。進士に及第すること。

【七九】生受。感謝の語、了は動詞の助辭にして決定的の語或は過去を示す原文にて老師の下に在れども「老師」なる名詞に附したるものに非ず。

【八〇】漢人客を送りて灞橋に至り柳を折つて贈別せる故事に因る。

【八一】管。必ず請合ふの意。長卿。司馬相如字は長卿、文名高し。

【八二】鱣堂。教室をいふ、茲にては教官秦若水自ら指す、此語後漢楊震傳に由來す。遷鶯。官位の升るをいふ。詩經に出自幽谷遷於喬木の句あり。

【八三】驪は驪歌なり、送別の歌なり、驪駒在門云云の古歌に由來す。

【八四】汧陽に近く汧水流る、又魚龍川と名づく。

【八五】想望の情を形容す。

【八六】書劍は士人の携帶品なり。

【八七】春季の旅行を意味す。

【八八】本齣【三五】を參照。

玉壺の春酒正に攜ふるに堪へ、
野店山橋馬蹄を送る、
此後長安明月を望み、
隴頭の流水東西に咽ぶ。

第三齣　授畫

〔菊花新〕〔(一)外、冠服にて人を從へて上る〕　寅みて典禮を淸し(二)明良を佐け、兩袖平分す玉案の香、朝罷みて鵷行を輟め、花下に暫時遊賞ぶ。

〔集唐〕　(三)紫禁天に朝し拜舞同にす、玉樓金殿曉光の中、微臣(四)唐堯の壽を獻せむと欲し、遙に(五)南山を指して袞龍に對す。下官は麗安道便ち是なり、早に(六)翰苑に官たりしが、(七)容臺に陟せらるるを忝なうし、(八)鈴閣の謀謨を贊し、(九)秩宗の典禮を掌る。(一〇)只是白雪の絲鬢上に生じ、青山の家夢中に在り、(一一)膝麟兒に罕しく、執りて(一二)虎子に慚づ、幸喜に夫人鮑氏は、內を治むること幽貞、女兒飛雲は、性生慧淑にして、骨肉團聚り、聊か(一三)老懷を慰む、今日朝を退き回來、衙門に事無し、(一四)不免夫人(一五)孩兒と、署中の花下に、片時を消散せばや、(一六)院子よ夫人と小姐を請じ出來則箇。

〔(一七)院〕　夫人小姐有請。

〔前腔〕〔(一八)老旦〕　口脂面粉餘香を帶び、遙かに(一九)鳴珂を聽き建章を出づ。〔(二〇)

【一】外。俳優の役名。
【二】明良。君臣、尙書に元首明哉股肱良哉とあり。玉案。たまのつくゑ。鵷行。朝班、宮中の伺候なり。輟は休止の意。御前を退くこと。
【三】紫禁。皇宮、朝天。參內すること。拜舞。官僚互に挨拶すること。
【四】唐堯。古の明君堯なり、在位百年。
【五】南山。終南山なり、長壽に喩ふ、詩經に如南山之壽の句あり。袞龍。天子を指す。
【六】翰苑。翰林のこと、唐に於ては內廷供奉の官なり。
【七】容臺。禮部をいふ。

旦、梅香同に上る〕

花柳・春光を漏らし、(二一)綵勝又新樣を翻す。

〔外、老旦、揖拜する介〕

〔旦、拜する介〕　箋嫣(二二)萬福。

〔外〕　孩兒到來、夫人よ我年耳順を踰え、齒髮漸く衰へ、(二三)鱸蓴の興久しく酣に、(二四)雞肋の味俱に盡せり、(二五)力を陳ぶるは宜しく止足を知るべく、仕途は應に嶮巇を避くべし、但屢疏して(二六)身を乞へども、未だ聖允を蒙らざるは、之を如奈何や。

〔老旦〕　相公よ、如今國家正に多事に當る、況して儞年紀未だ甚だしく衰頹せざるをや、還須らく力を公家に殫すべし、豈私便を遂圖す可けむや。

〔外〕　夫人說得有理なり。

〔旦〕　(二七)孩兒此の春光の明媚なるを見、箋箋(二八)

【八】鈴閣。將帥の出仕所、元帥府の如きもの。
【九】秩宗。禮部の官、茲にては禮部の意。
【一〇】老いたるをいふ。
【一一】膝下に子息無きをいふ。
【一二】虎子。便器なり、漢朝に玉を以て虎子を爲り便器となし侍中をして之を執らしめ行幸に從はしめたりといふ。此句は年老いて尙官に在るを歎ずる意。
【一三】老懷。老人の心。
【一四】不免。「いでや……せん」の意。
【一五】孩兒。子なり、男女孰れにも用ゐる。
【一六】院子。下男或は執事、則箇。句の助辭、命令的の意あり。
【一七】院。院子の省略。
【一八】老旦。俳優の役名。
【一九】鳴珂。馬の飾とせる玉の鳴ること。建章。宮殿の名。
【二〇】旦。俳優の役名。梅香。侍女。
【二一】綵勝。又旛勝といふ、立春の日に朝廷より三省の官に賜ふ羅なり。此句春景を叙したるなり。
【二二】萬福。婦女の用ゐる挨拶の語。
【二三】此句鄕里に退隱を欲する意。晉の張翰かつて秋風の起るを見て吳中の菰菜蓴羹鱸魚膾を思ひし故事あり。
【二四】平凡なる官職に從事せる意。雞肋。有りて益なく捨つるに惜しきこと、魏の曹操の言に由來す。
【二五】其の職責を盡すと共に其の身の程を守り時を見て官を退かんとする意。論語中の句に由來す。
【二六】乞身。辭職を願ふ。
【二七】孩兒は元來「子」の意なれ

退食の餘閒、今日春酒一杯を辨下へて、母親と一同に(三九)壽を爲さむ。

〔外〕(三〇)如此らば爾に生受了。〔旦拜して酒を送ぐ介。〕

〔榴花泣〕〔外〕(三一)十年にして靑鬢、國を憂へ盡くく霜を成しぬ、(三二)鳩拙を慚ぢ、鵷行を玷し、蓴鱸の飛夢(三三)江鄉に到る、(三四)鏡湖に老を投せむとして、未だ歸航を遂ぐるを許されず、君恩敢て忘れむや、念ふに(三五)漁陽の鼙鼓聲悲壯、(三六)天堦の蓂葉輝を生ずるを慶し、(三七)醉春卿花裏に觴を傳ふ。

〔前腔〕〔老旦〕雪(三八)鵁鶄に晴れ、苑に歸り恩光を帶ぶ、朝に(三九)案に回り、(四〇)相に擧げらるるは當にすべし、(四一)庭桂に因りて淒涼を動かす休れ。〔旦を指す介〕

他書を知り禮に達す、(四二)爾女有り中郎に似たり。

ど父母に對して自ら孩兒といへり。

【三八】退食。朝廷を退出して食事休息すること。閒は閑の俗用。(第一齣參照)

【三九】爲壽。長壽を祝す。

【四〇】如此。左樣ならばの意。

【三一】下二句の意は、國を憂ふるが爲め十年にして黑髮白く變じたりとなり。

【三二】鳩拙。無能安穩なること。

【三三】江鄉。水多き地、揚子江下流地方。

【三四】鏡湖。今の浙江省に在り、王羲之かつて此邊に居たりき。投老。隱居すること。

【三五】漁陽。今の直隸省に在り、安祿山反したる地、鼙鼓戰陣用具。白居易の詩に漁陽鼙鼓動地來の句あり。

【三六】宮殿前の堦に生じたる蓂葉に輝あるは瑞兆なり、昔堯の時蓂莢階が夾んで生ぜりといふ。

【三七】春卿。禮部の堂官を春卿といふ、醉春卿は醉ひたる禮部の堂官なり、堂官とは尙書侍郎等をいふ。

【三八】鵁鶄。元來鳥名なれども、茲にては宮殿と解す、昔漢の武帝鵁鶄觀を築けり。

【三九】回案。參內して職を視ること。

【四〇】當然宰相に拜せらるる意。

【四一】子息の無きことの爲に憂悶する勿れ。

【四二】東漢の蔡邕中郎將たり彼は男兒無く女兒文姬あり才女なりき、此句は是に由來す。

【四三】椿萱。孰れも長壽の樹、父母に喩ふ。眉。眉壽なり、老いたること。南山は本齣(五)に解けり。詩經に十月穫稻、爲此春酒、以介眉壽の句

〔旦再拜する介〕親恩忘るるに忍びむや、年年花下に人恙無きを願ひ、(四四)椿萱の眉南山に介ぶるを祝ふ、又何ぞ必ずしも(四五)絲蘿を東牀に腹坦するものに結ばむや。

〔漁家燈〕〔衆跪き唱ふ〕(四六)袍袖に染る御府の天香、(四七)雕盤を捧ぐる玉女の瓊漿、聽只聽く鳥春聲を弄するを、不住的落花輕く漾ひ、春光に、(四八)合宅齊しく歡賞す、眞に神仙の(四九)蓬閬を羨まず、(四九)梆を傳へ入朝する時に待らば、又忙しからむ、請ふ百般の(五〇)勞攘を將息よ。

〔外〕儞們起來。

〔(五一)丑、門官紅氈の包を捧げて上る〕(五二)朱鷺鼓を敲く三下の響、紅猩氈に裹む一封の書。〔鼓を擊つ介を作す〕(五三)院公よ門官事を稟す、外面に(五四)天雄軍節度使同年の賈老爺の差人有り、書有り此

あり、介は通常「助く」と解すれど茲には「くらぶ」と爲せり。

【四四】結絲蘿。婚姻のこと、古詩に與君爲新婚、兎絲附女蘿の句あり。東牀腹坦。壻のこと、晉の郗鑒壻を求め王導の子弟中より王羲之を見出したる故事に由る。此句は、必ずしも壻を迎ふるを要せずとの意。

【四五】此句は鄜安道の官衣に宮中の餘香薰れるをいふ。

【四六】此句は飛雲が酒盤を捧ぐるをいふ、玉女は美女の意。

【四七】合宅。一家全部。

【四八】蓬閬。蓬萊閬苑、孰れも神仙の居所。

【四九】傳梆。官吏の出勤を催す拍子木を擊つこと。待「やがて……に至らば」の意。

【五〇】勞攘。煩雜の意。

【五一】丑。俳優の役名。門官。門番人。紅氈包。緋毛氈の包み。

【五二】朱鷺鼓。鷺形を飾りたる大鼓。三下。三度。

【五三】院公は院子に對する敬語、門官が直接に主人に物言はずして院子を通じて申上ぐるなり。

【五四】天雄軍は軍の名なり。節度使。地方の大官、所謂藩鎭なり。同年。同時に進士に及第したる者、老爺。敬語なり老者を問はず。差人。使者。

【五五】問候。御機嫌伺ひをすること、手紙を以て機嫌を問ふ意。

【五六】受取りて持參せよ。

【五七】轉盤。門扉に穿ちたる小窓なり。

【五八】書禮。信書と禮物。

【五九】「如同……一般」は「……と同じ」の意。

【六〇】个は箇に同じ、箇は名詞若くは名詞句の上にありて冠

に在り(五五)問候す。〔院稟す介〕

〔外〕我が與めに(五六)取り進來れ。

〔門官(五七)轉盤より遞す院接け門官下る介〕老爺に稟す、(五八)書禮此に在り。

〔外、書を接けて看る介〕夫人孩兒よ、此是我が同年の(人)、天雄節度使賈公、名を南仲と喚び、我と至厚にして胞兄弟の(五九)如同く一般(なる人)なり、是は他が(我に)差來て問候せる的なり、只是禮物太だ多し、(六〇)个の全收的道理沒し。

〔前腔〕〔外〕念ふ故人(六一)高牙遠方にして、一紙の書殷勤に寄將、多少の(六二)雙鯉加餐するに抵るに、又何ぞ必ずしも(六三)南金重貺せむや。

〔老旦〕這の來意甚だ遠し、(六四)他の一兩樣を受けむ、(六五)也纔使得。

〔外(六六)禮帖を看て躊躇する介〕(六七)也罷、他が(六八)吳道子の水墨觀音像を受了罷、取過來り看せよ。

〔院、畫を展く看る介〕

且く(六九)酌量ひ、菩提像を領納せむ、(七〇)水月を瞻れば、青蓮合掌す。

詞の如き用を爲す、而して此の句に於ては箇は省くとも文意に障り無けれど語調弱し。

【六一】高牙。高官の儀仗。遠地に官たること。

【六二】雙鯉。信書。加餐。食事を進むること、養生の意。餐字は又鯉字にかけたる字なり。

【六三】南金。荊揚地方の金、貴重の寶なり、詩經に大賂南金の句あり。重貺。大なる贈り物する意。

【六四】他は禮物を指す。一兩樣。一二種。

【六五】也纔。「まあそれでこそ……」の意。使得。可の意。

【六六】禮帖。贈品の目錄。

【六七】也罷。「では斯うしやう」の意。

【六八】吳道子。唐の畫家の名。

【六九】酌量。見はからふ。菩提像。佛像。

夫人よ、此畫は果是吳道子の眞筆なり、如今は得難し。

〔旦〕這の一幅の像は、爹爹孩兒に把與へ供養せしめ罷。

待て香を焚き、(七一)金經をば頌揚へ、(七二)小閣の中(七三)梅花磬響かむ。

〔外〕如此らば院子よ儞は這幅畫を領了、裝裱齊整ひなば小姐が處に交送し供養せしむ可し。

〔院〕曉得、老爺よ本衙門(七四)答應の(七五)裱揹繆繼伶は裱手甚だ好し、他に發與して裱罷。

〔外〕這は也儞に繇せむ、儞賈爺の差人に分付可し、明日回書を領けなば(七六)便了と。

〔院〕理會得。

〔尾聲〕〔(七七)合〕家慶集り、愁眉放く、且つ(七八)煖閣に權時將養はむ。

〔外〕明日衙門に事有り、好早く進み去かん。

【七一】水月。觀世音。

【七二】金經。金剛經。

【七三】小閣。婦女の居室。

【七四】磬は元來樂器に用ゐらるる矩形の石なれども佛具としては銅製の鉢なり、梅花磬は梅花形の銅鉢。

【七五】答應。仕事を引受くる意。

【七六】裱揹。表具師。裱手。表具の技倆。

【七七】便了。「……するまでのことなり」の意。明日返書を受取り行けばそれでよろしいの意。

【七七】合。登場俳優の合唱。家慶。父母の生日をいふ。

【七八】煖閣。俗に官衙の大堂をいふことあれど玆にては煖かき室と解す。

【七九】平旦。東方の白むとき、此句は寢坊するなとの意。

【八〇】故人。友人。雙鯉。書信。

【八一】絲綸。詔敕なり、絲綸退食は天子に侍して詔敕を掌る者御座を離れて休息する意。

【八二】鵷雛。鳥名、鳳の種類にて黃色勝ちたるものといふ。蘇頲の詩に花間燕子棲鴉鵲、竹下鵷雛繞鳳凰の句あり、上文の句は親子の團圞に喩へ又暗に女の爲に壻を求むる意を含む。

(七九)平旦の雞聲曉光を報ずるを悞了る莫れ。
花玉卻を撲ち春酒香り、
(八〇)故人の雙鯉遐方よりす、
(八一)絲綸退食して文章靜に、
竹下(八二)鵷雛・鳳凰を引く。

第四齣　(一)偕征

〔字字雙〕〔(二)副淨上る〕　(三)從來筆硯太に荒蕪なるは、故有り。
〔(四)內問ふ介〕甚麼の緣故ぞ。〔副淨〕
三杯口に到らば醉ひて模糊す。
〔內問ふ介〕醒的時節沒有とは難道。〔副淨〕
醒來を(五)待ち又去つて嫖賭し、(六)文場は半箇字兒すら無し。
〔內問ふ介〕這れ卻らば怎麼に處すか。〔副淨〕
(七)無非是れ包偓するのみ、同窗の朋友を約ひて皇都に到らむ。
〔內問ふ介〕約去くも也(八)幹す沒けむ。
〔副淨〕爾那裏ぞ知道むや。
全く他(同窗の友人)が救苦救苦に仗るを。
小子は鮮于佶的便是、人と爲り滑溜して、事を做すに精靈、(九)渾身上の十萬
八千根の毛孔、孔孔皆是れ刁鑽なり、一年中の三百六十个の(一〇)日頭、日日

【一】同行なり。
【二】副淨。俳優の役名。
【三】從來學問は物にならぬ。
【四】舞臺裏より登場人物に問ふなり。
【五】待。「……に至りて」の意。嫖。娼婦にうかるること。賭。ばくちうつこと。
【六】試驗場では半字も書けぬ。字兒の兒は名詞の附加字にして別段の意味なし。
【七】無非。「……するだけのことである」の意。包偓。人を雇ひ請負はしむること。
【八】沒幹。役にたたぬ、力にならぬこと。
【九】以下二句の意は、總身皆

無非遊蕩のみ、疑難事に遇著ば、只須眼睛を扎一扎、就是(一一)鬼谷子たりとも也(我が)一片の機關を透し難し、(一二)劣板腔に逢著ば、略し嘴唇をば掀一掀、饒ひ他(一三)孔聖人たりとも早く他が三分の頭腦を摸らむ、(我は)(一四)青樓に撒漫すること第一にして、(一五)朱窩に擲手すること無雙なり、最も喜なるは(一六)金山廣く有し、甚麽の(一七)柴米油鹽茶酒醋を數へむや、般般何ぞ千箱に止まらむや、可恨は(一八)墨水全く無く、只是這の(一九)之乎者也矣焉哉のみは、字字一竅をも通せず、(二〇)文場に入試せんとし、便ち去つて(二一)雞を殺して黍と爲さん。

〔牢ば跪き雞を割く介を作す〕(二二)兩片の厚臉皮を拿つて、大敎全く(二三)老兄に仗ると道ひ、(二四)卷を交して出來るに、(二五)會く羊を以て牛に易ふるに慣れたれば、(二六)一幅の大頭腔を蹬げ、頭名は

騙詐を以て滿ち滿てること。

【一〇】日頭。日子。

【一一】鬼谷子。縱橫家の元祖、蘇秦張儀の師。

【一二】劣板腔。物言ふことの巧みならざる者。

【一三】孔聖人。孔夫子。三分とは若干の意「一片」に對する語なり、此句對手の腹を見すかすの意なり。

【一四】青樓。妓樓。

【一五】朱窩。賭博宿。擲手。錢を張ること。

【一六】金山廣有。財產有ること に喩ふ。

【一七】柴米油鹽茶酒醋は皆生活上の必需品なり、是等の物は多量に所有せりとの意。

【一八】墨水。學問なり、支那は文章を以て學問の要とす。

【一九】之乎者也矣焉哉は文章の助字なるが、茲にては文章の意なり、不通一竅はさつぱり分曉らぬこと。

【二〇】試驗場に入らんとて。

【二一】雞を殺して食すること、論語に殺雞爲黍而食之の句あり、ここにては食事する意なり。

【二二】兩頰の鐵面皮といふが如し。

【二三】老兄。友人に對する敬語、此句は萬事御指導を願ふと言はんとの意。

【二四】答案を呈出して場を出づること。

【二五】慣會。「常に……すること を能くする」意なり。以羊易牛。惡きものを善きものとすり換へること。

【二六】(一曲の盛んなる樂を奏す)大言して吹聽すること、

【二七】青年の者は朱子(朱熹)の如き眞面目腐つた人は嫌ひなりの意。朱熹は宋人なるに本曲は唐の事なり、如斯矛盾は

斷然是れ我なりと說はむ、(二七)眞是青庚は去つて朱子を看ず、那の(二八)黃甲何ぞ曾て白丁に到らむ、今年大比將に近づかむとす、我前日曾て學裏の齋夫に託み、去つて同窗の朋友霍秀夫を約はしめ、一同に取應せむとす、此人は才學人に過ぐ、況且心事平坦にして、撮弄に易し、科場中の文章は、他を煩はして改擴改擴し、代作代作させでは未免、他は一定我を奚落めざらむ、道ふこと猶未だ了らざるに、此時霍兄也好に來到れり。

〔水底一兒〕〔生〕曙色長途、炊烟一縷孤し、(二九)爾看板橋の霜跡を、我は(三〇)後棲鳥に不是。〔生、副淨揖する介〕

〔副淨〕霍兄來了、可喜可喜、前日齋夫に託み寄來的書は、想ふに到了つらむ、小弟此に在りて專ら等てり。

〔生〕前日兄の相約を承け、多感多感、學中の秦先生と相別るるに因り、故此來ること遲れぬ、有罪了。

〔副淨〕今日天氣晴和、正に趲行前去に好し、請請。

〔生〕如此らば僭了。

〔駐雲飛〕〔生〕春平蕪に到り、十里の紅亭草色鋪く、那の小雨杏花酥かに、

戲曲に多し。

【二八】黃は黃榜のこと、試驗の成績揭示なり。甲は甲科、優等及第者なり。白丁。無官の平民。優等及第の名譽は無官の平民に落ちず、(以上副淨の語中色彩の對句に注意あれ。)

【二九】爾看。此場合感嘆の意あり。「あれあれ」

【三〇】人に後れをとる如き者に非ずとの意。(前句の板橋霜跡に應ず)

【三一】嗟。間投詞なり、調子を取る懸聲。

【三二】以下二句の意、皇室のために技倆を認めらるれば自らまた仕官せん。此の二句論語の孔子と子貢の問答に由來す。

【三三】漢の司馬相如大人之頌を奏す天子悅んで曰く、飄飄として凌雲の氣あり天地の間に遊ぶが如しと。

輕暖遊絲鶩る、(三二)蓁、賦を獻ず帝王の都、(三三)價を待ち斯に沽り、皇家に貨與、美玉櫝に藏め難し、(三四)凌雲を怕れず、(三五)子虛に動かず。

〔前腔〕〔副淨〕(三六)螢火を生疎、去つて(三七)梁に懸り錐股を刺すを懶け、(三八)梟注博して長呼し、(三九)裘馬遊ぶに度無し、蓁、(三九)樣に依つて葫蘆を畫かむ。「生に揖する介」

(四〇)者也之乎を偷取すること、活剝些兒、過を告げ嫌妬する休れ、(四一)請ふ鶖裘を解き酒代つて沽る莫れ。

〔副淨〕此は就是向年の姚店主の門首了、這人頗る小心て事を知る、還他が家に在りて寓罷、何如にや。

〔生〕使得。

〔副淨〕(四二)店主那裏ぞや。

〔(四三)末、老店主に扮して上る〕是れ那箇ぞや、酒債は尋常行處に有れど、人生七十は古來稀。原來二位の相公なり、請ふ進れ。〔生、副淨、門に進る、末、揖す安坐する介〕

〔副淨〕店主よ別來數年、還是這樣に清健にて、是れ七十歲の老頭兒の像か

【三四】司馬相如また子虛之賦を作りしことあり。此の兩句の意は相如の文才も驚くに足らずとの自負なり。

【三五】螢火。晉の車胤螢を集めて書を讀みし故事に因る。此句は讀書を怠る意なり。

【三六】懸梁。楚の孫敬頭髮を梁に懸け睡を防ぎて經を寫せり。錐刺股。蘇秦は讀書中睡を催せば錐を以て股を刺せり。此句また勉學せざる意なり。

【三七】博奕の勝負に梟盧雉犢塞の五采あり、梟注は其一なり。長呼。かけ聲すること。此句は常に賭博にふける意。

【三八】輕裘を著け車馬に乘り遊樂すること。

【三九】模倣するに喩ふ、陶穀の詩に堪笑翰林陶學士、年年依樣畫葫蘆の句あり。

【四〇】者也之乎。文章なり。活剝は活潑に同じ。

らず。

〔末〕好　說　好　說、二位の相公も、風采也往常に比べて大に相同じからず、今科には必定一齊に(四四)高掇了。

〔一封書〕〔末〕(四五)鑣を連ねて帝都に赴く、准ず今番雙びて掛綠するを取らむ。只是一件、如今(四六)場期は改めて四月の初邊に在了。長安酒沽る可し、且く請ふ(四七)消停して茅舍に住へ、聞く場期を改めて夏初に在りと。

〔生〕這是甚麼の緣故ぞや。

〔末〕(四八)安祿山亂を作せる消息有るが爲著なり、故此官家事有り、科場をば權く遲一遲なり。

胡奴、(四九)雒都を犯すが爲に、(五〇)鐃歌を奏し罷むるを待ち鳴鹿を賦せむとす。

〔副淨、生に對して說ふ介〕(五一)如此說、我們些し來ること早了、還家中に去き(五二)看看再び來らんは、何如に。

〔店〕(五三)功名の大事は(五四)個の打回頭的道理沒有、就ち(五五)寒舍に在りて將就住一住せよ、一兩月の光陰は、也是容易く過的。

【四四】漢の司馬相如卓文君と奔り後成都に歸り貧すること甚だしく自ら鶴鶏裘を脫し市人に就て酒を貰り文君と歡を爲す、後酒舍を買ひて自ら酒を沽り以て文君の父卓王孫を辱しめたる故事あり。此句は、汝若し余に便宜を與ふれば余汝に財を給せん、汝好んで相如を學ぶ勿れの意。

【四五】店は旅店なり、「もし店主よ」と呼ぶ意なり。

【四六】末。俳優の役名。

【四四】高掇。高位に及第。

【四五】鑣。馬のくつわ、下二句の意は馬を並べて都に至り共に名譽の進士となりて官を得んとの意。挂綠。進士には綠袍を賜ふ例あり。雙は「兩人共に」の意。

【四六】場期。試驗期日。

【四七】消停。ゆつくり氣を落ち

〔副淨〕 也說得有理なり、只是清清的、這幾間の房子の裏面に住在て、朝日價(五六)子曰く子曰くにては這れ卻つて挨不過、還有趣的處所に在りて、蹉一蹉、要一要て、纔めて好し。〔生笑ふ介〕

〔副淨〕 老兄笑ふは怎麼か、想是小弟纔く這裏に到りて、就ちに閒遊ばむと要す(る故)、此の如き沒坐性的を笑へるならむ。(五七)

〔生〕 老兄を笑へるに不是、小弟に(五八)一樁の心事有り。

〔副淨笑ふ介〕 老兄の心事は、小弟猜著了。〔耳に附く介〕 可是這箇人ならむ。

〔生大笑する介〕 瞞不過了、店主人よ、我儞に問はむ、我昔年此に在りて相會的女客華行雲は、(六〇)家に在りて好き麼。

〔前腔〕〔生〕 行雲舊の似きか無か、別後(六一)琴心玉壺に傍る。

〔末〕 聞得雲娘は相公に別了てより、一心心、只(汝に)(六二)相從るを要し、如今は常に十分客を留めずと。

他(六三)從良の誓渝らず、淡く蛾眉を掃いて(六四)鳳侶を思ふ、怎でか浪に(六五)橫塘を過ぎて野鳧を學ぶを肯せむや。

〔合〕 (六六)蘼蕪を采り、(六七)珊瑚を解く、來日呵、好く重ねて(六八)文君を訪ひ酒壚を過ぎよ。

付けること。休息する意。

【四八】 安祿山。唐の謀反人。

【四九】 雒都。洛陽。

【五〇】 鐃歌。軍樂なり、馬上にて奏す。唐時鄉試揭曉の後、鹿鳴宴を催し詩の鹿鳴の章を歌へり。此句は戰爭終つて後試驗を施行すとの意。

【五一】 さう云ふならば、

【五二】 看看。看一看なり、家中の人を見るの意なれど俗用には深き意味なし。

【五三】 功名。進士の試驗を受くること。

【五四】 個。助字なり。(第三齣參照)

【五五】 寒舍。店主自ら其家を謙遜したる語。將就。强ひて、忍びて、當坐の間に合せに、等の意。

【五六】 子曰子曰。論語に多く用ゐられたる語、玆にては讀書の意。

【五七】 沒坐性的。一處に落付いて居られぬ性質の者。

【五八】 一樁。一件に同じ。

【五九】 だましがきかぬの意。

【六〇】 家でまめに暮して居ますか。

【六一】 琴心は戀情、玉壺は高潔の意、常に高潔なる人を思ふの意。

【六二】 相從。從良に同じ。

【六三】 從良。妓女の賤業をやめて人に嫁すること。

【六四】 鳳侶。善き同伴者、良人のこと。

【六五】 相手を擇ばず笑を賣るやうの事を爲さずとの意。橫塘は地名今の江蘇省に在り、野鳧は賣淫婦を意味す。唐の崔顥の詩に君家在何處、妾住在橫塘の句あり。

【六六】 古詩に上山采蘼蕪、下山逢故夫の句あり。此句相思の人を待つ意。

【六七】 列仙傳に江女佩を解いて鄭交甫に贈ることあり。或曰く佩は珊瑚なりと。

【六八】 文君。卓文君なり、司馬相如妾を納れんとして文君白頭吟を作る。此句は舊の情人を忘るる勿れとの意。

【六九】 碧玉。汝南王の妾、今賃家の女をいふ。

【七〇】 巫峽。巫山の峽なり、宋玉高唐の賦に楚王高唐に晝寢れて巫山の女を夢みたることあり。行雲は妓女の名にかれど元は旦爲朝雲暮爲行雨の句に出づ。

【七一】 西施。春秋時代吳王の妾たりし美人。初め若耶溪に紗を浣ひしことあり。

第五齣　合圍

〔點絳脣〕〔一〕淨胡服し女樂衆軍上る〕〔二〕高鼻群を連ね、〔四〕明駝陣を成し、〔五〕番靴整く、〔六〕華淸を踏徧了、〔七〕羯鼓花をば催醒す。

漁陽の〔八〕疊鼓黃雲を動かし、沙磧驚き看る起雁の群、〔九〕貂帳夜來微雪下り、琵琶酒を送る石榴裙。自家は范陽節度使安祿山是也、天生胡種にして、濫りに國恩を受く、外貌は〔一〇〕癡肥なれど、中懷は狡黠なり、金貂皂帽、一時・寵・群僚に冠たり、鐵騎雕戈、八面・雄・〔一一〕諸鎭に先んず、〔一二〕繡襁錢を浴室に賜ひ、〔一三〕金雞障を朝參に設く、眞に是れ寵倖無雙にして、富貴已に極まり、我の心願也罷了、只耐へ巨きは楊國忠這老兒は那の達奚珣一

【一】山獵なり。
【二】淨。俳優の役名。胡服。胡人の服裝。
【三】高鼻。胡人は鼻大なる故此くいふ。
【四】明駝。駱駝の一種、明駝と名くる所以には二說あり、要するに良駝なり。
【五】番靴。夷狄人の靴。
【六】華淸。中國の地をいふ、宮名にも華淸宮あれど玆にては宮名に非ず。
【七】羯鼓。外國より傳はりし樂器、玄宗曾て高力士をして羯鼓を擊ち春光好の曲を奏せしめたるに柳杏皆發ぜりといふ、上文胡人の鼓聲に喩ふ。
【八】疊鼓。忙がしく鼓を打つこと。
【九】貂帳。陣營。石榴裙。女子の紅裙、唐の萬楚の詩に紅裙妬殺石榴花の句あり。
【一〇】癡肥。外觀肥滿して愚鈍らしきこと。金貂皂帽。侍從貴臣の帽なり。
【一一】諸鎭。諸節度使。
【一二】安祿山は楊貴妃の養子と爲れり、貴妃大繡襁を以て祿山を包み襁兒を洗ふといふ、玄宗之に浴兒錢を賜へり。
【一三】玄宗かつて大金雞障を設け大榻を施し簾を卷き安祿山を其下に坐せしめて百戲を設けて共に看たり。

班の人と、屢宮裏に在りて咱家を讒譖す、說はく咱は元是れ胡人なれば、必ず異志を萌さむと、仔細かに思量起來、咱は〔一四〕邊廂に在り、他們は裏面に在り、〔一五〕到底這の狗頭の算子を出不得、因此上兵馬を整頓し、直に長安を犯さむとす、儞看過ぐる所の州縣、風を望んで瓦解するを、近日又何千年・高邈兩人を差はし、假るに那の〔一六〕射生手を獻ずるを以て名と爲し、楊光翽を擄了、太原城池を賺破れり、好歹馬を歇むること數日にして、刻期以て〔一七〕河を渡る可し、這は都て不在話下、今日天氣甚だ是れ淸和たり、衆軍士よ、可に帳外の沙地上に前去き一番打圍せば、多少に是れ好からむ。〔衆應じ〕〔一八〕吹打吶喊する介〕

〔二犯江兒水〕〔淨〕雕鞍金蹬、結束了雕鞍金蹬、繡旛飄る雲外の影、暢だ好し長楊水に蘸り、細草烟の如し、那の紫騮の輒沙路穩かに、〔一九〕鶴尾金鈴を掣き、〔二〇〕爐香宋鵲に薰る、雪盡きて蹄輕く、風緊しうして弓鳴る、儞看草茸の中狐兎滾ぶを。

〔衆打圍の獵物を獻ずる介〕大王に稟す此處の〔二一〕草坡上にて、可以しく片時消停み、衆人馬の略し歇一歇を等て。

【一四】邊廂。邊鄙の地。
【一五】此奴共の謀計を免るる能はずとの意。
【一六】射生手。騎射兵。
【一七】河。黃河なり。
【一八】吹打。螺を吹き鑼を打つ。
【一九】旌旗の羽毛に金鈴を附けたるなり。
【二〇】宋時の窯にて製したる鵲形の香爐に香のかほること、宋には名瓷多し。
【二一】草坡。草丘。
【二二】胡女。胡人の女子。
【二三】叮噹。琵琶の聲。
【二四】熟睡せる者をはげしく呼びさます。
【二五】踏張ること、弓を引く姿勢。
【二六】鞦扣。革帶の結目。
【二七】楊貴妃浴を出づるとき玄宗其乳を見て軟溫新剝雞頭肉と云へるに由來す。雞頭は芡の實なり。

〔淨〕使得使得。〔淨坐す、(三)胡女琵琶を彈き唱ひ酒を奉る介〕
琵琶數聲、響き(三)叮噹たり琵琶數聲、團花舞裙、颭き篤速と團花舞裙、纓を
灑く時、些しく噇了、(四)打刺蘇す斟して醒めざるを。〔乘起ちて海螺聲を吹き
身を斜めに頭を低くし單擺して疾行し三轉す淨上掉て唱ふ介〕
〔前腔〕儞看中原の數星を、馬を勒して中原の數星を望む、邊を刮く風雁を吹
きて冷ゆ、(三五)靴尖に仗著平踢り、(三六)鞚扣牢く拴び、一枝枝に番箭準し、想起
す(三七)雞頭乳牛停、紅塵笑口に迎へしを、幾時か(三八)金錢重ねて洗ひ、(三九)舞馬
轟く撾ち、(三〇)凝碧池の歌吹をば領するを得む。〔淨下る、鼓を鳴らし行く介〕
(三一)花腔鼓鳴る、撲鼕鼕と花腔鼓鳴る、玉靶弓を擎り、赤緊的玉靶弓を擎り、陣
に對する時、(三二)孩子們よ、(三三)射雕兒に挑選ばれ頭一等と做れ。
亂雲飛磧漁陽に滿つ、
舊是れ(三四)蚩尤の古戰場、
胡騎の歸鞍雙兎を挂け、
弓を彎いて猶自黃羊を射る。

【三八】本齣。〔一一〕參照。
【三九】玄宗舞馬四百蹄を教へ千秋節に勤政殿樓下に舞はしむ、此の樂を傾盃樂といふ、撾は鼓をたたくこと。
【三〇】河南洛陽の禁苑に在り、安祿山此に宴せしことあり。
【三一】花腔鼓。鼓の胴に畫飾あるもの。
【三二】部下の若者に對する語。
【三三】胡人善く射る者を射雕兒といふ。
【三四】蚩尤。太古の人名、黃帝に戮さる。黃羊。かもしか。

第六齣　寫像

〔七娘子〕〔(一)小旦淡妝して上る〕風流貪り看る(二)杜陵の花、春衣を解き夜兒家
に宿す、舊日の(三)章臺、重ねて來り馬を繫ぐ、權時閒話せよ湖山の罅。
〔阮郎歸〕(四)曲江寒食草青青、人有り茂陵より來る、花を隔てて小犬・春
星に吠え、風繡幕の鈴を吹く。酒債を擔ひて、琴心を閣めしが、(五)凌雲の賦
早く成り、(六)壚に當つて先づ唱ふ白頭吟、文君の心氷に似たり。奴家姓は
華、小字は行雲、長安の人氏なり、不幸門戶單貧して、籍を(七)上廳の行首
に落し、歌を抛ひ笑を賣り、(八)捧心長是自ら憐み、(九)月を抹で風を披き、點
筆亦能く俗を免る、念頭の向ふ所は、只要に(一〇)從良するにあり、但し厮稱
へる兒郎有らば、琵心相許すを惜まず、幸喜茂陵の才子霍秀夫は、向に曾て
韋曲にて相逢ひ、近ろ又(一一)天台に重ねて訪へり、他試期尙早きに因り、此處
に接來て讀書せしむ、他が聰俊多才、至誠假らざるを看て、私心暗に終身
を託す可きを約せり、今日小雨初めて晴れ、瓶花・香綻び、明窗淨几、甚是人

【一】小旦。俳優の役名。淡妝。うす化粧。
【二】杜陵。長安の近くに在り、樂遊原もまた一處なり、(第二齣參照)杜陵花とは妓女に喩ふ。
【三】章臺。長安に在り、漢の張敞威儀無く朝會を罷め馬を章臺街に走せたることあり、章臺街は臺下の街なり、(妓女を訪ぬる意なり)
【四】曲江。長安附近の川。寒食。冬至より百六日目の日なり卽ち春なり。
【五】第四齣〔三〕參照。
【六】司馬相如卓文君と奔り窮して酒舍を開き相如酒を賣り

に可し、不免(二二)霍郎を請じ出來り一回閒話せん、多少是好からむ、霍相公有請。

〔前腔〕〔生〕酒闌にして風冷え月初めて斜めなり、(二三)剛かに枕に就き林鴉を惱殺む、行雨の夢酣なるとき、賣花の聲聒しし、晴風小に鈎簾の下に透るを覺ゆ。

〔生、小旦揖拜する介〕小生試期未だ偶はず、西京に落魄せしが、卿が意を曲げて欵留するに感じ、一言にして謝し難し。

〔小旦〕霍郎よ(二四)那裏の話を說ふか、只是陋巷の茅檐、恐怕は儞(二五)看花人の住的所在に不是らむ。

〔生笑ふ介〕(二六)各色の花は都て不在話下、只是れ一朶の(二七)解語の花兒は、饒他曲江を踏遍すとも、也處の尋得る沒し。〔旦微笑する介〕

〔生几上を看る介〕雲娘よ、這の几上の手卷は、是れ甚麼の畫ぞや。

〔小旦〕鄰廂の女伴の家より借來り看的なり、是れは一卷の(二八)明妃の馬に上るの圖なり。

〔生展き看る介〕果然畫得好し、雲娘よ、我儞の天姿出色なるを看るに、這

文君壚に當る、後文君の父より資を得て富裕と爲り相如妾を納れんとす、文君悲んで白頭吟を作る。此句は、文君相如未だ富まざるにすでに文君白頭吟を作らんとすとて己れの捨てられんことを恐るる意。

【七】上廳は最上の房、行首は妓女の首位なる者「お職」也。

【八】捧心。胸をいだく、悲む狀。

【九】畫をえがくこと。

【一〇】妓女人に嫁すること。

【一一】天台。此の句劉阮の天台山に入りし故事に由る。(本齣【五一】參照)

【一二】姓に郎を附するは男子に對する親密の意あり。

【一三】剛。たつた今……したばかり」の意、此句は今寢たと思ひしにも早や夜明けてにくや鴉かしましの意。

の畫上の明妃と、分明に一箇の(二九)粉撲兒にして、不差甚麼。

〔小旦〕(三〇)諸般像ざれども、只是桃花薄命にして、平康に流落せるは、也他が(三一)出塞の苦と甚の差別沒し〔傷感む介を作す〕

〔生〕雲娘よ、必ずしも煩惱まざれ、小生一向略(三二)丹青を曉得こと幾筆あり、儞看、今日流鶯樹に啼き、粉蝶牆を過ぎ、風景宛然畫の如し、我儞が與めに一幅の聽鶯撲蝶圖を作り、描寫得十分に喜洽せば、(三三)儞が「歡處に愁を生じ、啼痕面に界する」を免得、如何に如何に。

〔小旦〕久しく霍郎が丹青妙絕なるを知れり、只是奴家は風塵の陋質、怎でか便ち彩毫を相煩はさむや。

〔生〕好、說。〔絹を取り筆を展る介を作す〕

〔生〕雲娘よ、小生細かに看一看を待ち、方めて好く落筆せむ。〔從頭至腳看る介〕

〔畫く時(三四)帶看帶畫く介〕

〔刷子帶芙蓉〕〔生〕絕代なる玉に瑕無し、(三五)卿卿の爲に特地、淡く鉛華を掃く。

【一四】何を仰しやるのですか恐縮します。

【一五】第二齣【三七】參照。

【一六】他の花の事は別として。

【一七】解語花。ここにては行雲を指す、玄宗楊貴妃を指して云へる言に由來す。

【一八】明妃。漢の王昭君。

【一九】粉撲兒。畫稿なり、畫の見本。汝は此の明妃の畫のモデルなりの意。

【二〇】似ざる點も多けれど。

【二一】王昭君塞を出でて呼韓邪單于に嫁す。

【二二】丹青。繪畫。

【二三】汝は喜ぶ可き時に悲み、顏に涙のあとをあらはすこと多けれど、我汝の姿をうれしげに描くべければ今後は汝も此の畫に因りて、みだりに悲みを生ずること無かるべしとの意なり。

【二四】帶は兼ねる意なり、一方

怎麽にして腮邊の這の一點、紅得此の如きか。半天風韻、依然たり(二六)人面桃花。

〔小旦笑つて鏡を取り自ら照し又畫を看る介〕果然像得十分なり。

〔生〕像るは只爾の樣兒の標致きに像得も、這の笑を帶び嚬を含み、情無く意有るの天然一段の韻致は、我をして怎でか畫得出さしめむや。

(二七)眉峯に綰る春愁那答に、(二八)凌波を蕩がす弓鞋這些に。

〔生明妃の圖を取り對比る介〕明妃よ明妃よ、我說はむ雲娘は一定爾に讓らすと。

果然明妃重ねて畫かば、怎で(二九)毛延壽を學び、(三〇)上陽花を批點壞るを肯せむや。〔小旦畫を看る介〕

〔山漁燈犯〕〔小旦〕(三一)樊口停め、(三二)蠻腰罷め、(三三)同心を准備し、怎で鞍馬を離さむや、板を按ずる(三四)紅牙、箏を彈ずる(三五)銀甲を收拾了、(三六)琴心豈墟に當る寡に負かむや、再び題ふ休れ(三七)浪酒閒茶と。〔生に拜謝す、生推する介〕承謝す爾が文通(三八)筆花、(三九)虎頭の鈎法、擅擧得、(四〇)檀郎に比並著も半點の差沒し。

(二五)卿卿。親密を表する語、溫庭筠の詩に不將心事許卿卿の句あり、鉛華。白粉、この句女の面を畫くに喩ふ。

〔二六〕唐の崔護の詩に、去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面不知何處所、桃花依舊笑春風とあるに因る。

〔二七〕眉峯。眉黛を遠山に喩ふると同じことにして眉のことなり。

〔二八〕凌波。美人の步行をいふ、曹植の賦に凌波微步羅襪生塵の句あり。弓鞋。纖足したる女の鞋は底の形弓の如し。

〔二九〕毛延壽。漢の畫家なり、王昭君延壽に賄賂を使はざりし爲め其の相像を醜く畫き遂に匈奴に嫁するに至れり、延壽は後棄市せらる。

奴家の意思にては、還霍郎が自己の尊容をば、也上面に畫在を要む、(斯くてこそ)方纔て有趣。

僥倖煞、只個の風流の(四一)司馬、香肩を並べ、相隨ふ雙蝶、海堂の花を穿過るを少けり。

〔生〕這は卻つて也好からむ、只是小生は下界の(四二)文魔なり、怎でか敢て箇の(四三)玉天仙と一答に並在、可に惶恐らざらむや、(四四)也罷、(四五)此の餘紅殘粉を趁として、也(四六)出醜出醜せでは免不得。

〔普天帶芙蓉〕〔生〕(四七)眉を畫く郎怎で自から眉兒をば畫かむや、玉貌に較べて羞慚殺。〔池邊に向ひ自から照す介を作す〕

(四八)草藁を打り影を池中に顧る。〔又鏡を取り自から照す介畫く介〕

粉本を脫し(四九)小鏡菱花を央む。

〔小旦看る介〕風流標致、儼然活現せり、只是爾が(五〇)一付の文心は、爾自家さへも也描寫不出。

描不出(五一)詞源峽、再に腮斗の邊を把つて些の喜洽を添ふれば、(五二)桃花洞の仙子の胡麻に抵得可し。

〔三〇〕上陽は宮名なり、美人を置く處なり、上陽花は王昭君を指す。批點壞はけなしつけること、けちをつけること。

〔三一〕樊口。唐の名妓樊素の口なり、白居易の詩に櫻桃樊素口の句あり。

〔三二〕蠻腰。唐の名妓小蠻の腰なり、白居易の詩に楊柳小蠻腰の句あり、此の二句行雲の姿態を畫き了りたる意。

〔三三〕同心。腰間の帶なり。

〔三四〕紅牙。音樂の拍子をとる紅色の象牙の板、按板はかちかちと音させること。

〔三五〕銀甲。箏ひく爪。收拾。ここにては畫き了る意。

〔三六〕卓文君の故事に因る、寡は文君はじめ寡なりし故に斯くいふ。

〔三七〕一時のなぐさみ。

〔三八〕李白少き時筆に花咲くを夢み是より才思贍逸すといふ。

〔生、旦、同に唱ふ〕

(三三)比目連枝亞らず、(三四)東皇に祝る、(三五)生生世世並蒂の木蘭花と作らむことを。

〔小旦〕 霍郎よ、儞は但に文詞一世を壓倒するのみならず、就是這の丹青すら、世上那裏にか有らむ、這樣なる出色たる才子は、難得し難得し。

〔副淨上る〕 酒を沽つて辭せず平樂の醉、花を尋ねて又過ぐ杜陵の春。這幾日(三六)身上些の爽利を欠ひたれば、曾て去つて霍兄を看得はざりしが、今日は去つて他を尋ね、(三七)溫存一溫存、(三八)幫襯一幫襯せでは不免、那の(三九)入場の時に到り、纔めて(四〇)如此如此するに好からん、儞看轉灣抹角て、已に是れ華行雲が家の門首なり。〔門を敲く、內、門を開く、進りて揖する介〕

〔副淨〕 這幾日小弟寓中に在りて、(四一)些の小恙有りければ、曾て時常に來りて老兄と雲娘とを看得はず、(四二)抛別せり抛別せり。

〔生〕 小弟も也些の小恙有り、此が因め鮮于兄に(四三)候を失きたり。

〔副淨笑ふ介〕 兄の病は我都て曉得り。〔耳に付し低語し笑ふ介を作す〕可是に這樣ならむ。

〔三九〕 晉の顧愷之の筆法。

〔四〇〕 檀郎。女子その情人を指す語、もと晉の潘岳の小字檀奴といへるに由來す。此二句は、御名筆のお蔭にて此の姿は汝とならぶるも見劣りせずとの意。

〔四一〕 司馬。漢の司馬相如なり、此句に於ては霍生を相如に喩ふ。

〔四二〕 文魔。文學狂。

〔四三〕 行雲を指す。

〔四四〕 「まあそれも可からう」それではさう仕ませうの意。

〔四五〕 綺具に殘餘あるを幸としての意。趁は機會に乘ずる意。

〔四六〕 出醜。拙劣を表はす意、謙遜の語なり。

〔四七〕 漢の張敞京兆尹と爲りしが妻の爲めその眉を畫けりと傳ふ。此の句意は、余汝の爲めに眉を畫くべき者なるに却つふ。

〔生笑ふ介〕 (四四)取笑を休得。

〔副淨桌上の畫を看て問ふ介〕 這是那箇が畫的か。

〔生〕 (四五)兄を瞞さず說はむ、是れ小弟が胡りに謅りたるなり。

〔副淨細かに看て笑ふ介〕 (四六)元來是れ儞兩口の老人家が子孫に傳的神影子なるか、如何に這樣に像得。

〔畫をば自己の面上に貼在る介〕

〔生〕 這は怎麼說ぞや。

〔副淨〕 一向敢て雲娘に沾み一沾まざりしは、老兄が些の喫醋有らむを恐怕たるなり、(四七)今日は畫兒上に在りて略他が些の便宜に沾まむ、怪る莫れ怪る莫れ。〔生笑ふ介〕

〔副淨〕 雲娘よ、我還一句の話有り儞に對して說て自ら己れの眉を畫くを愧づるなり。

〔四八〕 打草驚。畫稿を作ること、池水に姿をうつして粉本となす意。

〔四九〕 菱花は鏡なり、小鏡菱花また鏡なり。

〔五〇〕 一付。一副なり、俗にいふ一組。此場合單に文心に對する冠詞の如きもの「一つ」の意。汝が胸中に蓄へたる文才は汝の手にても描出する能はずとなり。

〔五一〕 詞源峽。詞藻の極り無きを喩ふ、杜甫に詞源倒流三峽水の詩句あり。

〔五二〕 漢の劉晨阮肇二人天台山に入り藥を採り、二女に逢ふ、喚ばれて家に到り胡麻飯を與へらる、且夫婦と爲る二女は仙子なり、住へる處を桃源洞といふ。

〔五三〕 比目は比目魚、夫婦に喩ふ。連枝は連理枝、これまた夫婦に喩ふ。

〔五四〕 東皇。春を司どる神。

〔五五〕 生生世世。未來永劫の意。並蒂木蘭花。夫婦に喩ふ。

〔五六〕 病氣なりしこと。

〔五七〕 溫存。交を溫むること、親しみを加ふること。

〔五八〕 幫襯。同情すること、力を添ふること。動詞を繰り返し一を其間にはさむは、意を強むるなり。(第二齣〔三〕參照)

〔五九〕 入場。試驗場に入ること。

〔六〇〕 如此如此。斯樣斯く斯く」の意、意中に在ることを明瞭に口に出さざるなり。

〔六一〕 少し病氣がありました。

〔六二〕 抛別。顧みざりし意。

〔六三〕 失候。御無沙汰しました。

〔六四〕 冷やかしてはいけない。

はむ、此の如き一幅の好畫は切に人の被めに裱壞了はること莫れ、那の(六八)貢院の門首の繆酒鬼は、手段極めて高し、是れ禮部衙門に答應する的なり、可しく(六九)人をして他に送去與けて裱せしめば、(七〇)纔めて使得らん。

〔小旦〕 使得。

〔朱奴帶芙蓉〕〔副淨〕 一對(七一)班頭の風雅を看れば、(七二)雲雨を行ひて是れ眞に差はず、分明に活現す(七三)巫山の畫、是れ(七四)藐姑權に箇の神仙の假を放てるが(如し)、鶯兒をば打ち、(七五)鬧喧しむる休く、(七六)玉人の檀口に仗りて、曲江の花を唱醒了。

今日小弟與を發し幾杯の酒を吃せむと要了、雲娘も也請ふ例を破りて、一箇の極めて鑽心的曲兒を唱へ、霍兒大家樂樂むに等りて纔めて是し。

〔尾聲〕〔小旦〕 請ふ(七七)煖閣の中杯斝を傾けよ。

【六五】「正直に申しますが」の意。謂。掛に同じ。

【六六】元來。何かと思へば……なりき」の意。老人家は通例父母を意味す、此の句にては二人の男女を將來の父母として云へる諧謔なり。兩口。夫婦二人のこと。

【六七】今日は畫像の雲娘と親しくせんとの意。沾便宜とは「味を占める」「德を得る」「利を得る」の意なれば沾他些便宜は其人の有する好物にありつくことなり。

【六八】貢院。進士の試驗場。

【六九】原文「著人」は「使人」に同じ。

【七〇】纔使得。方に可なり、「さうしてこそはじめてよし」なり。

【七一】班頭。第一等の意。班とは各種の「部」又は「組」のことなり、宮中文武官皆班あり、班頭は常に其の組中の第一人者をいふ。

【七二】行雲雨。情事を爲すこと。眞不差。優劣無きこと。

【七三】第四齣〔七一〕參照。

【七四】藐姑。姑射山の神。

【七五】鬧喧。さわがしく囀る。唐の蓋嘉雲の詩に打起黃鶯兒、莫教枝上啼の句あり。

【七六】玉人。美女なり。檀口。美人の紅脣。

【七七】煖閣。煖かき室、(第三齣【六九】參照)杯斝。酒器なり。

【七八】今後は他の稱呼を用ゐずして互に那畫兒と呼び合へよ。

【七九】臨搨。摹寫すること。

【八〇】周遮。よく囀ること。

【八一】宛轉。曲りくねること。

〔副淨〕 霍兒よ儞と雲娘とは、(七八)今後は甚麼と叫ぶことすら要せず、只「那の畫兒」と叫做罷。畫中の人又好く人中の畫と做り、春宵に祕戲せでは免不得、也(七九)臨搨を費すを要せん。

雲は衣裳を想ひ花容を想ふ、
美人の圖畫・春風を領す、
流鶯巧に(八〇)周遮の語を作し、
癡蝶深く(八一)宛轉の叢を穿つ。

第七齣　購倖

〔梨花兒〕〔淨吏巾にて上る〕我(一)提控と做り最も名有り、(二)瞞天過海人の問ふ無し、今年(三)大比期又臨し、蓀、只要幾貫の銅錢を賺け(四)阿正を養はむ。自家は衙門中の一箇の(五)都吏にして、臧不退と叫做る便是、一切(六)科場内の編號謄卷は、皆是我案を掌る、毎年人來りて(七)打點すること有るとき、(八)也一兩樁の事兒を做すを要す、故此て主顧越多し、上年には茂陵の(九)一位の姓鮮于的朋友有り、來りて我が(一〇)幹辦幹辦を央託たれど、機會不便なりしに因り、曾て他が與めに成就げざりき、那ぞ曉得む這樣の好人(鮮于の如き)有らむとは、分文も也來到て取らず、今年は知らず此人可に曾て到れるやを、若し到りし時は、須らく去きて他を望一望、或者又我に央まむと要するやも也定まらず、正に是れ、(一一)門を閉ぢて家裡に坐すれば、錢天上より來る。

〔前腔〕〔副淨〕(一二)同窗の朋友忒た高興き、客邊一箇太に孤另し、閒來(一三)外郎の門を過訪ふ、蓀、敲く時看る可に人來りて應ずる有るかを。

【一】提控。吏の役名なり。
【二】瞞天過海。虚僞して憚る所無きこと。無人問。誰も咎むる者なしの意。
【三】大比。進士の試驗。
【四】阿正。正妻なり。
【五】都吏。官名なり。
【六】科場。試驗場。編號謄卷。試驗人員に番號を附し答案を謄寫記錄すること。
【七】打點。しらべ整ふる意なれども茲にての意は程よく渡りをつけることにして賄賂を納るることをいふ。
【八】「いくらか工夫をしてやる」の意なり。
【九】一位。一個に同じ、人を

此是(一四)老臧の門首了、待我敲き看む。〔敲く介を作す〕〔淨應へて出で見ゆ進る門を關づ揖する介〕

〔淨〕小弟正に這廂に在りて(一五)老兄を念へり、向年は事を做すこと不週、甚是惶愧れり、(一六)反つて厚惠を叨にし、何を以てか克く當らむ。

〔副淨〕這些の小き意思は、何ぞ(一七)齒及を勞せむや、常言に說得好し、「心有りて來り(一八)年を拜するは、(一九)端午も也遲からず」と、今年は一定老兄を煩はさむと要す、我が與めに著實と箇の法兒を設けよ、務必中得十拿九穩して方めて好し。

〔淨思ふ介〕有了、我想ふに代作傳遞は未だ必ずしも一時湊巧かず、今科は(二〇)關防嚴しくして、(二一)字眼關節は一毫も風を通せず、只箇の極めて好的計較此に在る有り、這些の號數は都て我が手裏に在りて編過的なれば、兄場を出づる時、上心して那位かの朋友中にて文字做得極めて好的を訪著、便ち他が甚麼の號數なるかをば、明白に察得せ、我悄悄に打進去て、兩家の卷上の號をば改了、甚だ爾に替つて文章を做りしが如く一般にして、又形跡沒し、此是十拿九穩、必ず中的計較なり、何如に何如に。

數ふる敬語「お一人」なり。
【一〇】幹辦。「爲す」ことなり。此句は、余に或る處置（不正の）をたのみたりの意。
【一一】此句は果報は寢待ての意。
【一二】以下二句は霍生の得意なると鮮于自ら情人も無く寂寞なるとを述べたり。
【一三】外郎。下級の吏員。
【一四】老臧。臧は姓、老は老いたる人の意。（但し自らその姓の上に老字を附して呼ぶときは老いたる意にあらずして自ら誇る意あり。）
【一五】老兄。友人に對する敬語。
【一六】以下二句は、多くの贈與を受け恐縮の至りなりの意。
【一七】御懸念には及びません。
【一八】拜年。年始の賀を行ふこと。
【一九】端午節は五月五日なり。

〔副淨〕 如此ならば甚だ好し、待我先づ拜謝せん。

〔淨を拜す〕(二二)扯く介を作す」

〔貂銀燈〕〔副淨〕 我家資黃金(二三)籯に滿つ、只(二四)烏紗頂を蓋ふを想ふ、君を煩はす(二五)裏に就いて相聲襯け、偷かに(二六)三場の雲錦を割換へよ、倘し名を成さば敢て大恩を忘れむや。

(二七)說過如今、現に銀五百兩を封ず、(二八)榜上に名有るを待て、那時呵。

(二九)幾錠の雪花を加へて相贈らむ。

〔前腔〕〔淨〕 科場の中(三〇)鑽營頗る精し、只關防嚴緊なるが爲著のみ、日を換へ天を偷む計行ふ可し、字號をば儞が與めに牢牢と封進し、他をして互更へしめむ、機は鬼神に通ず。

〔臧〕 只一件(云ふべきことあり)、老兄事成り、

(三一)高中せる後官と做る時は、還我に一兩次の肥抽豐を找すを要し、纔めて使得、那の時硬て。〔身を搖

誠心だにあらば端午に至りて年賀するとも遲しといふべからずとの意。

【三〇】關防。不正を警戒すること、取締り。

【三一】字眼關節。豫め試驗官と打合せ或る文字を以て自作の答案なることを暗示すること、(答案には姓名の部分を覆ひて提出する例なり)不通風。私意を通ずる餘地無きなり。

【三二】扯。拜する者をひき起すなり。

【三三】籯。竹にて造れる箱。

【三四】烏紗。烏紗帽なり、唐時の官帽。此句進士に及第して就官するを欲する意。

【三五】內部より力を添へよの意。

【三六】進士の試驗を三回に分つ。雲錦とは答案の文章。

【三七】口に云ひて直ちに實行すること、話のつき次第に現金を出す意。

【三八】及第人名の揭示中に名を列したる時。

【三九】幾錠。錠は一定の重量ある銀一片なり。雪花は銀なり。

【三〇】鑽營。隙を見て不正手段を試むること。

【三一】高中。上席にて及第すること。抽豐。他人の餘分を强ひて請ひ自己の補と爲すこと故に人に助力を乞ふを打抽豐又は打秋風といふ、肥抽豐とは澤山の分け前といふが如し。

【三二】張智。相降らざること。妝奇。假裝すること、ふりをする。

る介を作す」

(三三)張智妝奇を做して允さざる莫れや。

文章は命の達するを憎み、

魑魅は人の過を喜ぶ、

只富貴を求むるに因りて、

平地に風波を起す。

第八齣　誤畫

〔淨〕(一)圍裙し裱背匠に扮して上る〕　門に(二)招牌利市を掛け、家に裱背の生涯を傳ふ。(三)我浪りに口兒を把つて誇るに非ざれども、倒是文房の風雅なり、任爾(四)鍾王の眞跡、饒他(五)歐褚名家、和び那の(六)荆關の劈斧・披麻と(すべて)我が漿兒一刷に彀らず、自家は乃ち裱背繆繼伶的便是、我平常喜んで幾杯兒を喫むに因り、人人は都て我を叫びて繆酒鬼と做せり、且喜にも(七)手段高强にして、生意利市す、只是(八)禮部衙門は是れ我當官、時常に(九)答應を費すを要す、日前禮部の酈老爺の(一〇)衙裏より、吳道子の水墨觀音一幅を發出せしが、又一位の(一一)甚麽の霍相公なるもの有りて、親ら春容一幅を送來り、手工倒是加倍たるが、我に囑付みて他(霍秀夫)が與め心を用ゐて裝裱せしむ。〔壁を看る介〕這の兩項俱に乾透了、今日天氣晴朗なれば、掲將下來、軸頭を(一二)裝上では不免、恐怕くは他們來り取らむ、(一三)媽媽よ快く漿盆糊刷を拿出で來れ。

【一】圍裙。作業に用ゐる腰布なり、膝の汚れぬ爲に著す。裱背匠。表具師。

【二】招牌は看板なり、利市とは繁昌の意にして招牌に記せる文字。

【三】「自慢するわけではないが」の意。

【四】鍾王。魏の鍾繇及晉の王羲之、いづれも名筆家。

【五】歐褚。唐の歐陽詢及褚遂良、共に名筆家。

【六】荆關。後梁の荆浩と其弟子關仝、共に名畫家。劈斧及び披麻は孰れも畫法の名。

【七】手段。技倆。高强。すぐれたること。

〔(一四)丑裝裱婆上る〕　自ら歎ず(一五)紅鸞不利にして、箇の(一六)漿水寃家を招了を、終朝樓刷を手兒に拿ち、好た(一七)腌臜邋遢からざらむや、晚上一同に住宿り、又(一八)曛曛と醉得昏花く、(一九)樓毛兒をば略略兩三爬すれば、便ち幾點の漿兒滴答る有り、老兒よ、漿盆糊刷都て此に在り。

〔淨〕媽媽よ、要緊なる主顧家の一兩件の生意有り、爾(二〇)幫襯一幫襯して、他に(二一)完成與る可し、他來り取討めて(二二)聒絮ふを免得れむ、爾來れ爾來れ。〔(二三)橙子を端へ淨を扶け站ちて畫を掲ぐる介を作す〕

〔鎖南枝〕〔副淨〕(二四)紙を漿砸し、(二五)糊を雪打し、平臺を拭淨め畫片をば鋪く。

這の一軸は是れ霍相公の送來的春容なり。美人の圖を掲起ぐ。

【八】禮部衙門。六部の一にして禮敎を司る官衙。當官。官の仕事を爲し吏員の待遇を受く。

【九】仕事を仰せ付けらるる意。

【一〇】衙は官宅の意、高官の邸なり。

【一一】甚麽は「霍さんとかいふ人」の「とか」に當る語なり。

【一二】裝はよそほひ著けること、上は動詞の助字。

【一三】媽媽。元來子が母を呼ぶ語なれど、下等社會にては夫が妻を呼ぶにも用ふ「おつかあ」等の語に當る。

【一四】丑。俳優の役名。裝裱婆。表具師の妻。

【一五】夫婦良緣にあらざること、紅鸞は星命家の吉星なり。

【一六】漿水はのりなり、寃家とは元來仇人の意なるが自れに對して恨めしき者との意にして情人夫婦の間にも用ふ、招は增を招くの意。此句は表具師の妻たるを恨む意なり。

【一七】腌臜。不潔なること。邋遢。不潔の形容。

【一八】曛曛。酒氣の甚だしきこと。昏花。醉ひて物の辨へなきこと。

【一九】樓毛兒。しゆろの毛。略略。「ざつと」「簡略に」の意。爬。刷毛にて刷くこと。

【二〇】幫襯。力を添ふること、てつだふ。

【二一】動詞の下に「與」あるは通常「……してやる」の意。

【二二】聒絮。小言いふこと、うるさく催促するなり。

【二三】橙子。凳子なり、木製の腰掛け、但し玆にては表具用の臺なり。

【二四】紙に糊を塗る。

【二五】紙の上を刷毛にて刷くこと。

【二六】裝就。表具完りたること。

這是鄜府中より送來的觀音像なり。

觀音佛を(二六)裝就す。

〔丑下場し酒を取る介〕〔軸を安くる介を做す〕

待我些の(二七)芸香の末子を灑け、這の袋の裏面に裝在かむ。〔屑を灑け袋に裝る介を做す〕

芸屑を和し、蠹魚を辟く、好く錦囊を把つて盛り、燕泥をして汚さしむる休れ。

〔丑酒肉を持ちて上る介〕老兒よ、我儞の(二八)尊性を曉得、裱完りし時は、就ち幾杯の(二九)燒刀兒口に到るを要了。

〔副淨〕這は本等なり、(三〇)老人家は勞勞碌碌す、未免幾杯兒を要し筋骨を(三一)和和げて纔めて好し。〔丑(三二)桌に擺べ酒を斟ぐ介〕

〔前腔〕〔丑〕老兒よ儞年老大て、兩眼糊なり、終日(三三)波波して能く幾貫の(三四)蛱を趁くるか。〔酒を(三五)貫ぐ介を做す〕美酒兩三壺。〔丑肉を把り淨の口に塞むる介〕

請ふ(三六)塊の燒羊肉を喫し、(三七)破衲被を、就地に鋪き、我儞と鴛鴦に效ひ一處に宿ねむ。〔副淨醉ふ、丑醉ひ淨を扭せ睡る介〕

と。

【二七】芸香。香高き草より作れるもの。

【二八】尊性。御性質、敬語を用ゐたるは諧謔なり。

【二九】燒刀兒。强烈なる酒。

【三〇】老人家。元來人の父母若くは老者に對する敬語なれど茲にては「吾輩」といひて自らたかぶる語。勞勞碌碌。多忙にて仕事に追はるること。

【三一】和和。和一和に同じ、骨やすめすること。(第一齣【三一】參照)

【三二】擺桌。桌上に酒肴を列ぶること。

【三三】波波。跑跑に同じ、忙しくそはそはすること。

【三四】蛱。錢なり、搜神記の青蛱蟲千母相引くの傳說に由來す。

【三五】貫。灌の意、急に飲むこと。

〔副淨〕青天白日に、怎生去つて睡覺むや。〔丑亂に扭する介〕

〔雜上る〕(三八)主考の窗櫺は須らく絳帖なるべく、(三九)分簾の炕頂は綾鑲を要す。這は繆酒鬼の鋪面了、裏面に人有る麼。

〔內驚き問ふ介〕是れ甚麼人ぞや。

〔雜〕是れ禮部(四〇)提調衙門、儞(四一)をして當官せしむる的なり。〔淨醉ひ門を開く介〕

〔雜〕(四二)我來るは別の事無し、今年大比の場中、又房を糊るを要す、(四三)提調老爺儞をして去つて錢糧を領出來らしめ、(四四)好く早早に衆人們をして上心して趲ぎ做さしむ。

〔淨〕好だ苦惱し好だ苦惱し、(四五)一春頭上に生意還曾て幾件をも做得ざるに、就ち去つて(四六)當官するを要するか。

〔雜〕(四七)說不起、儞は是れ個の當行の頭兒なり、怎麼で妝憨打呆的か。

〔扯き去く、淨、丑と說す介〕我去きて衙門中に到り見過就に來らむ、只是桌上の這の兩軸の畫は、一軸は是れ(四八)大堂鄜老爺が家の觀音像にして、一軸は是れ那の茂陵の霍相公が拿來的春容なり、倘し來り討むる時は、便ち

【三六】塊の上に「一」字を略せり。

【三七】破れたる襤褸なり。

【三八】主考。禮部の試驗委員長ともいふべき官なり。此句は主考の居室の窗格子は紅色の帛を用ゐるとの意。

【三九】分簾。主考の下に屬する試驗委員なり。炕とは溫床なり、炕頂は溫床の上部、綾は帛の名、鑲は「へりをとる」こと。以上二語試驗官の室を表具師をして修飾せしむる意を有す。

【四〇】提調。官名、尙書に屬せり、禮部中の提調の司どる所を提調衙門といふ。

【四一】原文「叫」は「使」に同じ、「して……しむる」なり。此句意、禮部の提調衙門より汝に公用ありとて出頭を申付け來れり。

【四二】余が來れるは餘の儀にあ

他に把與せよ。

〔丑〕 爾去け爾去け、(四九)我這の幾件を曉得り、就ち(五〇)打發不開とは難道不成。〔淨雜と同に下る介〕

〔丑〕 好だ沒興、(五一)剛剛喫得像意、老頭兒と(五二)叙一叙し答一答せんと要せしに、(五三)又甚麽の官に當らしむ、(五四)爾が娘の官に當らむ、爾が家の奶奶の官に當らむ。〔笑つて酒を看る介〕 還半壺を剩下して此に在り、(五五)老娘不免一齊に消繳了罷〔壺連呑むこと聲有る介を做す〕

〔末上る介〕 深閨の畫を取らむが爲に、來りて裱背の門を過ぐ。〔門を敲く介〕

〔丑笑ふ介〕 想是老兒半路より回來了。〔門を開き便ち末の頭を緊く摟く介〕 我の(五六)老親肉よ老寶貝よ、爾回得正に好し、我の酒興兒動了、兩箇去りて睡覺罷、再び(五七)妝喬る莫了。

〔四三〕 提調は官名。老爺は敬稱。錢糧。官より支給する給料、茲にては工賃のこと。

〔四四〕 好は「よく」と訓じたれど實は「急ぎ做さしむるに都合よからしめんため」の「都合よくする」の意。(第二齣〔六三〕參照) 趲做は趕做に同じ。

〔四五〕 一春頭上。一春なり。

〔四六〕 當官。公用に就く。

〔四七〕 說不起。さやうに云ふべき筋のものに非ず、さうは云はさぬ等の意。當行的頭兒。同職人中の頭分なり。

〔四八〕 大堂。堂官のこと、衙門の大官なり。

〔四九〕 此等の畫軸のことは善く承知して居る。

〔五〇〕 打發不開。區別して人にわたし得ざる意。此句意は間違はぬやうに人にわたせないことはない。

〔五一〕 剛剛。「やつと……したばかり」の意。喫得。酒を飲みたること。像意。氣の濟む程、心に滿足すること。此句は「酒だけは氣の濟む程飲んだが、たださうしたばかりで……」の意。

〔五二〕 叙一叙答一答は睦言を謂る意。

〔五三〕 「また公用とか何とか云つて來る」の意、恨む言なり。

〔五四〕 以下二句は罵る語なり、支那の俗にては「汝が母を何す」「汝が祖母を何す」等の語は皆下品なる罵語なり。

〔五五〕 老娘。自ら誇る語「このをばさん」。罷。語の助字「……でせう」「……しますまい」「……せよ」等の語意あり。

〔五六〕 愛する骨肉、愛する寶物。

〔五七〕 妝喬。僞りつくろふこと、ふりをする。(第七齣〔三〕參照)

〔末〕 (五八)啐、這の婆子は瘋了、爾眼を睜りて看よ誰か是れ爾の老兒ぞや、我是酈老爺の衙裏の畫を討むる的なり、爾の老兒は那裏に去了か、多時他に發與して裱的觀音像は、(五九)小姐供奉せむと要し、催得緊し、快く我に拿與せ去かしめよ。

〔丑桌上を指す介〕 畫麽、(六〇)畫は這裏に在り不是や、只是爾は就ち我が老兒に不是れども、便ち同に兩杯を喫み、樂一樂に去くも何ぞ妨げむや。〔末に纏る介〕

〔末〕 這是那裏んぞ說起むや、一箇の女人家が、醉得這樣なる一箇の模樣なりとは。〔丑上む末嘴を撮む末推倒し手を撒き桌の畫を取りて出づる介〕 兩手に劈開す(六一)歪纏路、一身跳出す鬼婆の門。〔下る介。〕

〔丑身を起し望む介〕 (六二)呸、元來這樣に不識趣的よ、這樣に好き熱湯湯的酒兒よ。〔頭を扭り行くこと數步する介〕 (六三)老娘の這一表人材は、是れ滯貨兒とは難道麽。〔內を指す介〕 (六四)好だ福沒し好だ福沒し。〔桌を看る介〕 畫は元來拿去了、(六五)呀、怎麽袋兒沒き的を拿著て去りしか、這の一軸の袋有る的は這裏に落在るが、想是霍家の的了、且つ拿進去き、霍家の來り討むるを待ち他に把與罷。〔又身を回

〔五八〕 啐。感歎詞の一なり、人を侮るの意あり。「默れ！」「何ッ」

〔五九〕 小姐。處女に對する敬語、お嬢さま、酈飛雲を指す。供奉。まつること。

〔六〇〕 畫はここにあるではありませんか。

〔六一〕 歪纏路。惡事の纏る路。

〔六二〕 呸。感歎詞の一。怒れる聲。

〔六三〕 以下二句の意は「自分程の容姿に手を出さぬ者はあるまいに」の意。

〔六四〕 「汝は運の惡くなる奴だ」の意、罵る語。

〔六五〕 呀。驚く語。

〔六六〕 老表。老いたる裱背匠なり。但し此語は燕昭王墓前の華表と班貍との問答に幾分の關係あり。

して罵る介」爾好だ福沒し、爾好だ福沒し。

(六六)老表千年慣れて精を作し、
阿婆老い去つて風情有り、
一軸丹青の錯に因らずんば、
怎でか鸞交兩處に成るを得むや。

第九齣　(一)駭像

〔一翦梅〕〔旦上る〕　春來何事か最も關情す、(二)花護の金鈴、繡刺の金鍼、小樓睡起めて(三)雲屏に倚り、(四)眉點ず檀心、(五)香爇く檀林。〔梅香〕春光(六)九十過ぎて將に零れむとす、半ば花の爲に嚬む、梁間の雙燕・語(七)星星、是れ情無しと道へども、卻つて情多きに似たり。露晴花を溼す一苑の香、小窗(八)裊裊として垂楊を拂ふ。

〔(九)梅〕　巍かに紫燕の鶯粟を啣むを看、又黃鸝の海棠に叫ぶを聽く。

〔旦〕　梅香よ、前日老相公が我に與へて供養的那幅觀音像は、許久して怎で院子の送進來るを見ざるか、想是未だ曾て裱得ずあらむ、爾他に一聲催す可し、(一〇)浴佛の日子將に近かむとす、我小閣中に掛在きて朝夕供養せむと要す。

〔梅〕　(一一)曉得、老院公那裏ぞや。

〔院上る〕　手に(一二)水月楊枝の像を持し、(一三)春香荳蔻の人に送與す。

〔一〕畫像におどろく。
〔二〕唐の寧王花梢に紅絲をつなぎ金鈴を綴り烏鵲の來るとき園吏に絲を曳かしめて之を追ひ以て花を護りしことあり。小樓。婦女の室なり、小閣も同じ。
〔三〕雲屏。雲母の屏風。
〔四〕檀木を燒いたる黛を眉につくること。
〔五〕佛に奉仕すること。
〔六〕九十。春九十日。
〔七〕星星。きれぎれなること。
〔八〕裊裊。なよめくこと。
〔九〕梅は梅香の省略、即ち侍女、斯く省略すること多し。
〔一〇〕浴佛日子。佛を洗ふ日、

〔梅〕院公よ、小姐我をして儞に問はしむ、日前老相公が儞に分付け裱的觀音像は、可に曾て停當ひしか不曾しか、目下就に供奉せむと(一四)要哩。

〔院〕(一五)裱得停當ひ此に在り、正に小姐に交與さんと要せしが、儞を煩はす送進去罷。〔梅畫を接けて送る介〕

〔旦接くる介〕收下了、院子をして去かしめ罷。

〔院〕理會得。〔下る介〕

〔旦〕梅香よ、這軸畫は(一六)尋常に比べられず、乃是菩薩の示現なれば、須要虔淨なるべし、儞香を焚起來可し、我先づ展き拜過むを待ち、然る後供奉し纔めて是し。〔梅・香を焚き畫を開く、旦駭き唱ふ介〕

〔不是路〕瞥見る丹青、(一七)那裏にか是れ寶月珠瓔紫竹林に坐さむや、(一八)端詳審かにするに、(一九)玉題金蹤、又(二〇)吳綾をば幀け、(二一)點綴す湘江幅幅裙、嬌嬈甚だしく、(二二)喬妝詐扮風韻多く、好だ平康の笑を賣る人に似たり。好だ奇怪なり、原來觀音像に不是、是れ那一家かの女娘の春容、胡亂に拿來了。

〔(二三)小旦指す介〕小姐よ、儞看よ那の女娘と同に蝶を撲的人兒は、好だ畫的

四月八日。

【一一】曉得。理會得に同じ。「承知いたしました」の意。

【一二】水月楊枝像。觀音の像。

【一三】春香荳蔻人。處女に喩ふ。荳蔻は元草の名、含胎花ともいふ、杜牧の詩に、娉娉嬝嬝十三餘、荳蔻梢頭二月初の句あり。

【一四】原文要と哩と續けるに非す、哩に語の助字。「來るよ」「來たれ」の「よ」「れ」の如きもの。

【一五】裱得停當。表具し完りたること。

【一六】不比尋常。普通の物に同じからず。

【一七】觀音の尊像畫中に見出されずとの意。紫竹林。觀音の住處。

【一八】端詳。細に觀察すること。

【一九】畫幅の上邊を玉にて作り軸を金にて作れること。

て(二四)標致しからざらむや。

又郎君の(二五)俊なる有りて、紅衫翠袖肩相並べり。

〔旦〕(二六)羞人答答的、一箇の女娘家にして、怎麼那の書生と同に一搭兒にて要戲るか。那ぞ這般なる行徑、這般なる行徑有らむ。

〔前腔〕〔小旦〕(二七)水墨の精神、也楊枝水月の人に像ず。〔(二八)背きて旦を指す介〕

(二九)女兒の身、毫端の紙上と、相厮に映ず。

〔身を回す介〕小姐よ、這の畫上の女娘(三〇)呵、(三一)儞と差別せむと要するも些些も半星すら沒し。

〔旦再び看る介〕只怕是は那箇か手に隨せて畫ける的、偶然相像たり、未だ必しも心有らざらむ。

〔小旦〕

(三二)分明甚し、(三三)黃を安じ翠を點ずること般般稱ふ、那裏にか(三四)稿沒きの麗兒筆に信せて成ること有

【一〇】吳綾。吳に產する帛。

【一一】美裙の長きに喩ふ、李群玉の詩に裙袍六幅湘江水、彷彿巫山一段雲の句あり。

【一二】喬妝詐扮。巧みなる化粧、媚びたるさま。

【一三】小旦は俳優の役名、ここにては梅香に扮せる者。

【一四】標致。美貌。

【一五】俊。美しく氣高きこと、すぐれたること。

【一六】答答的は羞かしき氣持ちを强め表はす語。

【一七】水墨。畫なり、畫は觀音像とは次に異れりとの意。

【一八】背。相手に背を向くること、舞臺にて此の動作を爲すは相手に秘密にする意なり。

【一九】汝の身と紙上の畫と相對すの意、女兒身は小姐の姿をいふ。毫端は畫なり。

【二〇】呵。語の助字。

【二一】汝と毫末の差無し。

【二二】意思あきらかなること。

【二三】安黃點翠。彩色を施すこと、卽ち畫く意。般般稱。一つ一つ皆適切なること。

【二四】稿。モデルの意。

【二五】畫上に落款ぜり。

【二六】來は看の助字。

【二七】妝次は女子に對する敬語、男子に對する机下の如し。

【二八】圖書。印なり。珊瑚暈。珊瑚色の一團、印の色をいふ。

【二九】行雲飛雲共に支那にては之を親しみ呼ぶとき雲娘といふは普通の俗なり。

【三〇】眉峯。眉なり。(第六齣【三六】參照)螺黛。長眉を作るための眉ずみ、螺子黛は波斯產なりといふ。匀。色彩ほんのりと平均せること。

【三一】春纖。女子の手指。約斜領。えりをつめること。

【三二】笑窪のあたりに紅色を呈すること。

らむや。

〔旦〕呀、(三五)上面に還落的欵有り、待我(三六)看來。〔讀む介〕「茂陵の霍都梁寫して雲娘(三七)妝次に贈る」と。我秋波にて稔かにす、(三八)圖書一抹珊瑚の暈、上に霍生の名姓有り、又雲娘の爲に圖して贈ると。

〔小旦〕也奇なり、也奇なり、(三九)怎生也雲娘と叫做るか、小姐儞看よ。〔畫を指す介〕

〔紅衲襖〕〔小旦〕儞看よ他(四〇)眉峯に點ずる螺黛匀ふを、儞看よ他(四一)春纖を露はし斜領を約するを、儞看よ(四二)他顋渦に滿ちて紅暈生ずるを、儞看よ他蒼苔に立ちて蓮步穩かなるを、一樣兒を(四三)包彈せんと要するも半星すら沒く、風流を逞しうするに倒つて(四四)十分的可憎有り、可喜は那の花を尋ぬる蛺蝶深深にして也、又一對の黃鸝兒柳を穿ちて鳴く。

〔前腔〕〔旦〕(四五)賺陽臺に雨雲を行ふに不是る莫きか、(四六)謊天台劉阮の情に不是る莫きか、(四七)倩女を離了たる魂に不是る莫きか、(四八)東家に效了逞うするに不是る莫きか、怎で生生的(四九)卓女の琴に打合上るか、我をして暗煎煎と

【四三】包彈。批難すること。宋の包拯臺官と爲り過罪は必ず彈劾して貴紳を恐れず人呼で闞羅包老といふ、包彈の語之に由來す。

【四四】憎い程の風情があるとの意、可憎は眞の憎きに非ず、その意むしろ反對なり。蛺蝶深深。蝶が花の梢の奥深く飛入るをいふ。

【四五】賺陽臺。假陽臺といふが如し、實の陽臺に非ずして假の陽臺なり、宋玉の賦に、楚の襄王雲夢澤に遊び神女を夢む曰く妾は巫山之陽高丘之阻に在り朝朝暮暮陽臺の下とあり。(第四齣【七一】參照)

【四六】謊天台。假天台といふが如し。(第六齣【五一】參照)

【四七】倩女。唐の張鎰の女倩娘幼にして從兄王宙に許嫁す、長ずるに及び張鎰は倩娘を他に嫁せしめんとす王宙恨み京

して這の啞謎兒をば忖り難からしむ、(五〇)自ら曾て馬上牆頭に在りて也、紅粉些兒一線の春をすら露了さざりき。

梅香よ、本待要這の畫をば院子に發與し去きて換へしめて纔めて是けれど、只是畫得て些し奇快なる有れば、我再び仔細に玩玩を待て。

〔小旦〕換得を消ゐず、小姐留了、自己の春容と當做さば正に好し。

〔旦〕只是一箇の人兒多了、恐らくは爹媽看見なば、當に穩便ならざるべし。

〔(五一)梅笑ふ介〕若し老相公老夫人(五二)に看せなば、眞箇に那箇人兒多了、若是小姐自己看なば、只怕らくは正に好く多からざらむ哩。

〔旦〕胡說休れ。

〔尾聲〕東風暗に與めに春信を傳へ、好だ心情を撩撥して忍び難し、且つ細に小閣の窗紗に向いて(五三)笑顰を勸へむ。

に赴く途中倩女追ひ來り共に夫婦と爲り蜀に居ること五年にして二子を生めり、後王宙夫婦歸りて張鎰の家に至り謝す、張鎰云ふ吾女は病むこと數年閨中に在りて外に出でずと、既にして兩女相見え合して一體となれり。

【四八】孟子に踰東家牆而摟其處子の句あり、男女の私通に喩ふ。

【四九】司馬相如琴を彈じ卓文君を挑める故事に由來す。(第二齣【四】參照)

【五〇】未だ自己の顏を人の前にさらしたることなければ人は我が顏を知る筈なしとの意なり。(元曲牆頭馬上に因む)

【五一】梅。梅香なり、此齣にては小旦の扮せる者。

【五二】に、原文「與」なり、茲にては「ために」と訓するは不適切なれば斯くせり、文法上には同一の類別なり。

【五三】勸笑顰。畫像を批評玩賞する意。

春風圖畫若し容を爲さば、
笑を帶び顰を含む不語の中、
最も是れ芳心那ぞ似るを得むや、
夢魂應に入るべし百花の叢。

第十齣　防胡

〔點絳脣〕〔末〕(一)戎服にて衆を率ゐて上る〕　(二)電掣き風行く、(三)高牙專閫、(四)丹心耿たり、那の羯狗の橫行を忍らざらむや、看よ怒を發して冠頂を沖くを。

〔集唐〕　(五)穰苴の門戶登壇に慣れ、一劍風に當つて白日看る、但龍城をして飛將在らしめば、胡馬をして陰山を渡らしむる莫し。下官は天雄節度使賈南仲是也、(六)家世は邢州、功を(七)邊徼に立て、聖恩簡任して、天雄に節鎭たり、丹心・斗の如く、每に(八)革に裹みて以て知に酬いむことを思ふ、(九)赤羽・天を薰し、(一〇)妖氛の座を犯すを看るに忍びむや、耐へ巨し安祿山這厮、本是れ胡奴にして、濫に天眷を邀へ、特に(一一)飽鷹の颺去するのみならず、公然と(一二)瘈狗人を噬む、聞得く兵を(一三)范陽に起し、連りに州郡を破ると、下官は只得兵を整へ馬に秣ひ、闕に赴き王に勤めむ、我想ふに(一四)潼關には哥舒老將軍有り彼に在りて把守る、定然牢固ならむ、只恐る這厮(安祿山)武牢の小路より(一五)商南を抄襲はば、長安未だ震動を免れざるを、衆將士們よ、儞

【一】戎服。軍裝。
【二】迅速なる行動に喩ふ。
【三】高牙。高位の人。專閫。地方の將軍。
【四】赤心胸に燃ゆること。羯狗。胡人を罵る語。
【五】穰苴。齊の景公の將田穰苴。登壇。將に拜せらるること、漢の韓信の故事に由來す。
【六】鄉里は邢州、邢州は今の直隸省に在り。
【七】邊徼。邊境の守備。
【八】裹革。戰場にて死すること、屍を馬革に裹むなり。
【九】戰亂の氣みなぎる。
【一〇】惡氣帝座を犯すに忍びず。

(二六)營壘を紮住し武牢關口に在る可し、范陽の一人一馬すら闖將過去くを許縱さず、烽火を傳來上心して探看り、(二七)郴鈴器械は、務要整齊へよ、但賊騎の來り沖くに遇はば、便ち勇を奮つて截殺を行へ、如し(二八)玩縮む有らば、軍法にて重く處せむ。

〔衆〕(二九)得令。

〔錦纏道〕〔末〕 儞看西京を遍くし烽火に照らさる、我心中平かならず、這の(三〇)鼠子敢て縱橫し、漁陽より公然穴を出でて兵を弄し、常山を犯し生靈を攻陷し、太原を賺し、又佯りて(三一)射生を獻ずといふ、(三二)惡貫已に充盈し、(三三)師中の老臣を慚媿殺む、我をして義憤胸襟に滿たしめ、冠直上(三四)皤然たり雙鬢、待兇を除き革に裹み君恩に報いむ。

前面は就是武牢關了、(三五)搶上去て營を紮け。

【二】飽食したる鷹の逃げ去ること、恩を知らぬ意。
【三】瘈狗。狂犬。
【三】范陽。今の直隸省に在り。
【四】潼關。今の陝西省に在り。哥舒。人の姓、もと胡人なるが唐に歸屬す、沮及其子道元、孫翰三代皆高位に在り、ここにては翰を指す。
【五】南南。今の陝西省に在り。
【六】紮住營壘。軍陣を設くること。
【七】拍子木、鈴、及兵器。
【八】玩縮。努力せずして身を惜むこと。
【九】得令。御命令に遵ふとの意。
【一〇】鼠子。罵詈なり、安祿山を指す。
【一一】安祿山反せんとして佯りて馬三千匹に射手を附し河南に送らんとせり。
【一二】積惡の多きこと、書經に商罪貫盈天命誅之の語あり。
【一三】師中老臣。賈南仲自ら指す。慚媿殺。甚だしく慚づること。
【一四】皤然。白きこと、髮白むなり。除兇。敵を討滅すること。裹革。吾が身を戰場に棄つるの覺悟するなり。
【一五】搶上去。競ひ進む意。
【一六】各隊の軍卒みな優れたりとの意。
【一七】行軍の狀。
【一八】鐵桶。堅固なるに喩ふ。如山鎭。押へて動かざること、斷不放云云。決して賊をして狂暴をつくさしめずとの意。
【一九】函崤。函谷關。

〔衆〕得令。

〔朱奴兒犯〕〔衆〕看る(二六)一隊隊貔貅斯稱ひ、(二七)一程程風飜り浪滾ぶを、潼關の大隊は哥舒領ねる、武牢關の(二八)鐵桶をば山の如く鎭し、營を連ね烽を傳へ明るきを要す、斷じて賊奴を放ち狂逞せしめず。

三たび漁陽に戍し再び遼を渡り、
騂弓臂に在り箭・腰に橫たふ、
白馬將軍頻に敵を破り、
胡騎をして(二九)函崤を渡らしむるを肯せむや。

第十一齣　寫箋

〔步步嬌〕〔雙蝴蝶飛び上り舞ふ介〕〔旦徐歩して上る〕　甚の風兒ぞ花を吹得零亂すは、儞看雙蝶(一)依稀として見る。

呀、這の一對の蝴蝶兒、怎麽飛得此の如く好きか、只管奴家の衣上に在りて撲來。

爲何的面を撲ち(二)雲鬢を掠むるか。

又花樹上へ上り花を探りに去了。

(三)紅紫の梢頭に、恁般も留戀る。

〔花下にて仰ぎ看又身を回す介を作す〕　呀、怎麽又裙兒上に在りて、旋繞るか。

去らむと欲して又飛び還り、(四)粉鬚兒を將て(五)裙汊の線を釘住す。

〔蝶飛びて桌上に在り〕〔旦桌上にて撲打不着遂に睡る蝶下る介〕

〔梅上る介〕　悄かに歩む香閨の内、(六)巫山夢未だ醒めず。呀、小姐は纔(七)

〔一〕依稀。彷彿として。
〔二〕雲鬢。婦女の髪、杜甫の詩に香霧雲鬢濕の句あり。
〔三〕以下二句の意は「花の枝にあのやうに慕ひ寄る」
〔四〕粉鬚兒。蝶の舌。
〔五〕裙汊線。汊は釵とも書く、婦人下裳の飾なり。釘住。刺すこと。
〔六〕夢といはんが爲め巫山と加へたり、巫山の二字重きを置かず。
〔七〕梳洗。髪を梳き面を洗ふ。
〔八〕化粧臺に頭をもたせて睡る。
〔九〕瑣窓。窓格子に紋様を鑽めたるもの、但し茲にては單に窓のことと解して可なり。

梳洗了に、緣何(今)睡りて(八)妝臺上に在りや、待我輕輕に他を喚醒まし、鍼指を做さむ。〔輕く咳して喚ぶ介〕〔旦徐ろに起き唱ふ介〕

〔風馬兒〕〔旦〕　(九)瑣窗に午夢し線拈るに慵く、(一〇)心頭に事忒だ廉纖。

〔起坐する介〕　梅香よ、檐前は是れ甚麽の響ぞや。〔梅香〕

晴檐の(一一)鐵馬風無くして轉るは、花を啄む小鳥の被めに弄得られて(一二)響珊珊。

〔減字木蘭花〕　春光漸く老い、流鶯は人の煩惱むに管せず、細雨窗紗、深巷清晨に杏花を賣る。

〔梅〕　眉峯雙び蹙み、畫中に箇の人玉の如き有り、檐前に(一三)小立み、燕歸來るを待ちて始めて簾を下す。

〔旦〕　梅香よ、我這兩日身子些しく不快なる有り、剛纔夢中にて、(一四)恍恍惚惚として、是れ花樹の下に在りて那の粉蝶兒を撲打、茶蘼の刺の被めに繡裙を挂住められしが像くにて、閃了一閃て始めて驚き醒了。

〔梅〕　(一五)是了是了、前日那幅春容を錯了、這の許多光景上面に在る有り、小姐眼中に見了、心中に想著、故に此夢有り、知らず此夢は可に(一六)那の紅衫の人兒と一答に在りし麽。

〔旦〕　胡說莫れ、儞且つ畫を取り過來れ、待我再に細かに看一看む。

香閨の香に同じく形容の語に過ぎず。線慵拈。裁縫刺繡するを好まずとの意。
〔一〇〕頭腦に雜多の惱みあること、廉纖は小事の煩はしきこと、くだくだしきこと。
〔一一〕鐵馬。檐に釣り風吹けば音するもの。
〔一二〕珊珊。音なり。
〔一三〕小立。畫中婦人の立てること。
〔一四〕矇朧たること。
〔一五〕「ああさうでした」物を思ひ出したる語。
〔一六〕那紅衫人兒。畫中の男子を指す。

〔梅〕 理會得。

〔畫を取る介〕 小姐よ畫は此に在り。〔旦畫を取りて細かに看る介〕

〔黄鶯兒〕〔旦〕 (一七)心事忒だ無端、春愁を惹くは這の筆尖の爲なり、(一八)啞、丹青は眞と贋とを問不出、將偶然と爲すも、如何にして像得這般ならむや。

梅香よ鏡を取り來れ。〔小旦鏡を取る介〕

〔旦鏡を看又畫を看て笑ふ介〕 這の畫中の女娘は、眞箇に我に像不過なり、只這の顯邊に箇の(一九)紅印兒多了のみ。

多きは只多し粉顯邊一點の桃花綻、若し憐みを爲し、倘し(二〇)氣兒をば呵著れば、他便ち飛下りて香肩を並べむ。

〔梅〕 看よ那の鶯兒と一雙の粉蝶兒とは、怎生畫得這樣な活現たるか。

〔鶯啼序〕〔小旦〕 鶯啼(二一)恰恰と耳邊に到るが似く、那の粉蝶香に酣ひて雙翅軟く、花叢に入るは箇の兒郎の若し、一般樣なる(二二)粉撲兒なり衣香人面。小姐よ、這の畫上の兩箇人は、還是夫妻一對か、還是(二三)秦樓楚館に笑を買ひ歡を追ふ的か、若し是れ(二四)好人家ならば、此の如く(二五)喬模喬樣しき妝束する該ならず、若し是れ(二六)乍ち會へる的ならば、此の如く(二七)熟落する該な

【一七】 心の中煩ひてとりとめなきこと。
【一八】 啞。感歎詞なり。丹青。畫なり。
【一九】 紅印兒。赤き頰紅なり、妓女多く之を施す。
【二〇】 把氣兒呵著。氣合をかけること。
【二一】 恰恰。音チヤチヤ、鳥の聲。
【二二】 粉撲兒。畫の粉本、モデル。(第六齣【一九】參照)
【二三】 衣香人面。姿態と面貌。
【二四】 秦樓楚館。妓樓の意なり。
【二五】 好人家。良家の人。
【二六】 喬模喬樣。派出にわざとらしく化粧すること、商賣女の姿。
【二七】 乍會的。一時會ひし人。
【二八】 熟落。親しみあふこと。
【二九】 燕燕于歸。結婚なり。
【二〇】 腼腆。羞ぢらふこと。
【二一】 (第四齣【六六】參照)
【二二】 呵。語の助字。
【二三】 其の美男なること古の潘岳に同じなりとの意。(第二齣【三八】參照)
【二四】 女兒們とは複數なれど畫中の一女子を指す。
【二五】 家常は通常の如くとの意。此の句は「あたりまへの如き態度にて羞ぢもせず男に親める」意。
【二六】 平白地。かくす所なく、

らず。

若し(二八)燕燕于歸に不是んば、怎で便ち分毫の(二九)腼腆沒からむや、是れ(三〇)横塘野合の雙鴛とは難道。

小姐よ、這の畫上の郎君(三一)は呵。

〔集賢賓〕 儞看よ他は烏紗の小帽紅杏の衫、那の人と笑つて花前に立つ、(三二)果を擲ぐる香車も應に添しめざるべし。

〔旦〕

只是(三三)女兒們は、忒だ(三四)家常に熟慣し、恁般も活現して、(三五)平白地に陽臺を攔占す。

那の落欵的は霍都梁と叫做、筆蹟尚新らし、眼前必ず這箇人兒有る的。

我(三六)心自ら轉らすに、分明に霍郎の(三七)姓字有りて雲鬟を描寫したるならむ。

〔旦〕 我這幅畫を看るに、半ば假に半ば眞に、意有り意無く、心中著實解し難し、且喜桌兒の上に(三八)文房四寶此に在る有り、不免一首の詞を寫下、聊か幽悶を寫さ則箇。〔硯を磨り箋筆を取り寫むる介〕

【二八】 燕燕于歸。結婚なり。
【二九】 腼腆。羞ぢらふこと。
【三〇】 (第四齣【六六】參照)
【三一】 呵。語の助字。
【三二】 其の美男なること古の潘岳に同じなりとの意。(第二齣【三八】參照)
【三三】 女兒們とは複數なれど畫中の一女子を指す。
【三四】 家常は通常の如くとの意。此の句は「あたりまへの如き態度にて羞ぢもせず男に親める」意。
【三五】 平白地。かくす所なく、

〔啼鶯兒〕〔旦〕(三九)烏絲一幅金粉の箋、春心委的に(四〇)懨煎たり、(四一)並も織錦廻文に不是、那些個(四二)題紅宮怨ならむや、心情を寫す、(四三)一紙尖愁にして、眼睛を蕩し片時の美滿、(四四)悶懨懨たり。〔上を看る介〕又聽く梁間の春燕、不住的語(四五)呢喃たるを。〔寫め完り自ら念む介〕〔醉桃源〕「風吹き雨過ぎ百花殘れ、香閨春夢寒し、起來て力無く欄杆に倚り、丹青に眼を放ちて看れば、翠袖を揚げ、紅衫を伴にし、鶯嬌めき(四六)蝶也愁なり、幾時か相會して巫山に在らむ、麗兒畫きて一般。」(四七)韋曲の飛雲題す。我が這の一首の詞は、也這の畫に(四八)抵得過了。〔桌に放く介〕

〔梅香上より下まで看る介を做す〕好だ古怪、怎で梁上の燕子兒は、只是這樣に鏡臺前を望みて飛來り飛去るか、(四九)往時と同からず。〔往きて撲

平氣にて。陽臺。(第九齣【四五】參照)。攔占。ふさぎ占むること。

【三六】心中にてはかり知ること。

【三七】霍といふ姓の男があつて女貌をゑがきたるならん。雲鬟は婦人の髮、ここにては女子の像をいふ。

【三八】文房四寶。筆墨紙硯。

【三九】烏絲。格子ある紙。

【四〇】懨煎。心惱みていらいらすること。

【四一】並字の下に打消語あるときは「決して」の意となる。織錦廻文。前秦竇滔の妻蘇蕙字は若蘭、文才あり、滔妾を納れて蕙と居らざるや蕙錦を織り廻文璇璣圖詩を作りて滔に贈れり。此は妻が夫に宛つる詞には非ずとの意。

【四二】題紅宮怨。唐の僖宗の時于祐御溝にて詩を題せる紅葉を拾ひ自ら又葉に詩を題して御溝の上流に投ぜしに宮女韓氏之を拾へり、後韓氏于祐に嫁し偶二人藏する所の紅葉を示し奇遇に驚けり、上文は相思の人に贈るべきものならずとの意。

【四三】紙上に記したる文意のなまめきておろかし。

【四四】懨懨。心はれやかならざること。

【四五】呢喃。囁る聲。

【四六】蝶に痴態あるの意、戀に醉へる蝶の狀をいふ。

【四七】此の語は自筆の詞の末に自ら其の名を署したるなり。

【四八】「抵得……過了」匹敵するを得、遜色無き意。

【四九】以前には斯樣なことは無かつた。

【五〇】殘泥。燕の含み來れる泥の餘。妝盒。化粧道具の小箱。

【五一】只得。「……する外無し」

つ介を作す」這の(五〇)殘泥を把つて妝盒をば都て點汚了、呀、怎麼小姐の題的這の箋兒をば啣み去了か。〔叫ぶ介〕燕子よ轉來よ轉來よ、我が小姐の箋を還せ。

〔旦笑ふ介〕癡なる丫頭よ、這箇燕子怎麼か人の言語を曉得むや、(五一)只得他が隨にして罷了。

〔貓兒墜〕〔旦〕(五二)飛飛燕子、(五三)雙尾妝鈿を貼け、啣み去る多情一片の箋、(五四)香泥零落ち誰が邊にか向ふ。

〔梅〕

(五五)天天よ、玄鳥の高媒、(五六)輻湊の姻緣に不是る莫きか。

〔尾聲〕〔梅〕小庭且つ梨花を把つて掩ふ。〔巢を指す介〕燕子よ燕子よ、爾免不得巢畔に還來らむ、我好く(五七)紅絲を拴上了、爾に綵箋を索むる(人)を問はむ。

〔小旦〕小姐よ、我筆硯を收拾て先づ進去かむ、爾可就房中に到り歇歇、(五八)紅豆且つ調ふ鸚鵡粒、(五九)雪花酌むを待つ兎兒班。〔下る介〕

〔旦斜視して進る介〕(六〇)咳、適間這の(六一)妮子此に在りて、我が心事說出づるに好からざりき。〔笑ふ介〕果是那の畫上の紅衫の郎君は、委實に可人なり。

の意。まあ放置つておくより仕方がないの意。

【五一】飛飛。飛べる樣を形容せる語。

【五三】燕尾の青色に光れるをいふ。

【五四】香泥。燕の含む泥なり、花散る時の泥土なれば香泥といふ、但し此句は箋を指す。

【五五】天天。天に向つて祈る語。

【五六】玄鳥。燕なり。

【五七】輻湊姻緣。夫婦と爲る緣。

【五八】唐の宰相張嘉正壻を得んと欲し五女をして絲を幔前に持たしめ之を牽かしめて壻を定む、郭元振紅絲を牽き第三女を得たり。此句は燕を紅絲として壻を得んとの意。

【五九】紅豆は相思豆とも云ひ戀情を意味する物にして、又鸚鵡粒と同一なり、而して又實に飯のことにかけたる語なり、此句飯の準備を爲す意。

〔四季花〕 畫裏に神仙に遇ひ、眉稜の上顯窩の畔を見れば、風韻翩翩たり、天然たり、(六一)春羅の衫子紅杏單に、香肩(六二)那の人半邊に偎り、兩に眸を廻らし(六三)情萬千、蝶・錦翅を飛ばし、鶯・翠烟に啼き、遊絲小掛る(六四)雙鳳釵、光景・眼前に在り、那些か(六五)陽臺雲現するを要せむ、縱しや山遠く水遠く人遠くとも、畫は便ち遠きに非ず。

〔浣溪紗〕 (六六)麟髓調へ、(六七)霜毫展べ、方纔に點筆して箋に題したるに、這の巢間の小燕忒だ(六八)刁鑽く、驀忽地喇み去りて半天に飛びぬ、天天は未だ必ずしも方便を行はずして、便ち泥邊水邊に落在む、那些御溝の紅葉春烟に蕩くとも、(六九)只飛絮浮萍と一樣に牽くに落得む。

〔柰子花〕 (七一)三三春月日長き天は、往常時すら兀自懨煎かりしに、那ぞ禁へむ閒事恁般も牽挽くに、畫中の人幾時か相見えむ、見ゆるに待り、纔めて能く般般を說與らむ。

繡屏斜に立ち正に魂を銷す、
侍女燈を移して閑門を掩ふ、

【五九】雪花。茶の花なり、兎兒班の班は斑なり、茶の色をいふ。此句は茶を準備することをいふ。

【六〇】咳。歎息の語。

【六一】妮子。下女なり、這妮子と云へるは「この下女めが」と罵る意。

【六二】春羅。絹織物の名。

【六三】那人。畫中の女子を指す。

【六四】情愛無極なること。

【六五】女子の釵金銀色を鑄め鳳頭の飾あり。

【六六】(第九齣〔四五〕參照)

【六七】麟髓。筆の軸。

【六八】霜毫。筆の毛。

【六九】刁鑽。狡猾に僞多きこと(第四齣參照)

【七〇】絮の如く萍の如く行衞も知らずなり了ること。落得は結末を告ぐるの意。

【七一】三三。春九十日のこと。以下三句、日長き春は以前すら心を惱したるに今春は更に餘事加はりてわが心を牽きなやますの意。

燕子歸らず花雨に著り、
春風應に自ら黃昏を怨むべし。

第十二齣　拾箋

〔番卜算〕〔生〕　桃李曲江灣り、(一)浪煖にして魚將に變ぜむとすれど、期を愆へて未だ(二)甘泉に奏するに便ならず、小歩して心情を遣る。

〔菩薩蠻〕　奈何ともす可き無し花落ち去るを、歩みて小橋人盡くる處を過ぐれば、(三)二十四番の風、鶯啼いて落紅を怨む。遠山・青・數ふ可し、取つて眉兒の譜と作さむ、蝴蝶怎生忙しき、天晴れ花草香し。小生前日雲娘の爲に小像を寫下、十分得意なりしに、誰か想はむ拿去き裝裱せるに、一箇の潦倒的匠人の被めに、錯つて別處に送到り去られ、倒つて一幅の水墨(四)大士を取了て來らむとは、那の像は到是吳道子の眞蹟なり、咳、小生の筆蹟は吳道子に比不上と雖然、但雲娘の樣子は、恐怕は(五)南海水月と爭差多からじ、(六)這椿事也笑ふ可し、那裏に去き尋訪しめむや、只得他の繇にせむ、只是試期尚遠く、客路無聊なれば、不免悄地に曲江の堤上に去き、一回散歩せばや。多少に是れ好からむ。

【一】河津また龍門と名く、桃咲く頃水增す時魚躍つて之を過ぎ龍と爲るとの傳說あり。又此句は試驗に及第し進士と爲るの意あり。

【二】甘泉。宮殿の名、此句は試期延引のため未だ及第謁見の光榮なしとの意。

【三】初春より初夏にかけ吹く風、徐俯の詩に一百五日寒食雨、二十四番花信風の句あり。

【四】大士。觀音をいふ。

【五】南海水月。これ又觀音の意。

【六】這椿事。這件事に同じ、椿は陪伴詞なり、吾國俗に誤つて椿事と書し珍事の意とするは非なり。只得繇他。自己

〔步步嬌〕〔生〕　柳絲綰ぎ盡さず東風の怨、蘭露。啼眼の如し、(七)青青たり燕尾帘、(八)壺內の眞珠鶴裘を解きて換ふ可し、悄歩す曲江の烟、(九)落紅一陣陣春光に餞するを看る。

我想ふに那軸畫は、雲娘を描寫し眞に逼れり、就ひ別人錯り去るとも、斷じて這の一箇の標致き女子は以て借用す可き沒有、(一〇)縱や收了るも也是枉然なり、只是別樣の畫に錯らずして、偏一幅の觀音に錯れり、如今は他(行雲)就ち小閣中に掛在、香を焚き水を換ふ、也著實趣有り。

〔醉扶歸〕　我(一一)工夫を破り壚に當るの豔を描寫出しに、不做美的は(一二)花容をば手に信せて傳へぬ。敢則是れ(一三)丰神出脫的忒だ天然なれば、因此上他は化して雲雨と爲り陽臺の畔に去りつらむ、春風桃李美人の顏を差迭了、倒つて(一四)普陀水月觀音の現するに換得ぬ。

此に來る是れ曲江の邊了、儞看新晴の後、風景怎麼這等に(一五)人を撩す也。

〔皂羅袍〕　韋曲の花人面の如し、儞看胭脂雨潤ひ、(一六)翠荇風牽く、幾時か(一七)馬蹄に杏花の烟を碎踏し、(一八)蛾眉を重ねて芙蓉の面に畫かむ。

〔天を望む介〕　這の燕子飛得好だ奇なり、怎生只管我が頭直上に、幌き來り

【七】酒亭の布旗は青色にして下方二つに分れ燕尾の如し。

【八】第四齣〔四二〕參照。

【九】落紅。落花。一陣陣は一陣一陣なり、一回一回の意。

【一〇】たとひ所持するとも何の役にも立たぬ。

【一一】破工夫。時を都合すること、暇をつくること。當壚豔。卓文君の故事に出づ。(第六齣〔六〇〕參照)

【一二】花容。美人の顏、卽ち畫を指す。

【一三】丰神。風采精神。出脫。そのまま拔け出づるが如く畫けること。

【一四】普陀。普陀山、梵名補陀落迦、觀音の座所なり。

【一五】撩人。人の心を感動せしの畫きたる行雲娘の像の如何爲りしや知れねど、爲るやうに爲すより外仕方無しとの意。

幌き去り、(一六)認熟的が似く一般なるか。
飛飛燕子、風に隨ひて往還す、那の紅襟小尾、楊花を貼けて舞旋る、何が爲に風に迎ひて猩紅の瓣を掉下すか。
〔上より下を視る介を作す〕何が爲に一撮の紅毛衣を掉下し來了か。
〔拾ひ看る介〕呀、毛衣に不是、是れ一片の紅葉大的箋兒にして、許多の蠅頭的細字を寫了て上面に在り、待我看來。〔念む介を作す〕
〔前の醉桃源の(一〇)詞を念む介〕呀、細かに這の詞を看るに、是れ春容の畫を收了たる的なるが像し、怎生語氣筆法、件件精細なるか、分明に是れ箇の女兒家なる模樣。
〔好姐姐〕這の(一一)霞箋、(一二)香閨の妙塡、明かに(一三)丹青を收管せるを說出で、(一四)黃を抽き白を數ふ、就ひ(一五)班姬たりとも怎でか先を讓らむ。
咳、我剛纔說へり天下未だ必ずしも行雲に像的人兒は有らざらむと。〔箋をば指す介〕那ぞ知道む就ち一箇此に在りとは、那の末句に麗兒畫きて一般と說へるは、就是一紙の(一六)供狀了、(一七)霍都梁、霍都梁、儞好生に(一八)消遣し難き也。

むること。
【一六】翠荇。草名、あささ。
【一七】進士に及第する意。(第一齣〔三〕參照)
【一八】妓行雲を妻と爲す意。(第六齣〔四六〕參照)「重れて」とあるは前に一回相像を畫きし故なり。芙蓉面。美人。
【一九】余を見知れる者の如し。
【二〇】詞は「ことば」に非ず韻文の一種、第十一齣參照。
【二一】霞箋。霞模樣を施したる箋。
【二二】香閨は婦女のことをいふ。妙塡。詞を作るを塡詞といふ、故に妙塡とは妙作の意。
【二三】丹青は畫、收管は手に入れて居ること。
【二四】畫の批評をすること。
【二五】班姬。東漢の班超の妹なり。曹世叔に嫁ぎしが故に曹大家ともいふ、女流として文名著るし。

消遣し難し、(一九)打熱的風流の情閃くを怕れ、這の(二〇)扯淡的相思の症轉た添る。
(二一)且つ住めむ、昨日行雲は春容を錯失了るが爲に、早間は尙那裏に在りて(二二)納悶めり、如今疾忙回り去き、他が與めに這の畫は下落有了と說はでは不免、(さすれば他が煩惱を免得む。〔轉りて行く介〕正に是れ、(二三)春を踏みて覺えず來時の晩きを、衣香るが爲著に蝶を惹いて歸る。〔門を扣く介を作す〕門を開け門を開け。
〔馬蹄花〕〔小旦〕(二四)剝啄す百花の間、知る是れ(二五)檀郎轉ると。
〔門を開き生進り見ゆる介を作す〕霍郎よ、儞早間出去き、那裏に在りて行動來か。
〔生〕雲娘よ、早起曲江堤上に在りて步一步たり。
〔江兒水〕〔生〕我悄地に春を尋ねて芳草の邊に去けり。
〔小旦〕曲江の光景如何にぞや。
〔生〕那の光景甚だ好し。
見る(二六)輕盈水を掠めて烏衣燕有り、春愁小語し相盼むが如し。
〔小旦〕那の燕子を見て怎麼なりしか。〔生〕

【一九】供狀。口供書。
【二〇】自らあざける語、「まあ私は私は」等の意なり。
【二一】嬝消遣。煩悶の經えぬこと、心の中のびやかに爲りがたき意。
【二二】行雲との熱したる愛情の減ずる恐るる意。
【二三】扯淡。無味なること、出まかせなる意。添。加はること。
【二四】且住。「その事は置いて」の意。
【二五】納悶。氣をくさらせること。
【二六】踏春。春野の遊び。
【二七】剝啄。門を打つ音。
【二八】檀郎。情人なり。(第六齣〔完〕參照)
【二九】輕盈。嬌纖弱なること。烏衣は燕なり、烏衣燕も亦同じ。
【三〇】原文「而」。
【三一】莫要。この二字にて「勿

花を啄むが爲に花箋片を褪下せり。

這の一幅箋を落下して此に在り、儞詞上を看よ、分明に是れ儞が春容を錯收了たるが爲に(三七)して題せるなり、儞悶む(三八)莫要れ、從容と訪問して取還し來るを待たば便ち是し、只是也甚麼の飛雲とか叫做り。

細かに(三九)情詞をば詳玩へば、又別に雲娘有りて儞が(四〇)春風嬌面を省識。

〔川撥棹〕〔小旦〕 儞丹青善けれど(四一)奴福分の能く玩展する沒し、那ぞ知らむ(四二)王謝堂前に落在るを、那ぞ知らむ王謝堂前に落在るを。

那の燕子呵。

蜂媒蝶使の傳ふるに勝れり、這の(四三)天機は偶然に非ず、(四四)緊しく收藏みて等閑にする莫れ。

霍郎よ、這也等閑に非ず、儞好く收著て、(四五)場後を待ちて從容と這の畫の下落を尋問なば便了。

〔丑(四六)保兒に扮し上る〕 好く傳ふ(四七)折桂令、報與す(四八)探花郎。霍相公よ、時間に鮮于相公說へり禮部今日出的告示有り、明早就ち(四九)進場を要すと、請ふ(五〇)五更頭に早く去け。

【三九】情詞。情多き詞(ウタ)。
【四〇】美人の面をいふ。
【四一】我には汝の畫を愛玩する幸福なし。
【四二】王謝。晉の王導と謝安。劉禹錫の詩に舊時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家とあり、上文の意は、斯の畫が名家の手に渡つたかも知れぬとの意。
【四三】天機。自然の機運。
【四四】緊收藏。大切に保存すること。
【四五】場後。試驗の後。
【四六】保兒。妓家の若者。
【四七】進士に及第するを折桂といふ、折桂令とは試驗施行の命令といふが如し。
【四八】唐に於ては探花郎とは試驗及第者の年少者を云へり、後世第三位の及第者をいふ。此句にては將來の探花郎といふ意なり。

〔生〕 知道了。〔丑下る〕

〔生〕 怎麼陡然就ち(五一)開科し起來たるか、我が身子は曉風を冒了、些の爽からざる有れば、且つ小閣の中に在りて將息將息む、這の筆硯各件は雲娘を煩はす、我に替つて(五二)打點打點せよ。

〔小旦〕 理會得。

〔尾聲〕 (五三)春闈日を刻る青錢の選、(五四)香を偷む手をば好生磨鍊し、頭一發を折得、春風に(五五)杏園を出でよ。

曲江・錦箋を拾得して回り、
(五六)東閣賢を招き此日開く、
十二樓中紅粉笑ひ、
齊しく看る高く(五七)碧桃を折り來るを。

【四九】進場。試驗場に入る。
【五〇】曉明の頃。
【五一】開科。試驗施行。
【五二】打點。しらべて準備を整ふること。
【五三】春闈。進士の試驗場。刻日。日限をかぎること。青錢選。昔張鷟は青錢學士と號す萬選萬中といふ。
【五四】晉の韓壽は賈充の女と私かに通ず、時に西域より奇香を貢す、天子之を充に賜ふ、充の女偷んで壽に贈れる故事に出づ。偷香手とは女を得るの手といふことなり。
【五五】杏園。長安の傍に在り、唐時進士玆に遊べり。
【五六】東閣。漢の公孫弘丞相と爲り東閣を開き賢人を延きたる故事に出づ。四方の賢才を試驗すること。
【五七】碧桃は天上神仙の果なり、高くして得難き物。